なりました。其れを今こゝで突然あなたに行かれて了ふと、又教師を替へんければ成らんし、いや、代理のものはお知己中に幾程も御座らうが、然し、私はどうも貴下のやうな、忠實な親切な方は見出せるものでは無いやうに思ふので、全くあなたを見放し度くない。母は御存じの様にあゝ云ふガラ〳〵者で、とても秀男の教育なぞ任かして置けるものでは御座らぬから、どう有つても此儘末長くあなたに御頼み申さねばならん。園子さん、私は全く……あなたもお察しなさる様に、老後の樂み、一生の目的とも云ふのは、全くこの秀男を完全な人間に爲立てゝ、立派に世の中に出してやり度いと云ふ事ばかりぢや。其れには是非とも、私の無理も御座らうが、御都合なすつて何卒其様な事はお思ひ返しを願ひ度い……。」

老人の面に溢ふるゝ至誠の色を見ると、平素から深い同情を寄せて居る園子は、もう強い言葉は云はれ無くなつた。どうしやうか？　少しく最初の決心が動いて來ると、抑も一番始めに老人の心根を聞かされた時、自ら心を決した其言葉が、同時に胸の中に呼返されて來るのである。自分は黒淵一家に對する同情の念と、社會に對する義憤の情から、此の不幸なる老人の心を慰むるやうに、出來得る限りの誠實と熱心を以て、老人が愛兒の教育の大任を負はうと決心したのではないか。其を今、云はゞ些細なる自分一個の感情から、無造作に暇を告げて此の一家を見捨てやうと云ふのは、少しく輕卒である、決して賞讃すべき事では無い。と、園子は熟て一時の決心の餘り正當でなかつたと云ふ事を反省するやうに成つて來た。

「園子さん。如何なものでせう。此程お願ひしても、御都合は出來ますまいか。」と老人は氣遣はしさに堪へぬがやうに園子が俯向いてゐる顔を覗込むと、秀男は今は話の次第を察したものと見えて、

「先生、可厭ですよ。僕はもう他の先生は可厭です。」と同じく顔を突出すのである。

愛らしい此の聲を聞くと、園子は深く感動せずには居られない。全く凡ての事を忘れた様になつて、「思ひ直しました。ちよッとした事から、このやうな事をお話して、御心配を掛けまして濟みませんでした。其では此の後とも私見たやうな者でも、熱心にお世話を致しますから、どうか今の事は此儘になすつて下さいまし……。」

今は聊か其の輕卒を恥しいと思ふ念も添はつて來て、園子は再び堅く心を決したのである。老人は飛び上るやうに喜んで、表座敷へ行つて、紅茶を喫しながら樂しい談話に耽ら

うと云ふ事を勸めたので、園子は庭から老人に從つて歩行を移したのである。

月は早や松の梢に昇りかけた。細い其の葉蔭を漏れ來る光を浴びて、風の來る可い場所に各席を定めると、老人は手を鳴らして、夫人の縞子も此處へ來るやうにと云ひ傳へた。園子は折角の樂しい時を……と思ふけれど、顏色にさへ顯しては成らぬ場合、是非なく默して居ると女中は直ぐさま戻つて來て、

「旦那樣。あの、奥樣は、何だか風邪を引いたやうで心持が惡るいからと被仰つて、もうお寢りかけた處で御在ます。」

「何に、風邪を引いた？　先刻までそんな樣子も無かつたのに……困つたもんだな。」

「へえ……。」と何ともつかぬ返事をする。

「先ア、大事にする樣に云つて呉れ。其から早く、お茶を持つて來てくれ。」

女中は立去つた。園子は夫人の見えぬのを喜ぶものゝ、心の中には又しても、夫人は何故其の樣に執着く振舞ふのであらうか。風邪と云ふのは云はずとも僞りである事は明かである。夫人が其の良人と茶を啜る事を拒み、或は自分をかく迄に憤り、かく迄に辱しめ、そして遂には一緒に茶を飲み話をする事をも好まぬ樣になつた……と疑ふまいとしても自

然と疑ひたくなるのを、再びハッと心附いて四邊を見廻はすと、何時か紅茶の碗と菓子皿は座敷に並べられて居た。

老人は靜かにコップを取つて、「今時分、風邪を引くなどと……大方寢冷えでも爲たんだらうが。」

「さうかも知れません。」と園子は少しく心配さうな老人の樣子に默つても居られなくなつて、低く答へた。

「いつも、平素から藥など滅多に飲んだ事のない身體なのに……。」と老人は晩年の氣苦勞から、漸く浮かぬ顏附をして、もう折角の豫想した樂しい席も淋し氣になる。

園子は老人が僞りの病氣とも知らず、眞心から其の妻を氣遣ふ樣子を見るともう氣の毒で堪へられなくなる。

續いて、此れ程正直な老人を、社會は何故いまだに兎や角と昔のまゝの卑しい者として、其の感ずべき悔悟の德を賞讃しないのであらう。眞の悔悟と云ふものは實に得難い事であるものを！　と園子の心は更に大なる同情を呼び集ねばならなくなつた。

「御心配なさるには及ますまい、平素から御丈夫なのですから、もう明日位は……今夜早

くお休みになつたら、屹度お直りになりませう。」

老人は頷附いて、園子の顏を見たが、夫人に關する此等の話から、長義の心の中には其妻に對する――結婚した當時の事や其後のさま〳〵なる事情の追想が、ゆくりなく思ひ出されて來たらしく、一層暗い顏付になつて、

「園子さん。お話しすると、老人の愚痴になりますが、どうも兒供の時の敎育を等閑にしたものには困る事が多いもので、家内なども、さう申すと自分の恥をおはなしするも同じ事になるが、全くその、自分の兒供に對しても一向注意をして遣りませんでな、唯交際とか何とか自分の事ばかりを第一にして、家庭の敎育とか或は一家團欒とか云ふ内輪の事には、トンと心を留めないから、度々私も意見をして見た事もあるですが、どうも心から私の云ふ意味が能く分らんやうで、今では私も此れは駄目な事とまア諦めて了つたやうなものです。」

老人は追々其の年と共に名望の念の薄らぐにつれ、今は一家只相樂しく、小いながら樂園のやうな家庭を作らうと、この一事をのみ望んで居たのである。然し、夫人は其の性質からでもあるか、別に夫の希望を滿たさうとも試みず、さうかと云つて、際立つ程夫を不

愉快ならしめる樣な擧動をするでも無い。夫の心が段々に活氣少なく衰弱して來るに從つて、今日の如きに至つては、殆ど夫の事や凡て家庭の事抔は可いも惡いも眼中にないと云ふ姿で、自分一人、其の健康な身體に伴ふ華美な精神の要求を滿す爲めに、衣服や頭髮の裝飾や、些細なる流行にまで浮れ狂じて居るのであつた。老人の長義は快く返答をして聞いて呉れる園子の樣子に、知らず〳〵其の妻に對する愚痴を繰返して居たが、秀男が其膝に睡り始めたのに驚いて、慌忙てながら席を立ち掛けた。

月は既に高く、打仰ぐ程に昇りつめた所から夜も最う十時近く或は過ぎた頃と察せられる。園子は老人に別れて、靜かに其居間に入り、自ら安息す可き夜の床を作つて其の上に横はつたが、だん〳〵に彌增して來る煩悶は、なか〳〵心地よき睡眠を許すものではない。心の悶え、そは實に解く法なき絲の亂の如くであつた。老人が恰も血を分けた家族よりも親しく自分に物語つた言葉から想像して行くと、夫人は良人の沈みきつた有樣に少なからぬ不滿足を抱いて其結果は窃に大きな怖る可き罪を犯しはせぬか、と云ふ事は、一度心に抱かれた疑ひの念を、もう如何に押へやうとしても、いよ〳〵增長させるばかりになると、其の罪の相手をした男は誰れであるかと云ふ事も、又續いて疑はねばならなくなる。園子

は遂には自ら怖しくなつて、如何かして此の様な疑は消して了ひたい。如何かして、自分の心からは、その生命とする戀人の身の上に斯様な恐しい想像を加へる様な過ちを取除いて了ひ度い。あゝ！今夜は如何したら何時もに變らぬ樂しい未來の望みを包んだ優しい溫い夢の中に眠る事が出來やうか。と悶えに悶え苦しみに苦しんで、種々戀人に對する嬉しい空想に耽らうと力めて見たが、如何しても安らかに瞼を閉ぢて居る事が出來ないのである。園子は詮方盡きて、幾度か起き上つては又夜具の上に倒れて後、此の想像を消す爲めには、少しく庭の中でも歩いて見やうかと思つて靜かに先づ窓の戸を明けやうとすると、蟲の音に滿たされた庭の彼方にふと怪しい足音を聞附けて、覺えず其の耳を聳てたが、續いて容易ならざる顏附して、窃と雨戸を細目に、戸外の方を覗ひ見た。

第十三

心の底までをも透き通す程な月の光りに、あらゆる萬象は夢の中に見る物の如く、濃い水蒸氣を着ながら横はつて居る。

海の唸りと蟲の音と松風とが、或る調和を作つて、犯し難き夜の平和を歌つて居る中に、

一種物怪しい響は神祕の色に滿ちた大空の間から聞取られる。これは滿天の重い露が玉をなして滴り落つる聲であつた。

園子は振へる瞼を睜いて四邊を見廻すと、今一個の人影が、この靜かな夜の中に動搖して、海に面する低い垣根から消失せたかと思ふと、幾多の蟲が木の葉のやうにひら〳〵と飛散るのである。あッ！　と思はず驚く聲を發すると共に、園子は何か思當る事があるらしく、庭の上に滑り出ると、忽ち平素の沈着た反省力を失つて、夢中で物の影の後を追ひ掛け始めた。

同じく垣を越えて、見渡す限り白銀の敷物を敷いた樣に輝いた、砂原に出ると、早や一二町先きの稍低い砂山を行く物の影は、曇りなき月の爲めに明かに其の姿を見分ける事が出來た。何か華美なる浴衣に細い縞の帶を締め、束髮に結つた頭髮を散々に吹亂しながら、よろよろと蹣めきながら走つて行く樣は、恰も怖しい惡魔に乘移つられて、知らず〳〵深い暗黑な洞を目掛けて辿り行く人の如くに思はれた。園子は、追行く姿を認められじと、或時はそッと松の木影に潛み、或時はその行手を見失はじと呼吸を切らし跫音を忍んで走る事もあり、何時か知らぬ間に、漁師小屋の横手から、細い小道に這入つて、到頭小田原

の街に出たが、軈てかの南陽館の門に點されたランプの光の望み得られた時、ふッと搔き消すが如く姿を見失つて了つたのである。然し、園子はもう其の行先を能く知り拔いて居た。確かにさうとは思ひながら、現在の有樣に立及ぶと、今更らしく襲ひ來る驚きと、又堪へ得られぬ程なる怒りの情に、今迄は覺えた事のない嫉妬や、一種例へられぬ悲しみ——實に一度として經驗した事の無い種種な感情は一時に胸を突いて込み上げて來る。全く此の時の園子は、もう美々しき名の光を仰いだ人でも、或は犯し難き權勢を思うた人でも無い、唯だ狂へる戀の迷ひと止め難き嫉妬の焰に煽り立てられ、よろめく樣になつて、旅宿の門際に進み寄つたのである。然し此れから、自分は罪ある男女が會合の席を驚かす目的か、或は其の罪の蔽ふべからざる證據を目擊して來る計畫か、其等の事さへ思設ける暇なく、園子は玄關の片側の入口が（思つた程に夜も更けては居なかつたと見えて）昨宵の樣にまだ明け放されて居るのを見るや、づか〳〵と進んで行つた。其時出合ひ頭に園子の姿を見て聲をかけたものがある。

「や常濱さん、大變にお晩いぢや有りませんか。ま、どうか、此方へ。さ、御遠慮なくお上り下さい。」

園子は突如に水でも浴せ掛けられた樣に吃驚して、ぢつと相手を見ると、これは意外な、水澤校長であつた。何と云つて答へたら可いのか、實に其の當惑の程は喩ふる事も出來ない。園子は其手を取らんばかりに頻りに勸める校長に誘はれて、おど〳〵しながら、先づ下座敷の一室に坐つたのである。ぱつと明いランプの光に照らされると、園子は又一層の當惑……寧ろ座敷を馳出して了はうかと思ふ程に思ひ亂れる。と云ふのは、自分は亂次い寢衣の上に、汚れた醜い帶だけを締めて居た事である。

わが奉職する學校の校長に、此の不始末な姿を見せるのは、園子に取つて如何程辛い事であつたらう。此の夜晩く、此の風俗をして、誰を訪ねに來たと問はれたら、何と辯解しやうか。校長閣下をと云ひ逃れたら、何の故に斯やうな亂次い有樣をと、一方ならず其の無禮を責め正されるに相違ない。何れにしても、もう自分の信用の幾分かは剝除られたと思はなければならぬと、次第〳〵に悲しい心持になつて何時か手先はぶる〳〵顫へてゐたが、如何云ふ譯か、校長は別に其等の事には氣も留めぬ風で、いや、力めて園子に氣まづい思ひをさせまいと爲るらしく、たゞ取り留めない雜談に、一先づ自分の性質の磊落な事を園子に飲込ませて後、急に何やら用あり氣に席を立つて障子の外に出て行つた。

園子はほつと息を吐いたものゝ、何だか底氣味の惡いやうな安からぬ心地がするのである。頻りに情けない樣な顏附で、自分の身體を恨めし氣に見遣つて居たが、其時、大きく笑ふ男の聲が、何處からともなく耳に這入つた。笑聲と云ふのは氣の所爲でもあるか、どうも笹村の聲のやうに思はれたので、もう何事も忘れて了つて、葬と窓の側に進み寄り、明けられてあつた障子の間からきよろ〳〵其邊を見廻した。然し、窓の外は中央に泉水を作つた眞四角の中庭で、正面の並び連つた座敷の障子には、避暑客の無雜作な話聲が聞えるばかりで、最う再び其れらしい聲を聞取る事が出來ない。やゝ暫くは造つた物の樣に、身動きもせず一心に耳を凝したが、突然、後に人の來たのに氣附いて慌忙て振返ると、殆ど互に密接する程、摺寄つて座を占めたのは水澤校長である。園子は吃驚して後退りすると、水澤はぢつと其の顏を見ながら、稍嚴格なる調子を作つて、

「園子さん。實はちッとお話しした事がある。」

「何で御在ますか。」と園子の顏色はもう眞靑である。如何なる嚴しき詰問を發せられる事かと思ひの外、

「園子さん。あなたは何れ何處へか御結婚なさる事でせうな。」

「えッ？。」

「さうお驚きなさる事はない。今夜は是非其の事を御相談したいのです。」と氣味わるい卑しい笑みを浮べたが、折から、がらりと障子があいて、女中が盃洗と銚子とを運んで來た。

園子は最う思ひ掛けない事ばかりに驚かされて、氣も顚倒して了つたと云ふやうに、水澤がぐつと盃をさし附ける其迄は、强ひて辭退する語さへ忘れて居たのである。止むを得ず、園子は續けて二杯ほど盃を傾けた。幼い時分父の膝に戲れて冗談まぎれに嘗めた事のある外には、もう二十年此方、其の香さへ嗅いだ事のないので、熱い酒の醉は、忽ち園子が全身の血を騷がし始めた。校長は膝を進めたけれども、流石少し伏目になつて、

「園子さん。私は久しく思つて居た事がある。今夜は是非とも其の御相談をしなければならない……いや、是非とも聽いて戴きたい事があるのです。」

彼はもう四十を越した、色の黑い其の唇から突然若い時代の物優しい聲を作つて、園子には思ひも掛けない申出しを敢へてした。乃ち結婚を承諾して呉れと云ふ事である。水澤は最初の配合に死別れた後は、間もなく自分とは二十歲から違ふ年若い妻を娶つたが、一昨年の春、其れにさへ病死されて、この二年間は獨身の淋しい生活を送つて居ると云ふ事

は、園子も能く知つて居た。で、この申出しは自分に對して、決して一場の冗談ではない、自分が雇はれて居る學校の校長と云ふ關係からしても、最も嚴格に又沈着に其の返事をせねばならぬと思つた。再び答を促す校長の問ひに應じて、園子は遂に斯う云ふ返事をしたのである。

「私見た樣なものを、其程に被仰つて下さいますのは、誠に何とも申しやうが御座いません。ですけれど、あの……私の身體は他家へ參る事の出來ない身體なので御在ますから……。」と常濱の名跡を繼ぐ爲めに養子婿を迎へねばならぬ事を說いた。

「はア――」と校長はもう强ひてとは云はれなくなつた。根據なく、此の事件は再び思案してから、御相談したい。と云ふ事に終局を告げると、園子は、もう暫くの長居も心が騷いで、更ける夜の怖しさをも顧みず、直ちに旅館を出たのである。

門を出ると、直樣思返したのは、夫人縞子と笹村の事――二人は今も猶、何處か知れない一室に相對して居るのであらう。不意に驚かされた校長の申出しの爲めに、自分は實に忘るゝともなく忘れてゐた。園子は再び以前の樣に物狂はしく激して來る感情に、又もや旅館の方を振向いたが、其の刹那、もし校長に見附けられたらと云ふ一念が、僅に心の反

省を促したらしく遂に其の身を徐々として、物思ひ多き歸途につかしめたのであつた。然し全身の氣力はもう根底から奪ひ去られて了つて、丁度何か怖しい宣告を受た時の樣に、其の臥床に這入つた時には、顏色までが宛然死んだ人としか見えなかつた。

第十四

何時の程にか其の臥床に立戻つた居た夫人は、朝の十時過になつても、まだ起き出でぬのである。老人の長義は其の枕元に來て、病氣の容體などを親切に問ひ試みて居たが其日も午後の三時近く――涼しい風が暑さを吹き拂ふ頃になると、夫人は俄に東京に歸ると云ふ事になつた。非常に頭が痛んで、普通の風邪ではないらしい。この小田原には思ふやうな醫者も居ないと云ふ事から、重くならない中に、東京へ歸つて一日も早く診察をして貰はうと、縞子は一人、夫と子供を殘して、車を國府津の停車場に馳せたのである。園子も此の樣子に聊か事實であるのかとも思ひかけたが、其の日の夕暮、竊に南陽館の笹村を訪ねるに當つて、忽ち怖しい事實を捉へ得た。笹村は、大方夫人が乘込だと同じ其列車に間に合はせる爲めであつたらう。今日の午後已に出發して了つたと云ふ事を宿の女中から聞

いたのである。園子は實に打戰かるゝ程の怖しさと驚きとをいよ〳〵深くしたが、家へ歸つて其の居間に這入ると、丁度一枚の葉書――笹村から急用の爲めに歸京したと云ふ旨を記した文字を見てわッとばかりに、聲を呑んで泣伏して了つた。

噫！　園子は最う男の罪を責める勇氣も、將た自分の身の欺かれて居た事を憤る勇氣も……あらゆる氣力と云ふものは悉皆失つて了つたのである。自分は如何して、那の樣な汚れた男を信じたのであらう。あの人は如何してさう云ふ怖しい罪を犯したのであらうと、唯だ悲しくなるばかりである。笹村はそも何時頃から、夫人と關係して居たのであらう。自分と約束した以前からであるか。其れとも其の後の事であるか。兎に角、其の有樣から察すると、近頃は久しく往來を絶して居たのに相違ない。如何なる一時の過ちから、彼人は此の樣な怖しい事をして呉れたのであらう。自分には殆ど想像する事も出來ない程である。然し、昨日ふと其處まで思ひ至つた疑ひは不幸にも過たず、爭はれぬ密會の事實までを見た上は、此から自分の身は、彼の人に對して如何したら可いのであらうか。其の時の場合になつて頑迷なる養母に不承知を云はさぬ樣に、結婚の一事だけは必ず自分の自由に任して呉れと云ふ事は、其れとなく已に念を押して置いた事もあるのに、今は其も殆ど功な

き事となつた。彼人は全く自分の思つた樣に自分を愛しては居なかつたのである。其の口からは屢々愛の神聖を稱へたけれど、全くは只一時肉慾の目的の爲めに自分を弄んだのではないか。然し、其程不德な人物とも思はれぬ。バプテスマを受けた信者が神に對して誓ひをしたなら、もう其で疑ふ餘地はないのであるが、と云つて、此の悲しみを見る以上は幸ひまだ肉體の操と云ふものを破られなかつた事をせめても……として、此の戀を諦めて了ふ方が幸福であるだらうか。然し思ひ返すと、まだ自分はどうも彼の人を左程品性の卑しい人物とは思へぬ處がある。自分は暫く其の秘密を見究める迄は……いや〳〵、自分は進んで、那の人に一日も早く罪の後悔をする樣に勸めねばならぬのだ。此の秘密が萬一老人の耳に這入つたなら、如何なるであらう。唯一心に家庭の和樂を望んで居る老人の身は如何なるであらう。

一方には、男の過ちを悔悟せしむる事は云はゞ其の男の戀人としての勸めである。一方には、この秘密を老人に知らさぬ樣に其の心を慰めるのは、老人に對して自分が日頃受けた好意に酬ゆ可き第一の事である。園子は稍心の勇氣を恢復し得て、早速に手紙で、其れとはなく男に自分の誠を書き送つて遣つたものゝ、然し、激しい心の痛みと悲しみは夜毎

夜毎止め度なく、絞る程に袂を濕らすのであつた。

この涙の中に、やがて七月も末近くなつた。夫人は其なり小田原には歸つて來ない。大方東京の空邸に道ならぬ樂みに耽つて居るのでは無いかと思ふと、實に何とも云へぬ心持がする。八月には東京に歸つて結婚の準備をしやうと思つて居た事も、今は全く思ひ棄てゝ了はねばならぬ。望みの無い八月も到頭非常な暑さを以て進んで來たが、やがて或る朝の事、園子は驚騷ぐ老人の聲として、頻に園子さん／＼と、呼んで居るのを聞付けた。

何事が起つたのか？　園子は萬一やと先づ呼吸も苦しい程に、胸を躍らせながら、急いで老人の室に坐つたのである。

老人は何時か悲しい顏をして、手に一枚の新聞を持ちながら、情無いと云ふやうに、園子の顏を見た。

「どう爲さいました。」

「園子さん。……もとはと云ふと皆私が惡かつたのぢや！」指しながら新聞紙を園子の前に差出したのである。

「何で御在ます。」と問ひながら眼を移すと、雜報欄の一番始めに、二號活字で向島の妖窟！

正義の士は猶ほ黑淵家の名を記憶せるならん!!　と云ふ樣な表題が、如何にも人の好奇心を引くやうに幾行にも記されてあつた。夫人に關する事では無かつたのか、とほつと息はついたものゝ、なか／＼安心する事は出來ない。拾ひ讀みに略つて讀んで行くと、其の要領は富子に對する攻擊で、向島の樹立深い屋敷の中に、一軒の離家があつて、其處は富子が藝人を引込んで淫樂に耽ける祕密室であると云ふ樣な事から、猶ほ廣い屋敷の中には幾間も暗室が出來て居て、隨意に其處へ來る婦人の客にも淫樂を滿たさしめる事抔を記載したが、園子は其の樣な暗室や殊に樹立の間には涼亭より外には何にも無い事を知つて居るので、此れは大方針小棒大の新聞紙が營業的の揑造說であらうと思つた。然し、平素の富子が言語や樣子から思ひ合はすと、俳優を招いて酒宴の興を添へしめる位の事は事實であると爲ねばならなかつた。園子は顏を上げて、

「あなた。此ん樣事の有らう筈は御在ません。」と老人の心を安めるやうに事も無げなる調子を作つた。

然し、老人は甚く沈んだ聲で、「いや、其程ひどい事はないにしろ、全く影も無い事とは云はれません。園子さん。私の一家は實にお恥かしい事ばかりです。」

園子は暫く慰める語を見出し得なかつた。老人は鳥渡俯向いたが、直ぐ顔を上げると、心から悔恨の調を帶びた悲しい聲音を漏して、

「然し、園子さん、私は決して、あの樣な不行跡な娘の身を憎いとは思ひません。私はつくづく……此は皆な、つまる處私が惡かつた故ぢやと思ふので。もし私が立派に社會へ表立つて行ける身分であつたなら、例へ其の日の生活に困しむ樣な身分でも、娘は決して那の樣な僻んだ考へを起しはせん。其を思ふと、私は人を怨むよりは先づ自身がした過ちを憎まなければならん。全く私は惡い事をした！　恥づ可き事を爲たのだ……」

今や、燦たる黃金の光と、あらゆる榮華を包んだ廣大なる邸宅とは、彼にとッて何の價があらう。深き悔悟！。

然し、其れはもう無用であつた。寬大なるに似て、又一面不思議にも意地の惡い正義の槌を有する社會！、其れは永久にこの老人の悔悟を認めぬのである。否、ますます深く、一度負はした罪の下に老人があらゆる望みを葬り盡して了はうとするのである。

園子は別に慰める事も出來ず、唯だ平素と同じやうに眞の悔悟と云ふものは實に得難い德である。嚴然たるこの悔悟の境に這入る事が出來たなら、如何なる罪も拭はれるであら

う。社會の輿論は決して正しいと限られたものではない。人は自ら僞りなき自分の信仰によつて安心の地位に立てば可い。と云ふことを繰返した丈けで、軈てこの座を退いたが、新聞の記事は其の翌日から續いて毎日毎日掲載せられる樣になつたので、老人はもう一方ならぬ苦悶のあまり、一人東京へ歸つて、一先富子に逢ふて、事の虛實を聞訊さなければ、どうしても氣が安まらなくなつて來た。

五日目の紙上には、最も猛烈なる惡罵の文字と、卑猥なる淨瑠璃的の章句とが一般の讀者には殆ど小說よりも趣味を惹くやうに記されて居たのである。

第十五

老人は園子に秀男の事を云置いて、遂に其の日の黃昏、一人國府津から汽車に乘つて、軈て九時過ぎ小石川の邸宅に着いたのである。不意の歸宅に驚いて、狼狽する女中に、老人は先づ帽子も脫がぬ先から夫人の病氣は如何樣であると質問すると、女中は少しく不審な顏をして、

「奧樣は唯今、お客樣が被居つて、奧のお室にお居でゞ御在ます。」と答へた。

「誰方だ？」

「あの、笹村さんと被仰いました。」

「さうか。」

其の以前から、度々顔も見知つて居るし、殊に園子を自分の家に紹介して呉れた人であると云ふ處から、別に遠慮する客でもないと、老人は長い西洋館の廊下を過ぎ、日本家の廣い縁側を歩んで、一番奥の夫人の居間に這入らうと、先づ其の閉められた障子を明けると、唯だ美しいランプの光が夜の座敷を照して居るばかりである。

如何したのかと少し驚いて、縁側に佇むと軈て、遠く庭の樹立の間から如何にも他愛なく打笑ふ夫人の聲が幽かに聞えた。

老人は直ぐ庭下駄を穿いて、樹立の奥の四阿をさして歩いて行つた。深く庭を蔽うた苔と芝は、決して人の跫音を響かせ無い處から、夫人は誰が來るとも氣附かぬらしく、頻りに遠慮なく笑ひ戯れる聲がだん〳〵と明かに聞かれる樣になる。今、老人はよた〳〵と四阿から二三間此方の池の側まで來たが、餘りに心なく、又餘りに普通の客に向つては云はるべき事でない言語さへ聞えるので、窃と木の葉の間に身を潜めて、向ふを透し見た。空は昨夜とは變つて薄い村雲が絶えず明い月を曇らせる。一時四邊は眞の闇にされたが漸くに黒い雲の一角から漏落ちる光を得て、老人は其鈍い視線を定めると、實に意外な光景に接したのである。老人は覺えず其の眼を他へ外した程であつたが、其の瞬間に村雲は又も四邊を眞暗にした其の闇の底から、今度は恰も二十代の若い娘に立返つたやうな夫人の呼きが、忠實に凡ての物音を能く傳へる澄渡つた夏の夜の空氣を通して老人の耳に達した。老人は電氣に觸れた如く、衰へきつた總身の肉を戦せたが、忽ち地面の上に腰を突き、木の間を越して暗黒な大空を打仰いだけれど、やがて、鏡の如き月が再び漏出ると、この曇りなき清い光に照らされるのを恥らうが如く、もう二度と顔を得上げず、悄然として跫音を忍びながら、座敷の方へ歸つて行つた。

夫人縞子は何事も知らず、餘念なく男の膝に恁れて居た半身を起し、

「笹村さん。あなたはもう園子さんとは屹度切れて呉れるんでせうねえ。」

男は輕く頷付いて、猶ほ夫人の手を握つて居た。夫人は今迄、胸に滿ちた懸念と心配とが、悉皆拂ひ去られると、もう何にも喩へる事の出來ない嬉しさが恰も暖い熱帶風が世界の春を促す樣に心地よく全身の血を若返らした。抑も初めて笹村の訪問を受けた其以前

から、夫人の身は長く一つの不滿足を以て蔽はれて居た。と云ふのは、其の年齡の進みに似合はず、若い時代其儘の健康を保つて居る軀體に伴つて、自づと盛なる血氣は、到底凡ての望を失した陰鬱な夫長義の老衰と並び行くものでは無い。この點から起る種々なる不滿足を、夫人は先づ劇場、集會、會堂と賑かな場所を選んで其の間に聊か心を慰めて居たが、不圖した事から笹村と知合ふ樣になると、もと〳〵敎育の乏しい、道念の少い夫人の心には、甚だ容易くあるまじき空想を描き出すやうになつた。一度亂れた心は最う全く夫人をして、富豪の令夫人ではなく、かの外國人の妾であつた時の樣な輕佻いお縞にして了つて、丁度或る黃昏の事、矢張この四阿で、忽ち一時の滿足を買ふ事が出來た。夫人は自分の手腕によつて否少くとも自分があつたればこそ、夫は大きな財產を所有する事が出來たのだと云ふ事を、顏色には現さないけれど、いつも其の心の中に持つて居たので、夫に對してはさほど心に咎める所が無かつたのであるが、然し、流石恐るゝ所は、一度手嚴しき攻擊に最初の大きい希望を破壞された新聞社の耳である。夫人は恁う云ふ事から、先づ幾度か美しい俳優の面影をも强ひて心の外に打消して居たが、今笹村は一方には文學者一方には宗敎家と云ふ淸い名を持つて居る處から、決して其間の祕密は自分の方から現さな

い限りは知れる事は無いと思つた。然し笹村の方は、なか〳〵其の樣な分別をする暇はない。夫人が優しい手に强ゆる西洋酒の醉ひと、嘗ては花柳の巷に幾十人の心を弄んだ其の昔し覺えある手腕に誘はれては、どうして其儘淸い心を持つて居る事が出來やう。殆ど魂を引拔かれた樣に夢現の中に、夫人が罪惡の分配を取つたのである。

實に恐しい强大な力を有つて居るのは、この一片の慾情である。

笹村は疑ひもなくパプテスマを受けた文學者である。莊嚴なる或は愉快なる太陽の光線に照らされて居る時は、正しく純潔なる神の信者であつた。然し暗黑なる夜の世界の來る時、力ある罪の翼を振つて惡魔の襲ひ來る時、伏して救の祈禱をなさねば成らぬ時、彼は忽然として、其の祈禱の言葉を思出すよりは、先づ惡魔の呟きに耳を傾け樣とするのであつた。彼は時として夜更の街を流して行く淨瑠璃の三味線や、又は遠い上野邊りの鐘の音が、遊廓の趣味を多からしめる戲作本の形容する樣に、一種の響きを以つて傳はつて來るのをも聞いたであらう。然し、この哀れな靑年の身を包む宗敎と道德は、嚴しく其の身を苛責んだ丈け、又決して賤しい巷に近寄らしめる事は無かつたのである。彼が夜に於ける心の衰弱と晝に於ける功名心の勃興とは、其の生活の上に全く劃然たる不思議な區別を作

る様になつたが、此の區別は年と共に正しく其の調子を變ずる事なく進んで行つたのである。恰も洪水の溢れやうとして危くも堅固な道義の堤に遮られて居る如くであつた。然し、不幸なる機會――夫人縞子の意外な誘ひを受けるに及んで、哀れにも堤は忽ち壞されて了つたのである。

彼は夢心地になつて歸つて來て、自分の室に横はると、已に心の中に滿された怖しさは、最う此の儘地獄の底に沈められるのかと思はれた程で、泣きながら暗い中に神の救ひを叫んだ。然し、一度破られた道義の堤は容易に修補はれるものでは無い。彼は其後漸次に夫人の身に近く事を避けたものゝ、一度罪を犯した身は、最早や再び以前の樣な德行を保つ勇氣を呼起す事が出來ないので、軈て窃かに、自分が知己の女の名を指折りはじめたが、第一番に最も美しいものとして園子の名を見出し得た。向島から別莊の歸途、この望みは思ひ掛けなく滿足されたけれど、然し豫期した丈けの望みは得られずに却て夫人との關係を離れ難ないものにして了つたのである。

「笹村さん、眞實に堅い約束をしたんですよ、能御座んすか。これから浮氣をすると、笹村さん、私は命がけで其の御恩返しを爲ますからね。」夫人は若い男の可愛さに堪へられないと云ふやうな調子で云つた。

夫人はかの小田原で、自分の男を園子に奪はれた事を悟つた時は、實に胸の中が燒け爛れて了ふかと思ふやうな、續いて何とも云へぬ悲しい心持がしたのである。自分は今もう四十……五十に……近いと云ふこの自覺の聲は、直に凡ての望みを葬る葬式の鐘の如く、心の中に響いて來るのであつた。如何したら、男の愛情を繋ぐ事が出來やうかと底知れぬ悲しみに沈められたのであるが、今、再び其の膝の上に男を捕へる事が出來たと思ふと、最う何の分別なく唯他愛ない嬉しさを禁ずる事が出來ない。笹村も又、かの南陽館の一室で手中の珠を落した樣な心地のした以來、其の精神は餘程の狂ひを來たして居た上に、今は次第に以前の樣な恐怖の念も薄らいで來た處なので、大膽にも夫人のなすが儘になつて居た。軈て何方が云ひ出すともなく、凉亭を出た。

軈て家の建物近くなると、二人はもう全くの、夫人と其の客と云ふ互に禮義を持つた態度になつて、各樣子を作つた歩調で歩いて來たが、其の時、女中が、

「奥樣。旦那樣がお歸りなんで御在ますよ。」

「え。どうして……。」

流石夫人は少しく聲を喘ませると、笹村はもう眞青になつた。

「何う遊ばしたのか存じません。西洋間のお部屋にお居でゞ御在ます。」

「さうかい。」と夫人は女中に氣取られまいと、頻りに打騷ぐ胸を無理に押えて、

「今參りますと、さう申してお呉れ。」

慌忙て笹村を歸した後、夫人は靜に良人が居間の扉を明けた。

第十六

心を潜めた儘、暗澹としたランプの火影に、其の白髮の半面を照させて老人は洋服ながらに、長椅子の上に横はり、苦しい眼をぱッちり睜つて、室の壁にかけられた一片の畫像を見詰めて居た。乃ち、此の夫婦がまだ互に樂しい三十代の若い手を取合はした結婚當時に畫かしめた畫像である。老人は深い感慨に沈められて居るらしい其の樣を見るや、夫人は先づ容易ならざる苦痛を覺えて、此の儘室を逃れ出やうかと思うたが、又忽ち思返したらしく、「あなた！」と一聲呼んだのである。

聞えないと見えて、老人は兩手で頭を抱えて大きな溜息を吐いた。

「あなた。どうなすッたんです。」

老人は物に襲はれた如く非常なる驚愕を以て、椅子から飛上つたが、暫くは夫人の顏を見詰めたなり、軈てドッサリ再び椅子の上に倒れた。

縞子は此の樣子にいよ〳〵尋常事でないと、自から顚へて來る手先を堅く自分で握締め、僅に調子を作つて、不意の歸宅は如何なる譯であつたかと云ふ事を、懇ろに問掛けると、漸くにして、其の譯と云ふのは、新聞紙の一件から、富子に逢ひ度い爲めであるとの答へを得たので、聊か安堵して、自分の病氣も案外にさしたる事はなく十日ばかりで全快したから、もう明日あたりは小田原に歸らうと思つて居たのだと云ふ事を話した。

其の翌日、老人は午前の中に、東京は恰も八月の燒けるやうな暑さにも係らず、馬車を馳らせて、向島の富子の邸宅に赴いたが、門を這入らうとすると、其の邊に遊んで居る兒供達が、

「やアい。淫亂屋敷へ馬車が來たぞ。」と囃し合ふのを聞付け、先づ豫想外の驚きに襲はれたのである。軈て富子に逢ふと、娘は又平然として何處を風が吹くかと云ふ樣な態度である。老人は却つて娘から彼女が社會に對する種々の痛罵を聞かされた上に、新聞の一條に

附いては少し譯のある事だと云ふのである。

「お父様、もう其様事を御心配なさるには及びません。此間新聞社の奴が、お金を强請りに來たのを見事に跳ね附けて遣つた仕返しに、あんな事を書いて居るんですから、一々お取り上げなすつちや眞實に困りますよ。新聞社の奴等と云へば、大概は破落戸同様な者ばかりで、前科者の寄集りとさへ一口に云ふ位なんですもの。其奴等の云ふ事を眞實にして讀む様な世間なら、もう私は其様目先の見え無い世間は眞平ですからね。何とでも勝手に云はして置く方が能御座んす。私達見たやうな者を種にして新聞が賣れると云ふのなら、膽斗儲けさして遣るが可いんですよ。鵜の目鷹の目で人の缺點を搜して歩いて居るんですから、考へて御覽なさい、餘程惡い月日に生れた人達の仕事ですわね。」

二三日經つと新聞の記事は富子に關する材料が缺乏して來た爲めか、今度は其引合ひに老人の身の上や、夫人の素性――嘗て二十年程前、某新聞が書立てた事柄を、今更らしく探知したやうに繰返して揭載し始めた。老人は毎朝誤れる其の記事を讀むに連れ、坐ろ昔の事を回想すると同時に夫人が今日の不品行……自分の體面を全く無いものにした激怒の情に狂せねばならな、なつた。

二十年の昔、自分はその室の壁に掛けられた肖像の通り、色白の華美なる青年であつた。其の時お縞は親族と云ふものは一人もない、寄邊なき長崎の藝奴であつた。宣教師B――氏の手に助出されて、自分より外には知るもののない祕密にされた榮華の中に圍はれて居た。宣教師が死亡した後、お縞は其の遺言通りに驚く程巨額なる財産の半分――乃ち英國孤兒院に寄附した殘りの半分を讓受けた。自分は聊か安からぬ心地のしながら、遂にお縞と結婚をした事抔を、眼に見るやうに思ひ浮べた。

續いては、遍く社會から卑しめ退けられ、今に至る迄表立つて世間に出る事の出來ない、長い二十年間の煩悶――如何なる目覺しい活動も容易に出來得る富を持つて居ながら、空しく燃え上る功名心を押附けて社會の以外に蹲んで居なければ成らなかつた、其の堪へ難い苦しみ。又は、自分の罪が其の娘の身にまで及んで、遂に此の如き誤つた婦人を作出した事や、深く心の底から懺悔した其さへも、遂に世間からは認められずに再びあられもなき誤聞を云ひ傳へられる悲しさ。

今は唯だ、人が最後の安寧を置く可き家庭の和樂、老後の唯一ッの望を掛けた此れさへも、何たる懲罰か！　わが妻は姦通の罪を犯して喜び狂つて居る。

あゝ！　唯一片の富を握つた一時の過ちは、かくも怖しく酷い刑罰を以て報いられるとは。

老人の眼は絶えざる涙に潤されて、現世に於ける望みと云ふものの影は、殘りなく奪ひ盡され冷たい死を望む觀念は盛に其心の中に萠出して來るのである。

久しく外國人に從つて通譯して居た丈けに、神に對する觀念のないではないが、寧ろ彼等の信用を得る手段として信者になつた位の事であるから、到底この悲しい運命を神の手に委ねて了ふと云ふ氣には成れない。兎角する中に、新聞紙の記事は進んで、どうやら夫人の不品行をさへ探知したやうな筆附きを帶びて來たのに、老人は最ういよ〳〵ぢつと爲ては居られなくなつて來た。

明日の紙上を、と言ふ危機一髪の記事を讀んだ其の朝である。老人はこの最後の恥辱だけは如何にしても世間に知したくない。何んな手段を取つても隱蔽して了はねばならぬと思つた。新聞社に幾何かの金錢を貪らせる心算で、箱馬車を準備さして、江戸川端を通り掛けると、其邊から、何やら自分を云罵るらしい叫聲が聞えるかと思ふと、突然、一發の石のつぶてが、ハッシとばかり車の硝子戸を打破つたが、途端に其の破片が深く額へ當つて血はたら〳〵と眼の中に流れ込んだ。

この騷動に止むなく屋敷へ引返すと、唯た今、夫人は何處へか外出した處だと云ふ事であつたが、然し最う其の行先を兎や角問ひ試みる勇氣もなく、老人は直に醫師を迎へて治療を乞ふたのである。

額には深く硝子の破片が落込んで居るばかりか、左の眼球にも薄い疵があるとの事で、七重八重の繃帶は只さへ暗い老人の半面を物凄く蔽ひ盡す事になつた。

血管の脈を打つと共に、ズン〳〵と響くやうな痛みと、非常な身體の疲勞とを覺えて、老人は弱々しい呼吸をしながら、久しい間死んだものの樣に長椅子の上に倒れて居た後、ふと何やら思ひ起した如く、苦し氣に起上つては見たが、此の八月中旬の眼も眩む程な午後の炎暑には到底如何なる車を以てするも銀座の新聞社まで出掛けられるものではない。

夫人はこの日中に何處へ行つて居る事か、まだ其の儘に歸つて來ぬのである。老人は再び倒れて又もやぢッと若い時の夫婦の像を僅に安全であつた右の眼で眺め遣つた。一時間程經つて、其の眼はハタと閉されると、一方ならぬ苦悶の色は皺だらけの頰の上に描き出され、手と足の先には細く絶えざる顫ひを帶びて來た。

廣い邸宅を圍む樹立の外には、この嚴しい暑さの爲めに、街は全く荒廢して了つた如く凡ての響を絶して居たが、天井の高い土造りの、西洋館の一室は、流石樹の間を漏れる僅かな風を得て、其れ程の暑氣も感じない丈け、又氣味惡い程、森閑として、時には怪し氣な物の反響する低い音が、四隅の壁から聞える。

窓から庭を眺めると、灰色に乾いて龜裂れた土の上に、樹木や、石材や、建物や種々な物の影は、墨よりも黑く描出されたが、其れ等を越えて滿目、殆ど云ふ事の出來ない無色の、殘酷な日光は、至極落着いて、而も猶、無限の熱度を隱して居ると云ふ風で、動ず迫らず照り附けて居るので、全く苦しい沈默に陷つた此の眞夏の眞晝は、若し單調な滿庭の蟬の歌を除いたなら、全く活きたる人生の面影を見出す事は出來なかつたのである。

老人は此の明い寂寞の中に、何時まで其の物思ひを續けるのであらう。

此の世に於ける凡ての望みを奪ひ盡された上に、猶恥辱多からうとする老人よ。惱みに惱み悶えに悶えた疲れた身體は、最早や此儘に、鞭なき苛責に堪へられなくて、哀れむべき最後を見るのではあるまいかと思はれる程に至つたが、折から、老人はスッと立上つた。そして卓子の抽斗から卷紙を取出すかと思ふと、最う熱心に筆を握りはじめた。

一時間あまりは、必死になつて書き續けて居たが、其の時、突然戸の明く音に吃驚して、卷紙を抽斗の中に押込むが早いか、屹と鋭い眼を据えながら振返ると、あれと云ふ驚きの聲と共に、有合ふ椅子の上にドッサリ腰を突いたものがある。

これは夫人の縞子だつたので、老人が全く顏色を變えた凄じい形相と其の半面の繃帶とに、思はず眞青になつたまゝ、最う口を利く事も出來なくなつて了つた。

第十七

新聞の記事の漸く進んで行くに連れて、園子は最う今日は、明日はと、ひたすら東京へ歸らうと思つて居たが、丁度、老人が新聞社を訪問せんとして負傷した其の夕方、突然、南陽館からの使だと云ふ者から、一封の手紙を受取つた。

開いて見ると、水澤校長からの書面で、箱根から沼津まで避暑方々少しく用事もあつた爲めに、意外に遲くなつて、今日の午後小田原に立寄つた。其の仔細は先達のお話を最一度よく御相談して見たいと思ふからで、是非とも、今夜お暇を見て御運びを願ひ度いと云ふ次第であつた。園子は際立つて其の訪問を斷る譯には行かぬ無い處から、止むを得ず、七

時頃から獨り水澤の室に訪れて行つたが、然し、前日の亂次かつた姿を恥ぢて、今度は洗立ての糊目正しい質粗な單衣に、束髪も後毛一つ無いやうに結直し、全く嚴然たる女教師の態度で、しとやかに挨拶したのである。

「よくお出で下すつた。まア、お樂に……。」と校長は極めて眞面目な語調を作つて居たが、軈て平袖の荒い旅宿の浴衣の膝を崩して、「東京とは違ひますから、園子さん。お樂になさい。私の方から、先づ失禮しませう。」

然し、園子は飽くまで、正しい姿を保つて、只輕く團扇を使ふのみである。

「先程申上げた通りで、園子さん。あの事に就いて最う一度親しく御相談を致し度いのですが……。」校長が云ひ出した時、已に命じてあつたと覺しい酒肴が運び出された。

「いや、其では。まア一ッ差上げませう。」

「どうぞ。私は戴けませんものですから。」

「まア、一杯だけお受け下さい。何だか手持無沙汰だと、かう云ふお話は誠に……お互に爲にくいものですから、はゝゝゝ。」

園子は漸く一杯を干した。

「園子さん。先達のお話のやうに……實は私の口から斯う云ふ事を御相談するのは甚だどうも、變ですが、全く先達のお話のやうに他家へ御結婚なさる事は出來ん事なのですか。」

「はい。左樣で御在ます。」

「あの。お宅の方へは、私の一條を御聞合せにでもなりましたのですか。」

「いえ、まだ其樣事は……。」

「はア。其では……。必ず如何しても不可いと、まだ私は全く失望して了ふには及ばないのでせうか知ら。」と水澤は園子の顏を見ながら、已に四五杯目の杯を取上げた。大方、話し憎い相談の氣まづさを酒の力で紛らすつもりでもあるか、又ぐッと飲干したのを園子に囑して、「お母樣の御意向を伺はない中は、まだ確かな處は分らないのでは有りませんか。」

園子は先づ杯の方を手に押へながら、「いえ、母の考へと云ひますのが、もとから私を……。」云ふ中に又一杯は盈々とつがれて了つた。止むを得ず一口啜つて下に置くと、校長は思ひ出したやうに、

「園子さん、麥酒なら宜いのでせう。今、さう云ひますから……。」

「いえ、もう……何方も頂けませんのですから、どうぞ、どうぞ、もうお構ひ下さいませ

ん様に。」

然し麥酒は又其の膳の傍のコップから溢れるばかりになつた。園子はまだ一度も斯ふ云ふ風に杯を強ひられた事が無いので、つがれる度に少しづゝ我慢しても主人の饗應を全く無にしてはと云ふ遠慮から　今は兩の頰が熱くなる程になつた。

「お母様の御考へと云ふのは……。」と水澤も大分赤い顏になつて、もう聊かの氣まづい事も無い様になつたらしい。

「家の名跡を繼がせます爲めに、私を養女に致しましたのですから、普通の事では他家へは遣るまいと思ふので御在ます。」

「あゝ。さうですか。其でお母様の御考へもよく分りましたが、あなたは……あなた一個のお考へでは私と云ふものとは……例ば私が苗字を變へる事に運びを附けましたなら、あなたは御承知なすつて下さるお考へなのですか。」

「ほゝゝほ、貴下が御苗字を……其様御冗談を。ほゝほゝゝほ。」

「いえ、冗談に御聞なすつては困ります。餘り輕卒に申し過ぎたかも知れませんが、其れは畢竟私の最後の決心なので、私が斯う打明けてあなたをお望みしたからは、是非とも御

承諾して頂かなければなら無いのです。園子さん。先づあなた丈けのお考へを聞かして下さい。」

園子は俯向くより爲様がなかつた。校長の性格は自分が嘗て想像したとは慥に多くの相違があらねばならぬ。第一に教育家としても好ましからぬ飲酒家であつた。其のみならず如何云ふ譯か分からぬが、其の云はゞ雇うて居る教師に對して、何の慮る處もないやうに、重大なる結婚の一條を事も無げに話しかけるのは、餘りに校長と云ふ名に對して輕々しすぎると、云つて可い。自分より外に誰も見るものの知るものが無い田舍であるとは云ひながら、少しく破廉恥と云はねばならぬ。此れ等の事實なくしても、今、自分は戀人――實に悲しい戀人を持つて居るからは、無論、其の相談には耳も傾むく可き場合でない。顧みると、かの向島の堤で、初めて親しい談話を試みて以來、一方ならず自分の說を迎へて居て呉れたのも、云はゞ全く斯う云ふ下心があつたからであるのか……と心附いて見ると、口惜しさと又憤る念がきざして來た。園子は明かに自分の意中を云ひ現して了はうかと思つたが、ふと餘りに云過ぎたら、先は兎に角、自分の雇はれて居る學校の校長である。凡て圓滑に穩便に斷る方が……と云ふ分別が續いて起つて來たので、靜に顏を上げながら、

「私の考へと云つて、今は別に……私は唯だ養母の云ふまゝになるつもりで御在ます。」
「はア。矢張りお母様の……。」と水澤は少しく困つたやうに見えたが。日本酒と麥酒を併せ飲んだ醉は漸く全身の血を熱くして來たらしい。水澤は思はず膝の上の片肱を滑らした なり、身體を少し横にして、「然し、園子さん、其はちッと頷附けない樣に思はれます、何故と云つて、あなたは、十九や二十の方ではないし、立派に一級の生徒をも教育して行かれる、何によらず確固たる考へを持つて御居でなさる方ぢやありませんか。其を……結婚と云ふ事には少しもお考へが無いなんて、はゝゝは、此れは何んです。敢て私に對するお考へばかりを伺はうと云ふのぢやありませんよ。一般に園子さん。あなたは一體如何云ふ風な性格の男子がお好きなのです。」
「如何云ふ風ッて、ほゝゝほ。まだ私は一度もさう云ふ事は考へた事が御在ませんもの……。」と又俯向いたが、俄に酒の爲めか頭の痛むのを覺えた。
「はゝゝは、園子さん。さうお隱しなすつちや不可ません。もう、今夜は、此處はあなた、東京とは違ふ。のび〳〵した自然の感情を遠慮なく話し合はなければ。ねえ、園子さん。さ、もう一杯お酌しますから、大に懷襟を開いてお話をしやうぢや有りませんか。」

「あれ、不可ません。」
又杯に滿されて、爲方無く一口附けたが、園子も今は十分な醉の爲めに、額からは玉の汗が流れる程で、少しく身體を崩さねば成らなかつた。
風が颯と吹いて來て、ランプの火を危く消すほどに搖動つたが、何處かの座敷で、雨が降りやア爲ないか、と云ふ聲が聞えた。園子はハッと氣付くと、もう意外に長座をしたやうに、夜も何となく晩くなつた心持がする、譯もなく胸安からず障子の間から外面を仰いで見ると、平素なら最う月の光が見えなければ成らない空は、暗澹として星さへも數へられない。
「水澤さん。私はもう御暇致したう御在ます。」
「まア、何です、今……九時を打つたばかりぢやありませんか。悠乎と……悠乎お話しなさい。」
水澤は少し横にして居た身體を起すと、フラフラする眼の前に、ランプの光に照らされた園子の姿が更に美しく見えた。
キチンと正しく帶を結び、束髮の間に少さいリボンの簪を挿して居る樣子が、其となく

偶然二年前に別れた若い妻の姿に似て居るやうな心持がすると最う何やら無闇に愛らしい氣が爲出して、是非とも此の女と結婚せずには居られ無いやうに思はれて來る。其と同時に、二年前の若い妻を持つて居た時分の樂しさと、其れを失つてから今日までの淋しさとが、際立つて思合はされ、もう此後は一日一夜も此のやうな淋しい目をするのは堪へられない。一時も早く、慰める相手を欲しいと急つて來る。水澤は醉ひの爲め、充血した眼を据ゑ、少しく際立つた調子になつて、

「園子さん。私は如何なる事情も排斥して、實はあなたを私の後妻にお貰ひ申したいのです。私が斯う云ふ望みを起したのは、お話しすると、もう餘程前の事で、一年ばかりも前の事ですが、まだ此れと云つて、一方には先妻の亡つた後、間もない事ではありますし、ついお話し申す折が無かつたのです。然し、もう打明けて私の……斯う云ふ缺點も蔽ふ所なく、あなたの眼にお見せ申したからは、どうしても此の事は御承知なすつて下さらないと私も非常に安心の出來ない譯になる。あなたに此の一件を御相談申すに附いては、無論、校長と云ふ態度を以てあなたに對する事は出來ないから、云はゞあなたの足下に戀の奴隷となつてお願ひするやうな譯、其れを此の一件が此儘に調はなくなると、私はこの後とも

あなたとは以前の樣に平然と顏を合はす事も出來なくなると云ふ始末ですから……。園子さん。是れは是非とも、お母樣とも御相談なすつて、御承諾なすつて戴かねばならないのです。萬一、あなたが何うあつても御苗字を變へる事が出來ないと云ふ樣な事になつたら私は構はん。あなたは何處までも今迄の御苗字を名乘つてお居で下すつて、子供の出來た時に其れを常濱家の名前にして、其後貴娘が私の家の戸籍に這入るとか、或は私の方からさう云ふ事にしても……其は先づ出來得る丈けの方法を取つて、兎に角、此の一件は御承諾下さいますまいか。こゝでは貴娘の、あなた一個丈けとしての御承諾を願ひ度いのです。」

「私丈けと申して……全く結婚の事は私一圖の考へ通りには參りませんのですから、もし此れが養女と云ふ事で御在ませんければ、其は私丈けの考へは遠慮なく誰方にでも申上げられるので御在ますが、全く義理のある中に養はれて居る身分では……どうか、一應話しをして見ます迄は、其の事は、お許しを願ひます。」

謙讓な、而して明晰な此の言葉に、水澤も最う其上をと强ひる譯には行かなくなつた。然し亂れたる心よりして見る園子の美しさ。云憎い相談を進ませる爲めに思はず醉ひ過し

た不體裁と、校長と云ふ體面を全く剝ぎ取つた其等の事情から起る一時の心配も、今は全く唯園子の美しさに迷はされた他愛ない心の狂ひに打消されて了つて、水澤は何と云つて、如何して、此の返答を得やうかと再び悶え始めた。けれども、最う最後の園子が返事に、何とも云ひ出すべき語を見出し得ぬのである。園子は今や靜に身の周圍をつくろッて、

「もうお暇いたします。養母には早速に相談を致して見ますから。其では、誠にいろ〳〵御馳走になりまして有難う存じました。」丁寧に禮をして立ちかけた。

水澤はもう自分の傍から美しい女を失すのかと思ふと、如何にも殘惜しい樣な唯無闇に傍に引附けて置き度い心持になる、が、然し立かけた袖を捉へてまで引止める譯にも行かず、據所なく

「どうも、失禮でした。」

と挨拶したが、突然思附いた樣に、「其邊まで、お送りしませう。お引止め申して大分晩くなつたし、今夜は生憎く眞暗で危う御坐んすから……何に、私もどうせ散歩するのですから、決して御遠慮には及びません」

園子は辭退する事が出來ずに、水澤と共に南陽館を出たのである。

第十八

雨を含んだ深い雲は暗黑の中に大空を葬り、かなり强く吹き出した重い風さへ今は濕氣を帶びて居た。西の果には折々淡い電光の閃きをも見る事が出來るので、何となく暴風にでもなりはせまいかと穩かならぬ心地のする處から、園子は海邊の近道を行くより、曲りくねつた街を遠いながら、明い方を歩いて行かうと思ふ途端、水澤は早や一歩先に、いつも海へ出る小徑へ曲つて了つた。後から呼び返すのも何となく好ましからず、寧そ近い道から早く家へ歸つた方がと、園子は其の儘暗い道に、いさゝか歩調を早めた。

「此れは眞暗だ。」と水澤は流石足元も見えない暗さに少しく驚いたやうで、特に醉うた歩行の稍もすると蹌き勝になつて、

「園子さん。危いです、最少し、ゆつくり行きませう。」

云ふが早いか、小石に躓いで、校長はハタと轉んだのである。

「あれ、お危う御在ますよ。」と園子は慌忙て水澤の手を取つて、扶け起した。

「や、恐入りました。」

水澤は柔い園子の手に引かれて、起上らうとする拍子に、少しく折屈んだ園子の優しい呼吸が軟かに、自分の頰に當るのを覺えたが、軈て佇んで裾や袂の塵を片手で拂ひ落す時には、暗みの中に園子の顏が染拔いたやうに白く見えるのを知つた。この時までも其の片手は殆ど自分には意識されぬ程、唯だ自然と放し憎くなつて、再び歩み出した折から、園子がそつと引除かうとした場合には、最う無理にも其を拒まうと云ふ心になつてゐた。

園子は手を取られると、俄に以前より一層歩みを早めて、もう何とも云はずに默つたまま、間もなく海邊の砂山を下りかけた。怖しい音して鳴り騷ぐ海面から、風は思ひがけぬ狂猛な勢で、時には顏も向けられぬ程、吹き荒れて居たのである。

「これは驚いた！」

水澤は獨語のやうに呟いて、砂山を駈け下りたが、此の時、久しく握合はした手は汗ばむ程になつて居た。水澤が全身の血はいつか激しく、心臟は何となしに音高く響くが如く心附くと、禁じ難き想像は自然と其れに伴ひ出される——若い妻と手を引合ふた樂みを回想するに付け、此の美しい園子の身を那麼云ふ風に自分の傍に置いたなら、と云ふ埒もな

い希望は遂に道理の念を離れて激しく心を襲ひ來るのである。

彼は今年四十も已に半ば以上を超した身を以て、何故其れ程に若い妻を望むのであらう。彼は家の貧しかつた爲に、政府の費用によつて衣食する事の出來る官立の師範學校に這入つて、卒業後は彼方此方と中學校や尋常師範學校の教員を勤て居たが、五年以前朝野の紳士が發起にかゝる□□女學校の校長に推薦せられた。然し、彼が生附きの性情は決して、斯う云ふ堅苦しい職務を望む者ではなかつた。彼は始め三年間、官費卒業生の責任として教育事業に身を置くと云ふ定められた規則から逃れ得た後は、直ちに他の品行上の束縛なき職業を見附け度いと思つたのである、けれども到底其の望むやうな事は出來なかつたので、不滿足ながら、續いて永久教育界に身を置かねばなら無くなつたのである。段々地位の進むに從ひ其責任は重くなる。其に反して、生活の方面は漸く自由になると、萬一是れが束縛少き境遇であつたなら、折々は放埒なる愉快に心の疲れをのびのび爲せる事も出來るのだと思ふと、もう如何にも堪へられない程、自分の職責の苦しさを感ぜねばならぬ。只だ醉うて放歌高吟するが如き放縱無賴なる一種の趣味、少しく反省して見たなら、其等の愉快の缺乏は人の一生に對して能く何れ丈けの影響を及し得るか、實に思ふも愚な

事であらうけれど、全くさう云ふ趣味からは根柢よりして遠からねばならぬと斷定されてしまつた身は、恰も一生禁錮の宣告を受けた囚人が暗い牢獄の窓から、自由なる世界の空を仰ぐと等しく彼は頻りに故郷の中學校に居た折り善からぬ行ひをした事抔を追想する樣な事もあつた。煩悶の極、寧ろ絶望的なる決心をするに至ると、軈て極端なる嚴密の道德を主張して心を慰めるやうになり喫煙の規則を犯した學生を直ちに退校せしめ、或は詩を放吟するものを嚴罰に處する等頗る暴虐なる處置を喜んで居た。然し、三十歳を過ぎた折りには、思ひ掛けぬ美しい十八の妻を娶り得るに及んで、久しい間苦しめられた不滿足は、忽ち癒し盡され、自然と穩かな精神に歸る事が出來たが、七年間連れ添つた後ふと病死されて了つた。續いて迎へた矢張廿歳を越さぬ後妻は、同じく夫が變調なる熱愛の手に弄ばれ、隨分衣服の贅澤なぞに滿足を得て居たものゝ、病身の故か不幸にも又若死にして了つたので、水澤は遂に一人の兒も設けずに、今だに猶昔の儘の元氣を持つて居て、其後は直ちに其の候補者を求めながら、この二年間は、以前にも增して淋しく苦しく感じつつあつたのである。

この不幸なる性情を受けた教育家は、全く秩序を失つた心の亂れに、恍惚とした空想に陷りふッとして園子の方を見詰めると、凄じく打寄せる波浪の光に、四邊は聊か暗さを減じて居たのみならず、追々鋭くなつて來る電光につれ漸々に吹きまさる烈風に吹かれて長い女の袖は吹きちぎれるばかり、後の方に翻へされて居る。朦朧として一段白く見える片手の腕を伸ばし、少し身を屈めて、頻りに裾を合せながら歩いて居る園子の姿、彼は最う何の分別もなく唯だ醉が勸めるまゝにぢッと引合ふた手に力を籠めて握り締めて見た。

すると、園子は非常に吃驚したやうに。忽然其の手をもぎはなして、ぢつと水澤の顏を見詰めた後、

「あなたもう、恐入りますから、……家まではもう近くなりましたから、お送り下さいませんでも、最う失禮を致します。」

水澤は何氣ない樣な調子を作つて、

「いや、此處までお送りしたんですから、何に御遠慮には及びません。お宅まで序です。」

再び手を引かうとすると、園子は如何したのか、極めて嚴格な鋭い聲で、

「何をなさるんです。」と其の手を拂つた。

彼はこの一聲に打たれて、思はず逡巡すると、忽ち堪へ難い恥しさを覺ゆると共に、容

易ならぬ事をしたと云ふ考へは一時に心を突いたのである。答ふべき言葉なく、默つて顏を見返すと、其の瞬間に鋭く浴せ掛かつた電の光に、園子の眼は蒼白い一種の輝きを以つて自分の顏を睨みつけて居た。實にこの鋭い眼の光は、深く自分の罪を彈劾すると云ふ樣に見えたのである。水澤は話し憎い相談を運ばせる爲めと又一つには十分磊落な態度を以て、一擧に結婚の相談を纏めて了はうと云ふ下心で、故意と凡ての缺點も蔽ひ隱さぬ樣に、酒杯も傾けて見たのであるが、今其等の後悔に稍酒の醉も醒めて來ると、軈て、園子が此前夜晩く周章た樣で此の濱邊を通つた事や、其翌夜、同じ時分に、寢衣姿のまゝで旅宿に來た事などを思合はして、何とは附かず、園子が結婚を承知しない原因は養家の事情の外に、何やら譯のある事では有るまいか。園子がいよ〳〵不承知を稱へた上に、好しからぬ弱點までを見られては、自分は甚だ此の後の體面に關して考ふる所あらねばならぬ。否これは如何あつても承知させねばならぬのだ。如何なる手段を以つてしたならば……と彼は暗の中ながら再びぢつと園子の樣子、頭から爪先まで譯もなく仔細に見詰めたが、又も閃めき過る電光と共に俄然として落來る暴風は、素破や天地を顚へさんばかり。

「園子さん。」

決する處ある如く、彼は同時に鋭く叫んだが、今や暴風は全く人の聲を吹散らして了つて、直ぐ傍に居る園子の耳までも達しないらしい。彼女は狼狽えながら身を恐れ縮めて、頻に衣服の前を引合はして居たのである。

水澤の怖しい頬髯は逆立つた。其の兩眼は烱々として暗中に輝いた。

今や、この茫乎たる海邊は、閃き落る電光に照らされる時々、陸地を咬み崩さんとし、危く伊豆半島をも奪ひ去らんとする巨大な波濤と、天の一角に横ふ怪奇なる雲の動きと、海邊の岡の上に根元から倒され樣として居る松林など、混亂極りなき光景を蒼白い凄愴な光の中に打廣げるかと思ふと、再び暗々たる闇の中に、唯だ白く打碎くる波浪を除いて、凡ての物を葬り盡して了ふのである。

嘗ては淺黃色の曉と紫色の黃昏を作り、銀の如き砂の上、鼓の如き波の調の中に、樂しい戀の散步を許した。此れが同じ海邊であるとは、如何して思ひ得られやう。

激烈な疾風は世界を破壞する呪ひの樣に吠返る大海を走つて、眼もあけられぬ程、砂礫を飛し、稍もすると、佇む二人をも吹き倒さうとする。

今この狂暴な光景の中に立つもの、恐くは世界中に、唯だ、怖しい顏した水澤と優しい

姿した園子の二人のみであらう。

怒れる天地の間に、力強き男は今力弱き婦人の身を我がものにするのは實に容易な仕業であるのだ。小田原の街はもう眠つて居る。いや、あらゆる動物は恐れ縮んで決して此凄じき海邊に來る筈はない。縱し來る者あるとも一間と離れた先は黑暗々として而も怒濤と狂風は忽ち人の聲を奪つて空中に吹消して了ふ。人は裝飾ある社會から全く隔離する時忽然荒き動物に立返る事が出來る。

人は如何に修養さるゝとも、其の心の底の或る部分には、必ず野蠻なる殘忍の性情の幾分かを殘して居るものである。太い骨と強い肉とによつて組立られた水澤の身體は猛然として動き始めた。

種々なる衣着せられ、種々なる帶にて縛られたる社會にあつてこそ、婦人の權力は始めて男を其の足下に降服せしめ得るのである。操と云ふものが無上の光榮を放つのである。けれども獨り悠々として横はれる天地の間にあつては、かの如何にも無邊の力あるが如く說きなさるゝ道德や宗敎は何のやくにも立たない。今や水澤が獰猛なる勢を以て突進して來る禽獸的の腕力に對して、園子は如何なる手段を以て是を防がうとしたか。道德を基として面責する議論か辯舌か。哀れにもそは皆無益であるだらう。暗黑、暴風、怒濤、此等のものを驅つて自然は今却て喜ぶが如くに、叫びの聲を天空の中に奪ひ、終りなく狂ひに狂ひ、暴れに暴れて居るのである。

あゝ園子が長き年月一片の道義によつて堅固に保つた其の操、戀人にさへも許さなかつた操の、遂に終りを告る處は何であつたか！

園子は三疊の居間に倒れた儘、前後も知らぬ程に泣入つたが、抑も自分は如何なる行爲を受けたのか。唯だ譯も知らずに口惜しいと思ふばかりで、凡ての事は昏々として夢を追ふが如くである。自分が此れ迄に折角美しく保つて來た其の勞力が、水泡に歸したと云ふ、云はゞ丁寧に保管した寶物を破された時、寶物其の物の惜しさよりは、徒に其の困難であつた保存法の無益だつたのを怒ると同じ樣に、今は却つて操と言ふものの價値が如何程のものかと云ふ事は暫く忘れられた樣になつて了つた。が、軈て少し心が靜ると泣く事も出來ぬ悲しさは、水の樣に冷く心の中に流れて來た。噫！　操と云ふものゝ證明は、其の見えざる心の如何に係らず、唯一圖に肉體と云ふものゝ、如何によつて、直に判然せられるのである。そして、肉體上の操は如何に容易く破られて了ふか！　この破られ易い操の

破れた婦人は最う表立つて世に出る資格を失つて了ふのである。厭むべき疾病に罹つた男さへも快く正當の權力ある妻とは爲て呉れぬのである。社會は何故かくも怪しい嚴密な制度を持つて居るのであらう。婦人が肉體の汚れは、決して其の心の如何によつては清めつぐなはれは爲ぬのである。一度肉體の罪を犯した婦人は永久に其の心の懺悔も無效に歸する。

婦人の生命は肉體であつた！　心靈では無かつた！　而して、而して、婦人の肉體は如何に汚れ易く果敢ないものであつたか！

絶望の極、園子は激しい復讐の觀念を起したが、又忽ちに、この復讐の目的を遂げるには是非とも大なる恥辱を公けに爲なければならぬ。と云ふ事に氣付くと、如何に口惜しい事でも此れはこの儘にどうか祕密に葬つて了ひ度いと、もう恥しいと云ふ念が込み上げて來て、再び止度なき涙に暮れて了つた。此の以後の自分の身は如何なる事であらう。如何したなら可いであらう。自分は一生を契る夫に向つて、知らぬ顏に此の祕密を包んで行く事は、どうも疚しさに堪へない。と云つて、夫たるものは其れを知つた以上は必ず快く……否、其が爲めに悲しい事件を來すかも知れぬ。自分が今、良人と定めて居るものは、

かの笹村……と恁う云ふ邊まで考へて來ると、今まで自分の事で忘れて居た笹村が罪惡、而も其れは何うやら曝かれさうになつて居る。萬一其の罪が公けにされたなら、彼は最う世の中に……或は事に寄ると刑法にさへ觸れる始末である。さうなれば自分は到底養家の關係からしても其人と結婚する事は出來ぬ。とすると、自分は是非にも愛情を又他の人に注いで、そして此の祕密ある身體を誰かの手に委ねなければならぬ無くなる……其時突然、激しい物音が聞え出した。

驚いて耳を澄ますと、誰とは知らず、頻に表の門を叩く音で、やがて、電報電報と二聲ばかり叫ぶのが聞えた。園子は慌忙てゝ女中を起し、電報を受取るが早いか、開いて見ると忽ち顏色を眞青にして、絶息しさうになつた。女中は吃驚して、漸く園子の氣を靜めさせ、

「何、何で御在ます。」

「何にどころぢや無い。大、大變な事……お前、東京ではお二人ともお死亡になつたのだよ。」

「へえッ！」と女中は腰を拔かした。「ど、どうなすつて……。」

園子は答へなかつた。然し、怖しさに顫への止まぬ身體を漸く起して、彼女は靜かに秀男の寢て居る枕元に進んだが、其の眼は突然涙一杯になつた。

第十九

驚く可き飛報に、園子は、一時は全く自身の悲しみも打忘れたやうに、早速翌朝の一番汽車で、秀男をいたはりながら、東京の本邸に取る物も取りあへず馳せ歸つて來たのである。無殘なる老夫婦の亡骸は奥座敷十疊の間に並べて横へられた其の枕元には、悄然として見るも哀れな、富子の姿が坐つて居た。

先づ暫くは覺悟しながらも打襲はるゝ驚きと恐れとに、茫然自失する程であつたが、軈て彼女は富子が枕元から手渡しした老人の遺書を打ち開いた。長い〳〵この一封は特更自分に宛てゝ書き殘されたものなので、涙に曇る眼に、漸う讀み了えた時、園子は此の慘憺たる出來事を演じ出した老人の覺悟を明かに知る事が出來た。

老人は最初其の妻の不德を目擊した後、此の大罪惡は到底妻の身として許さる可きものでないと思つたが、其と同時に自分の身は嘗て如何なる事によつて此の妻を得たのか、恩義ある英人B――氏に對して何をしたかと云ふ事を思合はすと、最う心に恥ぢて強く妻を裁判する勇氣はなくなる。

只一心に妻の悔悟を希ふ樣になつたが、かの憎むべき程正義を好む新聞紙が、漸く此大祕密を曝きかけたのを見るや、彼は其の妻の罪を憤り悲しむ事よりは、先づ如何かして此の秘密を隱蔽したいと思つた。

何故かと云ふに、此の大恥辱が只さへ卑しめられた我が家庭の中から曝し出されたならば、自分の一家は最う永久に如何なる手段を以てするも社會に浮出る事は出來なくなる。老境に進んだ自分の身は構ふ處で無い。花の如く愛らしく無邪氣なる秀男の身までが、此の恥辱の爲めに自分と同じ樣な苛責を社會から長へに受けねばなるまい。擯斥されたる父の兒となつた上に、姦通の罪を犯した女を、其母に持つたと云ふ事を評判されたなら、この不幸な少年の運命は、如何樣になるであらうか。新聞紙の記事丈けは、金錢の力を以て辛じて或る時間丈けは蔽ひ隱す事が出來るかも知れないが、然し、人の罪惡を天の賜の如く喜び貪る怖る可き世間の耳に、一度此の事が言傳へられた上は、永久取消すことは出來ない。然らば、自分は今、如何にすべきか。望む處は唯だ秀男の末長き運命を華美なるも

のに爲たいと云ふ事丈けである。自分の身の上には已に些些たる望みの影もない。惜しくない自分の身を無いものにして、その過去の罪――自分では唯だに一時の思慮なき過失の如く思ふ――其の罪の悔悟を明かに死を以て社會に示して遣る。其と同時に、わが妻の大罪も明かに自ら裁判しやう。彼女は到底救ふ可からざるものらしい。自分が外出した隙を見て直ちに怪しく姿を隱した一事から見ても、到底此の後、秀男の身に幸多からしむるものではないのである。寧そ秀男は人生此より以上の不幸は無いと云ふ孤兒になつた方が、却つて絶たれた望の中から、軈て眞の美しい望みの光を見出す事が出來るであらう。老人は夫婦が死を以てした悔悟には如何に殘酷な社會も、もう此の上に、此少年の身をさいなみは爲まいと思つた。で、此の如く少年の一生を園子に托する爲めに、老人はこの女教師に向つて、哀むべき孤兒の慈愛深き母となつて呉れと云ふ事を悲痛な文字で書現した後巨額なる財産の三分の一を園子に讓る旨をも附記したのであつた。

この痛ましき一家の有樣に反して、翌日の新聞紙は何等の事實を報道したか。彼等は喜び勇んで、あらゆる祕密と出來事とを面白き一小説の結末を得た如くに、全紙を埋めて書き立てゝ居た。世間は湧き返つた。悲慘極まる一家の運命を圍んだ黑淵家の邸宅の塀外門外は、其の日から群集を以て圍繞された。富子と園子が先に立つて立派に靜粛に送り出した葬式の當日の如きは、實に其の門前は群集の山を築き上げ、時には聞くに堪へざる惡罵の聲が園子の膽を冷した程であつた。然し冷い老人の骸は、もう何等の苦悶なく、靜に其の妻の棺と共に、青山の墓地に永遠の眠りに就いたのである。

此の如く勝利を誇つた世間の風評は、無論其の一家の中に數へられた園子の身の上にも種々なる好からぬ臆説を加へて居たが、園子はもう其等の事には何等の顧慮する暇なく、專心に一家の後始末に過度の疲勞を辭さなかつた。けれども、軈て數日を經るや、廣大なる家中は俄に物凄い淋しさを生ずるやうになると、園子は忽ち非常な悲しさと痛ましさに打沈められて了つた。あゝ！　此れから自分の身は如何なるのか。自分の身は最う穩かなる運命を辿り行く事は出來ないものゝ樣になつて居る。自分が多くの望みを掛けた笹村はこの一家の滅亡と共に、其の淺間しい罪惡を曝き出された爲めに、今まで其の生活費を求めて居た雜誌記者も止められて了ひ、教會は無論の事、日の光の照る處へは顏出しも出來なくなつて了つたらう。いや、其を云ふと自分の身も同じ事である。自分の祕密は自分の身體の中に深く包まれて決して現される事はないにせよ。自分は最う勇立ツて世に出る勇

氣は失つた。園子は兎に角、一度笹村に逢つて見ねばならぬと思ひ定めて、次の日の朝、其の下宿を訪ねて行つたが、然し、笹村は深く恥ぢた爲めか、留守だと云ふので、到頭逢ふ事が出來なかつたのである。園子は悄然として、然し、其歸途には、車を養母の家に寄せて、久しく無沙汰の詫び方々、一家の事情をも委しく述べやうと思つた。

養母の利根子は何時もの苦々しい顏附。今迄決して微笑んだ事なき怖い顏を此方に向けると、忽ち園子の姿を睨むやうにして、

「お園。お前、困つた事をしてお呉れぢや無いか。」と云つた。

園子は先づ胸を轟かし、「何、何で御在ます。」

「何と云つて……私は大變な迷惑をしなければ成らないのだよ。」

養母は苦々しい顏色を一層不快にさせて、園子が黑淵家と一方ならぬ關係を以て居ると云ふ事から、引續いて養母の身までが、どうやら其の爲に、貴族女學校の教員たる事の運動に大きな妨げをされさうに思はれる怨言を云ひ始めた。園子は最初に養母が、何かにつけて特別な收入のあるのを喜ぶ處から、かの家庭に這入る事をも許して置きながら、今此の場合になつて斯う云ふ勝手な怨言を云ふのは餘りに情無い事だと、暫くは眼の縁を潤ましたが、軈て又、女の獨身で長く生活の苦しみを續けると、かくも金錢上の卑しい感情に左右されねばならぬのかと、寧そ氣の毒のやうな感じが爲て來た。園子は物優しく、黑淵家の財産の三分の一が、自分の身に讓り渡された事と、自分は老人が生前の好意と其の遺言とによつて、縱へ如何なる情實が起らうとも、自分は此末長く黑淵家の孤兒の爲めに盡さねばならぬ事を述べたのである。すると、養母は何方とも思惑つて了つた樣子で、聊か可厭な顏をしながら、然し、最う最初の樣に黑淵家に對する怨言は云はなくなつて了つた。園子は猶言葉こまかに自分がかの一家に對する決心を說明した後、暇乞ひをした。そして最う一度笹村を訪問したけれども矢張逢ふ事が出來ずに、其日は空しく黑淵家へ歸つたのである。

其の夜からして、園子はいよ／＼激しく身體の疲勞を增した如く覺えると共に、其の心は極度に達した痛みと悲しみの情にも疲れ倦きたと云ふ樣に、もう此の上には例へ如何なる迫害と失望を加へられても、感動する力がないであらうと思つた。凡ての感情は身體と同じく衰弱して、常に夢を見て居る樣に甚だ鈍くなつて來る。かの暴風の前の瞬間が著しき空氣の沈滯を示すと同じやうに、平素激し易い園子の性情は、軈て怖るべき狂ひを起

す前兆ではあるまいか。富子は園子が深い祕密の事情を知らぬ處から、其の樣子の如何にも變動して居るらしいのを見ると、此は畢竟、世間が自分の家の關係から園子の身を云云する其の爲めからでもあらう、と一方ならず氣の毒に思ふのであつた。と云ふものゝ、一方には是非とも老人の遺言通り、殆ど一家のもの同樣に秀男が母となつて貰はねば――と思ふ處から、ゆだ向島へは歸らずに常に園子の傍に來て、例の過激な言葉であらゆる社會を罵り、或は細かな調子で、園子に事の次第を懇願するのであつた。そして、何時も話の最後には、自分の一家――世間は其を地獄である、奈落である、魔窟であるが如くに云囃して居る。けれども其の一家の中には決して、人の罪惡を好んで罰せんとする輕薄殘忍なる社會からは、到底望み見る事も出來ない、美しい自由な樂園が形造られて居ると云ふ事を世の罪ある者、退けられた者達に知らして邊り度いと云ふのであつた。

園子が心の沈滯は、此の聲に從つて漸く呼び覺まされて來ると、自分は已に或る痛しき宣告を其の身に受けて居た樣な氣がする。すると果せる哉。忽ち激しい異變、怖しい暴風は吹き起されて來たので、園子は、或時は富子の如く無賴な生活を送つて極力世間に反抗して見やうかと思ひ、又時としては、此の讓り受けた財產を以て何か世間を驚ろかすやうな事業を企てゝ見やうかと、種々なる考へを起して見たが、遂には何れも、此れも、自分が心の滿足は得られない樣なので、寧その事、自分は普通の人からは想像する事も出來ない程に其の身を墮落せしめ、黃金の魔力を振つて、世の道德を破り、社會の風紀を亂してある愉快を得やうかと、まるで、强い熱に浮かされた樣な空想を描きはじめる事が多くなつた。斯うなると、折々は眼の色までが變つて來て、濫に女中を罵り叱ると云ふ樣な、以前には見られぬ行をする樣になつて、聽ては、其の溫順な謙遜な性質は、恐しく癖癖の强い、そして殊更殘酷を喜ぶと云ふ風に變つて行くのであつた。けれども月が九月になつて、學校の開始も早や二三日に迫つて來ると、園子は突然一變して、今度は可笑しい程女々しく、譯もない事に迄涙を出すやうな、一種の陰鬱症に陷つて了つた。富子は喫驚して、頻りに醫師の診察をと勸めたけれども、彼女は非常に醫師の手に觸れられる事を恐れた樣な風で、決して是には應じなかつたのである。富子は若し、園子が身を華美ならしめた暑中休暇以前の日――一方には戀の嬉しい夢に醉ひ、一方には殆んど全校を壓する名聲に浴した其等の日と、其後に出會うたる種々な出來事とを、能く明細に知つて居たなら、一見して、彼女が心のかく病的に變動し行く理由を怪しまなかつたに相違ない。

けれども深く慎しみ隱した園子の口からは、何事も聞出す事の出來なかつたので富子は唯だ途方に暮れて、一日其の傍に附添つた儘、外になすべき手段はなかつたのである。

第二十

園子は、軈て、翌日はもう學校の始業式と云ふ前の日一日を、絶えざる涙に一方ならず富子を心配さしたが、其の日の夕方、突然水澤校長の來訪を受けた。

園子はそも如何にして、此の無禮なる、而も怖しい校長に對しやうか、ひたすら其の罪を詫びて來る手紙は、既に幾通となく屆いて居ると云ふものゝ、とても泰然自若として面會する譯には行かない。園子は一時卒倒する程な憤怒の情と、又忽然として起つて來る氣恥しさ。如何に力を盡しても、身體中の顫えと、湧返る血の亂れを押靜める事が出來ないのである。この會見は自分の身に取つて最も大切なものであると思ふに附け、如何かして、冷かな落着いた態度を保ち度いと、先づ戸棚から化粧する鏡を取り出して、自分の顏を眺めて見た。今更に驚かれるのは全く血色を失つて見る影なく、こけ落ちた頰の痩せである。さま〳〵な希望を負うて避暑に出掛けた時の容貌とは全で別の人の樣に見えた。落ち凹んだ鋭い充血した眼の輝きは神經の過敏症に陷つて居る事を示したと同時に、其の廣い眼緣は絶えない涙に染められた爲めに、紫色に黑ずんで了つた。其れのみならず細い秀でた小鼻の蔭や、口元の邊にも陰鬱な黑い影が漂つて居る。

暫くは絶望して、其儘鏡を見詰めたが、何かふと思附いたと云ふ樣に、軈て、立上つて簞笥の抽斗から、白絽の喪服を取出した。そして、今度は其上に眼を定めた儘、長く靜坐して居ると、顏の上には云ふに云はれ無い悲痛の色が添はつて來たけれど、押え難い心の騷ぎは漸く其の爲めに靜められる事が出來たらしい。園子は再び鏡に向直つて、靜に束髮の亂れをつくろつてから、白絽の喪服を取上げたのである。

五分程立つて、園子は部屋の障子を明けて出ると、其の姿は又見違へる程になつて了つた——いや全く此の世の人とは思はれぬのである。悲痛極り無き靑ざめ果てた其の容貌と、痩せ聳えた骨格は、極めて能く白絽の喪服に調和して、何う見ても、何か恐しい呪ひを試みる女神を仰ぐが如く、云ふに云はれない神々しい中に、又戰慄する樣な冷たい物凄さを現はした。しづしづ歩みを移して應接間の扉を明け、園子は先づ鈴の樣な聲をして、「水澤さん。御變りも御在ませんでしたか。」と鄭重に頭を下げた。

水澤は已に貴重な家具と、裝飾品とにちりばめられた一室の莊嚴に打たれて居た折から、突然此の女神の姿に接して、何とも云ふ事が出來なくなつて了つた。彼は直に、かくも神神しい、凡ての婦人の德を完備した人に對して、如何して彼の樣な事が……と、ひたすら憐みを乞ふ樣な眼容で、窃に園子が物凄い横顏を盜見して居た。程經つてから、漸く其の過ちを許して呉れと云ふ事を恐る〳〵神に對して懺悔する樣に云ひ始めた。すると、園子は聊か顫へる唇から、凉しい而も喩へる事の出來ない悲痛な調子で、

「御心配あそばすな、私はもう世の中には出られない身體で御在ますから、縱へ如何にお怨み申しても、決して貴下の御名譽に關る樣な事を致す力は無いので御在ます。私は全く約束いたしましたものとも、もう結婚する事は出來ない身になつたので御在ますから、無論此の後は、如何樣に被仰つて下さいましても、私は貴下の御心に從ふ事は出來ませんのですから、どうか、私と云ふ……女の身の果敢ない事をお思ひ下さいまし。」

一時は面責してやらうかと思つた決心も、今は自づと涙が催されて來るのを、園子は唇を嚙んで堪へ忍んで居た。水澤は全く活きて居る心地はなく、もう椅子から滑つて、この女神の足下に蹲らうかとも思ふ程で到底答ふ可き語は無いのである。

「水澤さん。」

神のやうな聲は再び其の頭上に落ちて來る。「私はもう表立つた世の中には出られ無い身になりました。世間では色々に評判して居ります、此の怖しい黒淵家の者同樣になりましたからは、私は學校の方も如何いたさうかと思つて居るので御在ます。」

水澤は稍力を得た如く、其の顏を上げ、ぢつと園子の顏を熱心に打目戍つた。

「園子さん。其の事に就いては、私は自分の地位を左右しても、あなたが以前の名譽と地位とには決して障害のないやうに奔走します。私は如何なる事をも辭しません。」

誠實は其の聲の中に溢れて居たが、園子は此時、何か或る聖靈が自分をして云はしむるかの樣に、口は自然と嘲哢たる音調を發し、胸は氷の樣に淸く冷たくなるのを覺えると、大膽な宣言は意識せずに綴出された。

「私はこの世間が申します怖しい地獄より外には出られないので御在ます。世の人の評判によつて、直に破壞されたり、直に又取返す事の出來るやうな、然う云ふ、浮々した名譽や地位はもう決して望ましいとは思ひません。私は自分自身で、自分の心に名譽の冠を戴

かせる樣な、安心な自由な地位を欲しいと思つて居ります。」

此の語に再び答へる處を失つて、水澤は失望し、慚愧し、後悔し、すご〳〵暇を告げて立去つたのである。其の笑止な後姿を眺めると、園子は云ふ事の出來ない氣味よさを覺えて、思はず胸がすつかり晴れ渡つて了つた。

園子は最初、如何しても靜める事の出來ない心の騷を靜める爲めに、ふと思ひ附いた白絽の喪服――老夫婦の棺を送り出した時の其の衣を着て見たのであるが、意外にも其の爲めに、十分水澤の心を屈服せしめる事が出來た。自分を力づけ、自分の恥辱を取返して吳れたこの有難い喪服を着けたからは、直に二階の老人が居間に行つて、其の安置された寫眞を拜して來やうと心附いて、園子は物靜かに室の扉を開けたのである。

幾個かの窓は、悉く帷幕を引いた儘なので、其の間から冷い黃昏の光は僅に絨氈を照らすばかり、白い四隅の壁や、凡ての家具は肅然として、早くも夜の暗さを喜び迎へて居るのである。終日密閉された儘、誰一人扉を開くものが無いので、晝の暑さと、四五日前に香を焚いた其の香氣とが、今も猶室中に滿渡つて、人の呼吸を窒息させる樣に思はれた。痛ましい夫婦の運命は、二發の砲聲によつて、此の室の中に其の最後を告げたのかと思ふと、園子は突如として畏懼の念に襲はれ、倒るゝ如く寫眞の前に跪いて、熱心に祈禱をさげた。そしてかの悲しむべき遺書に對する自分の決心――依賴された孤兒の一生を、身に引換へても引受けやうと云ふ決心のほどを繰返して云ひ述べた後、靜かに室を出て、階段を下りて來ると、如何云ふわけか、心の中は自分ながら怪しまれる程、以前の樣とは違つて居た。

日本家の緣側に出ると、庭一面濃い綠色の木立の上に、薄紅い夕榮の色が殘つて居て、最う淸涼な秋の氣を帶びた黃昏の風が、藍色の大空から、颯と吹き下りて、雪より白い喪服の袖を飜へした。園子はこの不思議な風を一と浴びして、思はずほつと大きい呼吸をすると蘇つた樣に、身體の中に極めて健全な力を感ずる事が出來たのである。

部屋に這入ると、直樣大きな決心を得たものゝ如く、一封の書狀――其れには、斷然教師の職を辭する旨を、甚だ簡單に記し付けて、早速水澤校長の許に使を馳らしたが、其れから、三日たつた後、園子は富子に向つて、少しも臆する色なく、あらゆる事實を打明けた。そして、斯う云ふ事を宣言したのである。

自分は富子が云ふ樣に、此の世間が云ひ囃す汚い地獄の中に、安心して自分の信ずる道

に進む事が出來るやうになつた。以前の如く、單に世間の毀譽のみを慮る結果、强ひて其の行を清くしやうとした樣な笑ふ可き事は全く改めて、何等の束縛もなき自由自治の、この樂園の中にあつて、心から滿足した美しい生涯を送つて行くであらう。あゝ！　自分は全く過つて居たのである。自分が今迄一點の過失なく、能く道德の繩張中に這入つて居たのは、心から德を好んで居たのではなく、全く世の譏りを心配したからの事であつた。然るに、今は、もう全く富子と同じやうな自由の身體になつて、已に破られた其の肉體の操は最早や保つの要なく貞操と德行とを看板に世渡りする地位からは、其の身を逃れ得た。今は如何なる汚行も自身を欺く事はないのである。あゝ！　實に、人は此の自由自在なる全く動物と同じき境涯にあつて、而して能く美しき德を修め得てこそ始めて不變不朽なる讃美の冠を、其の頭上に戴かしむる價値を生ずるのである！　否始めて人たる名稱を許さるゝのである！

然り。園子は此の如き大なる決心を云現はすと共に、心の中には又猛然たる勇氣の添はつて來るのを覺え、彼女は次の日、華麗なる顏色し、立派なる扮粧して、此の大なる決心を養母利根子に傳ふべく、又同時に狐の如く隱れた神の信者を訪れて、其の罪を心から悔悟して吳れたなら、決して失望するに及ばぬと云ふ事や、又其の以前の心は如何にもせよ、此以後、眞正の愛情を自分の身に注いで吳れるか否かと云ふ事抔を聞き知らうが爲め、二頭立の箱馬車を用意させ、玄關の戸口まで送り出した富子と秀男の手を勇ましく握つた。

丁度、夕暮時、限りなき健康を齎し來る淸涼水の如き九月の風に、馬は肥えて高くいなないた。昂然として車の扉に立つ園子が頭上には、水晶の樣な空よりして、美々しく又愛らしく輝き初めた望みの星！　（原本明治三十五年六月金港堂出版）

地獄の花　終

夢の女

第一

陰氣に曇つた冬の朝である。表の格子戸に人の呼ぶ聲が爲なかつたなら、お浪はいつもの樣に九時近くまで寢て居たにちがひない。夜はいつも早く寢床へ這入りながら、何とも付かぬ物思に更けた鐘を聞いてから漸く熟睡する習慣になつて居たので、今ふと眼を覺した時丁度八時を打つて居る珍しい置時計の音を聞くと、寧そ不思議な心持がすると云ふ樣に、枕から顏を上げて室中を見廻した。表の聲は、

「おたの申します／＼。」と頻に呼び續けて居るのである。

お浪は自分の乳房に手を當てた儘、スヤ／＼寢入つて居る赤兒に注意しながら、夜具の上に半身を起し、枕の傍に落ちて居た利休形の櫛を拾つて、寢亂れて銀杏返の鬢を搔さなから襖越しに、

「老婢、お取次だよ。」

けれども、老婢は井戸端にでも行つて居るのか、何の返事もない。すると表では、

「おたの申します。お留守なんですか。」稍鋭い聲になつた。

「どう爲たんだねえ。」

お浪は銘仙の寢衣の襟を搔合せながら、枕元に疊んであつた糸織を被つて、次の間へ出たが、亂次い姿を氣に掛けて、

「只今、どなたで被居います。」

「お店からの御使です、」と上框へ腰を下した氣勢がした。

お浪は少し慌忙た樣子になつて、上口の障子を明けたが、何時も使に來る車屋ではない。大方店の手代であるらしい三十年輩の男だつたので、急に正しく坐りながら、

「あら、御免なさいまし、此樣風をして居まして。」

「いえ、どう致しまして、御手紙で御在ます。」と風呂敷を解いて狀箱を差出すと、お浪は中なる一封の書狀を受取つたが、不圖名宛の文字が、見馴れぬ女の手跡である事を氣附いて最初は不審らしく首を傾げ、忽ち氣遣はし氣な顏付になつて、

「鳥渡旦那樣が如何かなすつたんぢや有りませんか、御病氣でも……。」少しく聲さへ喘

したのである。

「はい。」と男は已に格子戸へ手を掛けて居たが、「御新造さん。實は……旦那は今朝の五時にお死亡になつたんで御在ます。」

「えッ。」とお浪は殆ど氣を失はぬばかり、使の男が當惑しながら歸つて了つたのも氣付ぬ樣子で倒れる如く漸くに茶の間の長火鉢へ坐つたかと思ふと、先づ手紙も見ぬ先に、

「ばアや〳〵。」と聲を顫して呼立てると、老婢は丁度水を汲んで來た所であらう。濡れた手を前掛で拭きながら、

「御新造さん。まアどうなすつたんです。大變にお早いぢや有りませんか。」

「老婢、其れ處ぢや無いんだよ。」

「へ？」

「老婢。お死亡になつたんだとさ。旦那樣が……。」

「え。まア……。」老婢も、其れなり何とも云へ無くなつた。二人は暫く互に目を見合したが、

「老婢。どうしやう……。」とお浪は突然兩袖を顔に當てゝ突伏したのである。老婢はいよ

いよ狼狽えて譯もなく四邊を見廻すと、幸ひにも手紙を見付け出して、

「御新造さん。此のお手紙なんですか。あら、まだ御覽なさりも爲ないで、如何なすつたんですよ。おや……もし御新造さん。お店の奥樣からのお手紙ぢや有りませんか。」

然し、お浪はなか〳〵顔を上げないので、老婢は摺寄つて、お浪の背を輕く叩きながら、

「御新造さん、奥樣がお寄越しなすつた御手紙ですよ、此れなら屹度委しい事が分りませうから……御新造さん〳〵しつかり爲さいよ。」と夢中で封を切つて、お浪が涙を啜りながら、漸と顔を起すが否や、書狀を目の前へ押付けた。お浪は重ねて大く涙を啜つた後袖で兩方の眼を拭ひ漸く手紙を膝の上に引き展べると老婢は老眼を細くして、龜の子の樣に首を差出した。

手紙には、然し老婢が豫期した如く、委しい病狀や何かの事は書いて無かつた。只簡單に昨夜から急に病勢が變じて、今朝五時に死去した事を書き記した末に、何かの相談もあるから今日、夕方出掛けて來て呉れと云ふ丈けである。

お浪は手紙を狀袋の中に卷收めると再び目を瞬いたが、然し最う泣伏さずに、漸く身體を支へて居る事が出來た。

「老婢、私はまさか、其樣にお惡いのぢや無いと思つて居たんだのに、眞實に夢だねえ。」

「全くで御在ます、壽命ほど知れないものは御在ませんよ。」

「私達だつて、今は斯うして居るものゝ、何時どうなるか……。」とお浪は俯向いたが、忽ち顏を上げて老婢を見た。

若い女の胸の中には、突然或る痛しい感情が流れて來たのである、其れは、敢て男の病死を嘆く情ばかりでは無い。丁度颶風の樣な意外な凶報に、一時は全く自分の身を忘れて居たのであるが、今、自分は男の慰みに圍はれて居る妾の身で、月々の仕送で先づ不自由なく生活して居たと云ふものゝ、其の男が突然死亡して了つた後は、此の末、此の身の成行は如何なる事であらうかと思ふと、最う堪へられぬ程な心細さを感じずには居られない。折から、夜具の中に取殘された赤兒が、眼を覺ましたものと見え、高く泣聲を立てたので、お浪は驚いて座を立ちながら赤兒を抱上げ、再び火鉢の傍へ戻つて、乳を含ませると、直樣スヤ〳〵と、膝の上に抱かれながら寢入つて了ふのである、お浪はシゲ〳〵と赤兒の寢顏を打目戍りながら深い、果しのない物思ひに暮れた。

宛然、娘としか見えぬ美しい母親。お浪は人形の樣な此赤兒の顏を見詰める時には、必ず思ひ掛けない此の樣な母親と呼ばれる身になつた其の成行を回想するのである。肉付の可い肥えた身體は大く身長の高いのに、何時も稍じみな扮裝をして居るので、どうか爲ると最う廿歳上かと見える事もあらう。けれどもお浪は今年まだ十八である。

身體と同じ樣に、色の白い豐艶な圓顏——珠の樣なパッチリした眼、括つた樣な頤。花瓣の樣な小さい唇。お浪は兩親の膝下を離れて十六の時獨り奉公に出た。

父は元三州岡崎の藩士であつたが、時勢と共に追々零落して、今では其の街端れに屢貧苦に倒れやうとする果敢ない生活を送る樣になつた處から、娘は少しでも一家の累ひを減ずる爲めにと、奉公口を搜す事になつた。

けれど知人の多いその土地を憚つて、名古屋の有名なる富豪と云はれた或る陶器製造商の家庭の小間使として仕込んだのである。

盛に高價な七寶燒を製出する製作場に隣りした此の富豪の家庭に眞目々々しく立働いて居る中、お浪は主人の爲めに、或夜忽ち悲慘な運命に出會つた。

娘は井戸に身を投じ樣とまで決心したが、丁度其時父親は借財の爲めにいよ〳〵破産の宣告を受ける場合に陷つたので、この間の不思議なる消息は、遂に娘の生命を堰止めたば

かりか、其れから一箇月ばかりたつて、主人は兼ての計畫なる營業擴張の第一歩として東京へ宏大なる物産賣捌の商店を開いた時、お浪は主人に連れられて出京すると共に、此の閑靜なる築地河岸の小家に意氣な圍者となつて了つたのである。そして、間もなく、お種と名付けた此の美しい赤兒の母となつたのだ。

お浪は思掛けなく母親になつてから、初めて其身の行末を案じる樣になつたのである。何時も姉か叔母の樣に何かと云慰めて呉れる老婢の云ふ事も、最早や滿足な氣安めとは成らぬのである。朝飯の膳も箸を取るか取らず、茫然老婢の顏を見詰めて居た。

「御新造さん、眞實にお察し申しますよ。ですけれどもね、斯うなつたら、何しろ御自分の氣をしつかりと爲さるのが肝腎ですよ。」

と老婢は膳を片寄せ、火鉢の向ふへ膝を進ませた。

「老婢、わたしの身體はどうなるんだらう、最う心細くつて、私は最うどうして可いかわからない。」

「さう氣を落してお了ひなすつちや爲樣がありませんねえ。」

と云つたが少し顏を前へ突出して

「御新造さん、お店からの御手紙は、其の事なんですよ、何かの御相談と書いてあつたぢや御在ませんか。御新造さん、夕方お店へお出でなすつたら、能く打明けて御神さんに御相談なさるが、能御座んす。お神さんだつて、斯うやつて手紙まで下さる處を見れば、人情の無い方ぢや有りますまいから、屹度何とかお話をお付けなさるに違ひありませんよ。」

「あゝ。」と答へたが、お浪は如何にも當惑した樣に老婢を見返して、「だけれど、お店へ行くのは何だか氣まりが惡いねえ。」

「まア、何ですねえ。」と老婢は聲を强くした。「何時まで孩兒で被居る心算なんですよ、御新造さん。大事な〳〵時ぢや有りませんか。」

お浪は何とも答へずに、袖口で眼を擦つたが、其の憫然らしい樣子を見ると老婢もさすが鋭い語調を續ける事は出來なくなる。あゝ、無理も無い！　心の底から熱い同情を呼び起されて、いくらか潤んだ眼に、お浪の顏を覗込みながら、老婢はお浪が店の內儀に會見する事は、其の身の利害得失を定める大事件であると云ふ事を繰返した後、出來る事なら自分が附添人になつて出掛けやうかとまで思つて居ると云ふ事を話したが、到頭其の夕暮は近付いて來たのである。

お浪は身體を動す力さへないらしく、寢衣の襟に頤を埋め、長火鉢に凭れた儘全く死せるものゝ如く一日を送つたので、無論午餐さへ食なかつた。

「御新造さん。最う四時で御在ますよ。」

老婢の聲に驚かされて、ハッと顏を上げて見ると、お浪は更に驚いた、室は地の底に沈んでしまつたやう、そして黄昏の影の中に、火鉢の火だけがポッチリ赤くなつて居る。表の窓の障子が稍黄んで、其の外を遙かに呼んで歩く豆腐屋の聲。

「御新造さん、何れを着して被行るんです。」

座敷では最う簞笥を明ける音がする。

お浪は初めて座を立つた。程なく衣服は着換へて了つたが、此處に又一ッ當惑すべき事ができた。と云ふのは、赤兒のお種を連れて行かうか或は家へ殘して行かうかとの事である。老婢は腹こそ違へ、立派な旦那樣のお胤を内儀に見せた方が同情の原因となつて得策であらうと主張したが、お浪は思案に暮れた末、御通夜をする事や何かに附けて、却つて足手纏であるだらうと云つて、遂に自分一人行く事に決定したのである。で、今夜呑ますべき牛乳や何かの事を老婢に賴んで居ると、表の格子戸には、先刻已に老婢が賴んで置いた車夫が、

「お車で御在ます。」と呼んだ。

お浪は最う何れ程氣まゝが惡くとも躊躇する事は出來ない場合である。

「老婢其れぢや、坊やを賴んだよ。」と漸く立上ると、老婢は後から吾妻コートを着せ掛けて、

「御新造さん、眞實に確固なさらなければ不可せんよ。云ひ度い事は、其の場合になつたら、遠慮なすつちや損ですよ。可御座んすか、御新造さん。」と云つたが、猶氣掛りであつたと見え老婢はお浪が車に乘るまで、其の勇氣を勵す語を云續けて、向うの横町を曲つて了ふまでも後姿を見送つて居た。

第二

灰色に曇つた儘暮れかゝる十一月の空からは、今にも淋しい時雨が降つて來るのでは有るまいか。風は全く吹き絶えて居たが、沈靜した空氣の冷かさが肌を刺す時は、丁度寒氣は地から湧起るのかと思はれた。老婢はチラ付く街の灯を眺めて、再び家の中へ這入ると、

何とも付かず大な溜息を吐いて暫くはランプも點けなかつたのである。

老婢は今年四十五になつて、一人の悴と一人の娘を持つて居る。娘が三年前緣付いて地方へ行つた後は、會社の低い雇をして居る息子の世話になつて安樂な日を送つて居たが、去年徵兵に取られて了つた處から、自分の食料を得る爲めの奉公に出て、お浪の家へ來たのであつた。隨分世の苦勞と云ふ事も知つて居たので、老婢は無邪氣なお浪に對しては、屢其の母親である如く、眞心から萬事の世話もし、相談の相手にもなつて居た。でお浪の兩親と云ふのは、今はお浪の仕送で生活する樣になつて居る委しい事情も知つて居る。其樣事から、今度旦那の死んだのに際して若し解雇される樣な事が起たら、御新造さんは如何なる事であらうか。三ツ兒に物を敎へる如く、萬事委しい事情を內儀に打明けて其の同情を引く樣にと種々云ひ含めて上げたけれど、首尾よく相談をなさるだらうか。と全く熟睡する事の出來なかつた程、其の夜一夜はお浪の事を思ひ續け、忠實にお種が牛乳の世話をしながら夜を明した。

お浪が歸つて來たのは正午近くであつた。格子戶の明く音を聞くと、老婢は火鉢の傍の湯呑を蹴飛して上口へ馳出で、

「御新造さん。どんなお話です？」

然しお浪には此の聲が聞えなかつたのか、直樣火鉢の傍へ坐つて俯向いて了ふ。

老婢は追ひ馳けるやうに其の傍へ座を占めたものゝお浪の顏色を見ると、もう何とも云へなくなつた。

お浪は全で顏の血色を失して居て、靜に老婢の面を眺め、

「老婢。私はいよ／＼賴りの無い身になつて了つたのだよ。」

旦那の病氣以來出京して居た內儀は、夫の亡骸を今夜六時の汽車で名古屋の本宅へ送ると云ふのである。

そしてお浪とは此れまでの關係を斷つ爲めに、手切金として百圓、子供の爲めに、五十圓、合せて百五十圓の現金をお浪に手渡して、此の後は全く何等の關係をも殘さぬと云ふ證文までを書かせた。

「老婢。さう云ふ譯だからね。私は夕方せめてお棺を見送りに新橋まで行つて來やうと思つて居るんだけれど、其の後は如何して可いか私は途法に暮れて居るんだよ。」

老婢は呆された樣に口を開いた儘、暫くは眤とお浪の顏を見るばかり。お浪は詮方無げ

に俯向いて了つて、

「老婢、どうしたら可いもんだらうねえ。私はね、證文を書いたり際立つたお金を頂戴する事なんかは、一應國の方へも聞合してからで無ければと、然うは云つたんだけども、內儀さんは最う今夜の中に名古屋の方へ悉皆引拂つて了ふんだから、其れは其れとして、何でも彼でもと無理に然う仰有るから、私は最う如何とも爲樣が無いぢやないか。」と餘儀なさそうに云ふのである。老婢は最う顏を赤くして我知らず膝を進ませ、

「御新造さん。內儀さんと云ふのは一體全體何樣顏をして居ましたい。眞實に能くも先ア其樣不人情な事が出來たもんですねえ。此方が何にも知らないお孃樣だと思つて、此迄にお子樣まで出來てるものを、體の可い樣に直ぐと手切金なんぞを差附けて、加之に其樣證文まで書かせるなんて、御新造さん。其れだから、老婢が那程に申上げて置いたのに……最う其れぢや、御新造さんは全然旦那樣のお宅とは緣が切れて了つたんですね。」

寧そ腹立しい樣に云ふのであつたが、お浪は何とも答へる事が出來ず、只涙に暮れるより爲樣が無い。夕方からはいよ〳〵雨になつた。新橋の停車場に棺を見送りに行つて、歸つて來ると、お浪は再び長火鉢を間に老婢と差向つたけれど、依然涙の外には何とも爲すべき法を知らぬのである。雨戶を閉忘れた小窓の外には、蕭條な雨の聲、狹い庭の方には落葉の音。そして時々は、向河岸の橋を渡る下駄の音と、遠からぬ待合の三味線が、折々の風の具合で斷續して聞える中に、淋しい冬の夜は自然と身に迫る樣に靜けくなつて來る。老婢は一時、お浪が餘りの云がひ無さに思はず聲を强くしたものゝ、考へて見れば未だ漸と十八の娘の身には其れも此れも皆無理はないと却つて以前にも增して氣の毒になるばかり。心の底から母の樣な親切な調子で

「最う斯う云ふ事になつたら、仕方がありませんから、御新造さん、此の後は如何なさるお積なんですか。確り量見をお極めなさるのが肝腎ですよ。」

「私も然うは思ふんだけれど、最う如何して可いんだか途法に暮て了ふんだよ。國へ歸つた處が家は那樣だし、然うかと云つて、最う茫然此家には居られないんだし、其の上にねえ、老婢今ぢや坊やまでが付いて居るんだから……」とお浪は僅に瞼を拭くのである。

老婢も自然と眼を潤ませて、何にせよ此の一條を取敢ず國元へ通知したがよからう。國元から返事が來たなら何とか思案の附け樣も出來るであらうと忠告したので、お浪は先づ此の淋しい雨の一夜を長い手紙に費して、其れから四日ばかりの後漸く待ちあぐんだ返事

を受取つた。返事の次第は、何も彼も時の運であらうから、氣を落さずに一先づ國へ歸るが可いとの事。お浪は早速心を決したが、扨ていよ〳〵當惑するのはお種の處置である。國元の返事は周章の餘りに書かれたものか、幼兒の處置までは此れと云つて敎へては吳れなかつた。

「老婢、どう爲樣。私が國へ歸る事になれば、名殘惜しいけれど老婢とも此儘別れて了はなければならないんだから、然うすれば坊やは矢張連れて行くより爲樣が無いねえ。」

「左樣で御在ます。」と餘儀なさゝうに老婢も首を頷附かせたが、然し能くお浪の身の上を考へて見ると、例へ一時人の妾になつたとは云へ、此の先如何なる幸運に出會うか知れぬ娘同樣の年若い身體では、萬一嫁に行くとか或は何かに附けて、必ず足手纏になるのは子供である。殊にはお浪からの仕送りを當にして居る國元の事情などを察して行くと、いよいよ心元ないことばかりなので、此れは今の中、寧そ恩愛の情を斷つて、何處か里子なり養子なりに遣つて了つた方が、却つてお浪の爲めに後々の幸福に成りは爲まいか。と心付くので、老婢は殆ど自分の身を忘れた誠實の情から、細々事の譯を話さずには居られなく成つた。

「眞實にねえ。お國まで連れて行つた處が不自由勝な今の場合ぢやねえ、私も長く家に遊んで居る譯には行くまいし、時によつたら又何處へ御奉公に行くか知れない身體なんだから、眞實に彼の兒さへ無ければ、最う何樣に氣安いか知れないんだけれど……。」とお浪はぢッと胸に手を當て息を吐いた。

「御新造さんさへお心をお極めなされば、老婢は……最う身に代へても屹度可い樣にお世話を致します。」と思案に暮れて居るお浪の樣子を見ると、老婢はいよ〳〵我を忘れた熱誠の情に今は稍聲さへ顫はして居る。

お浪はつく〳〵自分の身の上を考へれば考へる程、老婢が云つた言葉の通り、寧そ此の場合に幼兒を捨てゝ了ふに如くは無い……と思ひながら、然し如何云ふ事か母親になつた自分の口からは、永久に其子を捨てて行くとは明白に云ひ切る事が出來ないのだ。又一日二日と過ぎていよ〳〵思案を定めねばならぬ場合になつたが、矢張恩愛の未練は同じ事である。

「老婢。」とお浪は最う喩へられぬ悲しい聲で、「私の身になると到底思ひ切つた思案は出來ないんだよ。だからね、老婢。お願ひだから斯うしてお吳れな。あの五拾圓と云ふお金ね、

那れを老婢に預けて行くからどうとも老婢の可い様に當分彼兒の世話を爲て遣つてお呉れな。國へ歸つた上で若か私の方に好い都合が出來たらば、直ぐ迎ひにも來やうし、然うで無かつたら、其の時こそ緣の無いものと諦めて了ふから、老婢が此れと思ふところへ行末の案じられない樣に何處なり世話をして遣る樣に、ねえ、老婢。」云了つて涙をほろ〳〵と溢した。

「御新造さん御心配遊ばすな。今迄いろ〳〵とお世話になつた其の御恩返しで御在ます：：。其樣大層なお金までお預り申さないでも：：老婢も未だ娘が嫁に參りました緣續きの家も御在ますし、御新造さん、屹度身に代ても惡い樣には致しませんよ。」と老婢も忽ち眼の中を涙一ぱいに爲せると、お浪は最う堪へずに聲を出して泣入つたが、扨て其の夜からは、いよ〳〵家中の道具の始末を爲ねばならぬ。

衣服は悉皆行李の中へ一纏めにしたけれど、持行かれぬ箪笥や鏡臺の樣なものは、矢張老婢へ預けて可い樣に始末を付けて貰ふ事にして臺所や其の他不用の道具は殘らず賣拂つた上、其の代金は別れの紀念方々老婢の所有になる樣に云ひ置いたのである。お浪がいよいよ捨かねた坊やを捨て、忠實なる老婢と別れて、獨り歸國すべき時間は次第々々に迫つ

て來る。午前六時半の急行列車に乘込むと云ふので、車が冷い風を切り、嚴しい霜を冒して、新橋の停車場に着いたのは丁度冬の朝の漸く明け初めた頃であつた。煖爐の焚いてある待合室の腰掛に坐ると、お浪は忽ち小聲で、

「老婢。此處に待つて居る間、坊やを抱してお呉れよ。」

赤兒を其の腕に抱へて伴を爲て來た老婢は、先づ氣遣しさうにお浪の顏を眺めた。

「御新造さん。宜敷う御在ますか。又未練をお殘しなさると、却つて何ですよ。」

「大丈夫だよ。後生だから：：。」と奪ふ樣に子供を受取つて、淋しい微笑を浮べ、「老婢。最う眼は赤くなつて爲や爲まいねえ。昨夜は眞實に餘り泣いたもんだから眼が痛くつて仕樣がない。」

老婢は何とも答へずに、お浪の樣子を見成つた。するとお浪は最う凡の事を忘れて了つたと云ふ樣に人の見る中をも厭はず、吾妻コートの組紐を解き、二枚襲の襟を開いて乳を呑ませやうと爲るのである。

「坊や、阿母さんは故郷へ歸つて了んだからね。たんと〳〵呑んでお呉れよ。最う阿母さんのおつぱいは此れが呑み納めになるのかも知れないんだよ。」

何にも知らぬお種は唯だ嬉し氣に楓の樣な手で母親の美しい乳房を叩くと、お浪は折屈んで子供の頰の上へ接吻しながら、思はずホロリと一滴の涙を落した。

此の有樣を見詰めて居た老婢は最う堪へられぬと云ふ樣に、眼を後の窓の方に外して了ふと、一目に見渡される市街の景色。

斜めに注ぐ麗しい朝日を受けて、河向ふの、ビーヤホールや勸工場や、其れに續いて眺められる銀座の商店の屋根や硝子戸や看板抔は雲の痕なき靑空の下に、齊しく燦爛たる光を放つて居る。

太陽の光と共に一分々々盛な活動の氣力を恢復する街の奥からは、種々なる騷がしき生存の物音、都會の響が湧起つて來て、今迄新橋の欄干や鐵道馬車の線路や處々に認める事の出來た初霜の影も最う消え失せて了つた。絶えず急し氣な鈴の音と共に馳けて來る鐵道馬車の馬は、冷えた空氣の中に、白く太い鼻息を吹きながら、勇しく敷石を蹴る。人力車は幾輛となく其の線路を横切つて停車場の階段へと馳け附けて來る。發車の時間も追々迫つて來たのであらう。待合室の中も大分人が込み合つて來て、外の方には下駄の音が何となく喧しく遠い構内の方に當つては、荷物を投げる音や機關車の轟き抔も聞える樣になつ

た。

老婢は振返つて見ると、お浪は四邊の喧騷にも氣の附かぬらしく、チットお種を抱締めて居たが、折から消魂しい鐘の音が響き出したので、

「御新造さん。大變です。早く被行いまし。」

お浪も喫驚して、子供を老婢に渡して立上つた。然し荷物の始末や乘車の切符は待合室に這入る前凡てを濟して置いたので、お浪は片手に肩掛と洋傘、片手に四季袋を下げて急いでプラットホームに赴いた。人の少い二等客車へ這入ると直樣腰も掛けぬ中に、開けて有る窓から顏を出して、

「老婢其れでは賴んだよ。」

「御心配あそばすな。老婢がついて居りますから……」とプラットホームに佇んだ老婢はお種を抱直して、「御孃ちやん。能うく御母樣のお顏を見てお置き遊ばせ。」

「故郷へ付いたら直ぐ手紙を出すからね。老婢も其の時は何かに付けて坊やの事を知らせてお呉れよ。」

「宜敷う御在ます。屹度、御新造さんの御安心なさる樣な御便を致しますから、決してク

ヨクヨ爲さらないが能御在ます。」

「賴むよ。」と云つたが、其れなり咽喉が塞つた樣に聲が出なくなつて了つた。

氣が付いて見ると、已に寂としたプラットホームには、遲走せに駈付けて來る旅客もなく、遠い末の方から、驛夫が列車の戸を閉めながら歩いて來る足音が一歩〳〵近付いて來る。出發する迄には、最う一分とは餘すまい。プラットホームを越した向うの線路の上には、穩かな朝の光線が動なく輝いて居る。氣の所爲か機關車の吠聲が一際高くなつた樣で、胸は息苦しい程轟き出すと、驛夫が到頭戸を閉めながら窓の下を通つて又一ッ〳〵嬲て其の音も聞えなくなつて了つた。鋭い汽笛の響。

第三

稍傾いた四時頃の日光を浴びて、其の建物は宛然燃える樣に赤くなつて居る岡崎の停車場に下りた時、お浪は改札口の柵の外に自分を出迎へに來て居た父の姿を認めて覺えず歡喜の聲を發したが、其れと同時に、あゝ、唯た二年程見ぬ間に阿父樣は最う十年も老けて了つたと云ふ感じが何より前にお浪の胸を打つたのである。

「お父樣！　電報を御覽なすつたの？」と云つたまゝ近く寄添つて、父の顏を目成ると父も同じく、

「お浪。大層立派に美しくなつて吳れたのう。私は何處の奥樣かと思つた。」と云ひながら娘の肩の上に手を置いたまゝ語を絶した。

父は今年五十六との事であつたが、ひよろりとした身體は最う前の方に屈んで居る。後の方に撫付けた髮と、頤を蔽うた髯とは、醜く半白になり、眼の力も衰へたものか、皺の多い幅廣い瞼が、半ば眼の上に弛んで居る。古ぼけた紬の三ッ紋附きに、秩父の綿入を重ね、黑い毛糸の襟卷をして山高帽子を深く阿彌陀に冠り、白足袋に低い日和下駄を穿いた樣子は其のおつとりした容貌と釣合つて何處までも善良らしい其の氣質を示して居たが其れと共に到底新しい世の波瀾には堪へられぬ人物であるらしい事をも、能く現して居た。

お浪は何となく嬉しい樣な、又悲しい樣な感じに亂されて、自分の美しい東京風の姿が甚しく驛夫や其等の人の目を驚かして居る事には、全く氣も附かぬらしく、暫くして、

「あ、阿父樣、私は今荷物を取つて來ますからね。」と思出した樣に云つた。

「お浪や。荷物は私が受取つて上げるから、お前は早う車に乘るが可い。」

老人は俄に慌忙る如く、ズカ〳〵と荷物取扱所の方に進んで行かうとした。

「阿父様。其れぢや、此の切符を……。」とお浪は金製の合札を渡して、「私は車を然う云ひますよ。」

蹴込へ大な行李を乘せた父の車に先立つて、街の往來へ出ると、眩い夕陽を浴びたお浪の姿は、一際美しく見えたのであらう。誰一人振返つて眺めるものは無かつたが、其の中にも二三人連で歩いて來た土地の藝者が妬し氣に穴の明く程、見遣つて行つたので、お浪は漸く氣恥しくなつて、頻に車の進行をもどかしく思つたが軈て大きい寺院の横を曲ると、淋しい路の上には人影が無くなつて、街端れの小かな門の前に車は梶棒を下した。すると、父娘がまだ車から下り切らぬ中、慌忙て馳出る小い足音がして、ガラリと戸を開けざま、

「姉さん。」とまだ十歳にはならぬ可愛い娘が叫んだ。

「絹ちやん。阿母様は。」と云ひながらお浪は妹の手を取ると、

「阿母様は少し病氣なの。」

「え。御病氣……。」と思はず聲を高めた。父は車賃を拂つて居たが、此の聲を聞附けて、

「これ、お浪、鳥渡風邪を引いたのだよ。心配する事はないのだ。」と妹の方を見て、「早く

姉さんと家へ這入が可い。車屋さん。其の荷物を玄關まで入れて下さい。馬鹿に重い樣だ。」

事實母の病氣は氣遣ふ程のものでは無かつた。妹のお絹が片手に姉の手を取り、片手に四季袋を大事さうに持つて、座敷の襖を明けると母のお慶は双子の羽織を二枚重ねて迎へに出やうとして居る處であつた。年齡は四十七八。何方かと云ふと身體は肥えて居る方であつたが、土色した顏色は氣分の惡い所爲か一層の靑味を帶びて居た上に、其の尖つた鼻と頰骨と、白眼勝の眼附、口元に大きい皺のある口附との爲に、全體の容貌が何となく溫順な相を失つて、寧ろ邪險さうに見られた。然し其の聲は心の底から出る老いた母親の慈悲深い調子で、手づから長火鉢の傍へ座蒲團を敷いてまで、お浪をいたはつた。

夕陽は鼠色になつた障子を透して、室中を眩しい程明くしたが忽ち暗澹たる黃昏が襲つて來る頃まで、殆どお浪は何を話し何を云つたか分らぬ程であつた。行李を開けて、美しい自分の衣服に妹と母親とを驚嘆せしめた後、其の間に包んだ土產物を渡し抔して居ると、室は最う暗黑になつたのである。四人で此の火鉢の傍に膳を取圍み、靜なランプの光の中に食事を爲始めた時には、お浪は旅の疲れの爲めに、久しく失つてゐた完全なる食慾を覺える事が出來、自然と云ふべからざる團欒の和氣に打たれて、思はず昨日までの生活を夢

だと感じたが、然し食事が濟んで、又暫く話をした後、妹のお絹が寢て了ふと、お浪と兩親の間には、忽ち淋しい會話が起される樣になつたのである。

「お浪や。お前はあの……可愛いのが出來たと云ふ事ぢや無いか。どうして連れて來なかつたのだえ。」と母親が先づ問出した。

「阿母さん……。」とお浪は直樣聲を潤せたが、漸くに心を取直して、凡ての事實を殘りなく打明けたのである。手切金は僅百圓であつたから、妾宅を引拂ふ諸雜費、土產物や旅費の爲めに、七十圓しか持參する事が出來なかつたと云ふので、確り肌身へ縛つた胴卷を解いて、先づ現金を兩親の前に差出した。

父親は何とも云はず、稍伏目になつたが、母のお慶は暫く娘の顏を眺めた後、

「お浪や、其では旦那樣の方とは最う悉皆手が切れて了つて、子供は老婢が引取つて呉れたのだね。」

「えゝ。」と殆ど聞取れぬ程な低い聲で、「阿母さん。私と一緒に連れて來やうとは思つたんですけれど、老婢がねえ、種々親切に云つて呉れますし、私も家の事なんぞを考へてねえ。思切つて置いて來たんですよ。」

「お浪、お前は其樣にまで私達の事を思つて呉れるのか。」と父親は突然涙ぐむと母親も同じ事繼續な聲になつてまだ年も行かぬ身空で能く其樣な思案が出來たと云賞へるやら、又親の身になれば初孫の顏も一目なりと見て置き度かつたと、果は深い涙に暮れるのである。

蕭々たる枯葉の戰ぐ音の外には、此の一家を包んだ夜の中からは、全く何等の聲も聞く事が出來ない。喩へられぬ悲しさの上に、お浪は東京の住居に引比べて、漫ろ身に迫る裏淋しさに、涙に曇る眼を上げて見ると、雙方から火鉢を圍んで俯向いて居る父と母との姿が明い燈火の中に、眼の所爲か怪しく浮上つた樣に見えた。そして其の黑い影は後の襖の上に蟠つた儘、少しも動かない。

「阿父樣！阿母樣！何うなすつたんですよ。私は又何處か御奉公にでも行きませうか……阿父樣、阿母樣。」とお浪は譯もなく込み上げて來る悲しさに襲はれて思はず顚へた聲を立てると、

「お浪、何處までお前は不憫らしい事を云ふのだ。」と父親は再び涙聲になつたが、又少し調子を變へて、「然し、お浪。まあ當分は家に居て呉れるが可い。父樣は今少し爲掛けて居る事業があるのぢや。」

「其れさへ、うまく行つて呉れゝばね、最うお前に苦勞なんぞ掛ける事はないのだから。」と母のお慶も窃と眼を拭いたので、

「さう、何様事なんです。」とお浪は稍顔を差出したのである。

「それはね。今度舊藩の方で、或る會社を立てると云ふ相談から阿父様もいろ〳〵骨を折つてお居でなさるんだよ。」

「だから、まア心配せんで呉れよ。此の七十圓と云ふお金……何でも無い様だが、此れ丈けでも、つましく爲て居れば、三月は樂に暮して行けるのだからな。」

一座の話は少しく活氣付く事が出來て、其れから其れと、軈て又半時間程も語り續けたが、漸くに夥しく旅の疲勞を覺えて來たらしいお浪の様子を見て、母親が先づ早く睡眠する事を勸めた。何年前に買つたのか分らぬ古い柱時計は、丁度十時を打ち始めたのである。母親は風邪心地の處から、同じく眠に就かうと云つて、父と共に奥の八疊の間に這入る。お浪は襖を隔てた六疊の納戸で妹のお絹と枕を並べて横はつた。

然し、お浪は甚だしい疲勞にも關らず、如何した事か不思議に寢付かれないのである。一時、強いて眼を堅く閉合せた後、到頭堪へられずに、瞼を開けて暗い行燈の火を眺めると、次の間から、父親の鼾聲、勝手の方には鼠の音がして、一家中は早くも深夜の寂寞に沈んで居るのであつた。悲しい種々な物思ひの湧起る中に、先づ第一に思耽るのは子供の事である。お浪は久し振で懐しい兩親の面影に接し、過ぎた昔の儘なる團欒の物語を爲て居た最初の場合には、全く自分の身體は二年前の月日に立返る事が出來、何處までも娘である様な氣が爲て居たが、然し、忽然として一度明かな意識に立戻つて見ると最う何事を捨てゝも其の子を思ふ母親の悲しみに沈まねば成らなくなつた。自分は能くも冷淡に別れる事が出來た。如何して骨肉の恩愛を切る事が出來たのであらう。今、直にも其の安否を問う手紙を書かうかとまで、お浪は我知らず枕から顔を起したが、其の刹那、身に迫る嚴しい夜の靜寂は、突然隣室から起る激しい母親の咳嗽の爲めに破られた。吃驚して其の方に顔を向けたが、込み上げる咳嗽はいよいよ母親の息を止めはせぬかと思はれる。夜具から半身を跳起して、母親の背を撫りに行かうとすると、吹消す如く咳嗽の聲は絶えて了つた。其れに續いた苦しい唸り聲さへ、直様穩かな寢息になつて、夜の靜さは再び以前にも增して彌深くなつた。

お浪の心は、又直に子供の事に立返らうと爲ながら、然し目前なる兩親の事からも、容

易に立ち離れる事が出來ないので、此の二ッの物思ひは不思議に錯雜して、いよ〳〵睡眠を妨げる。お浪は畢竟子供を持つ樣な身の上になつたのも、考へて見ると兩親の難儀を救ふ爲めから起つた事。そして、既に十分其の責任を盡したからは、多少の物入りは掛つても、兩親の手に子供を引取つて貰はうか知ら。例へ生計は不如意にもせよ、兩親は自分の爲めに今度は其れ丈の煩ひを引受けねばならぬ譯だ、と思つて見て、忽ち然うは云ふものの眞逆其の樣な事は……と直樣否定して了つたが、今度は何故自分は其の樣な理窟を思ひ付く程子供の顏が見たいのだらう。世に云ふ子煩惱であるのか知ら。只だ、譯もなく人手に掛たくない。一人前の娘にする迄、自分の手で育てたいやうな氣がする。そして、此の感情は實に押ゆべからざる母親の情愛で何等の事に因つても說明し得ぬ人間自然の感情であると、お浪はつく〳〵思つたが、其れと同時にすや〳〵寢入つて居る母親の寢息を聞いて居ると、子たる者は如何しても自然と又其の親の身を庇はうとする不思議な或る感情に迫められる。で、お浪は其子と其親とに對する悲しい感情が、云はゞ左右から自分の身を板挾みにする樣な堪難い心持になるのであつた。

然し、漸く夜の進むに從つて、疲れきつた身體は此等の重き物思ひに押潰される如く知らず〳〵暗い處へ沈んで行つて、遂に其の儘睡眠に落ちて了つた。

翌日の朝は然し早く目を覺して、朝飯の膳を圍む時になると、母親は昨夜から熱を發した爲めか、辛くも箸を取つただけで、最う重ね着位で起きて居る事は出來なくなつた。

お浪は驚いて、疊んだ寢床を再び敷延る。お絹は街の藥屋へ發汗劑を買ひに行つたが、少しも快くなる樣子が無いので、其の翌日に、醫師の診察を乞ふと、隨分激烈な流行風邪で、餘病を引起さぬ樣に十分注意せねば成らぬとの事である。で、お浪は一方には母親の看病と、一方には人手の少い家事の雜用に忙殺されて、三日目で届いた老婢からの返事――お種は老婢の娘が緣續きなる或る足袋屋の家に手厚く養はれて居ると云ふ事にも、最う其れ程クヨ〳〵思惱む暇は無かつたのである。

第四

母親の病氣は、然し十四日程して漸く全快する事が出來たが、此の間に、父親は大抵毎日外出して日の暮に歸つて來る。いよ〳〵醫師の許を得て、お慶が床上をした時、父は何時になく微醉機嫌で歸つて來たが、お浪は又此の日の朝、再び老婢からの手紙で、お種

はさる立派な會社員から養女に望まれて居るとの報知を得たので、一同晩餐の膳に向つた時は何となくランプの光さへ毎もよりは明い樣に思はれた。

父は如何にも罪の無い、好人物らしい笑ひ聲を漏して、かの計畫中なる保險會社はいよいよ設立される手筈になつて、今日其の前祝があつた。そして、發起人は大阪へ何かの打合せをする爲めに出發したと云ふ事を話した。

此夜から、一家は彼の發起人の歸宅と共に、いよ／＼開運の時機の來るべきを待ちつゝ幾日かを過した。この間に、お浪は父と共に子供の時から自分を愛して呉れた小學校の先生を久し振で訪問したが、又或時は往來で、昔一家が零落せぬ前に、自分を育てた乳母などにも邂逅したのである。暖い午後には、母親が針仕事をする膝下で、妹お絹の相手に手鞠をつく事もある、飯戯を爲る事もある。お浪は最う昔の通りの罪なき處女に立返つたとしか思はれぬ。次第次第にお種の事や其等の悲しい記憶から遠かつて行くと、遂には妹と同じ樣に、隨分兩親を困らす、娘らしい無邪氣な我儘を云ふ事さへ出來る樣になつた。

然しお浪が此の幸福なる少女生活を繰返すのも、全く暫時の間であつた。十日ばかり過きたけれど、大阪からは何等の報知が無いので、父親は漸く氣遣ひの眉を顰め掛けたが、

其の翌々日になると、戰慄すべき警報は雷鳴の如く、一家中を震駭させた。會社設立の計畫と云ふのは、全く不正なる一ッの詐欺事件であつて、哀れむべき父親は、つまり其の手先に使はれて居たのであつた。主謀者は大阪の色街で不義の快樂に耽つて居る最中、已に其の筋へ拘引されたが、其の他、嫌疑者は隨分多數であつた處から、此の事件は頗る重大なるものとして、關西社會の耳目を驚かした。無論其の本地たる岡崎の街は覆る樣な騷ぎである。父親は其の夜の中に警官の手に引かれて行くと同時に、家宅は隈なく搜索の憂目に遇つた。主人なき家の中に、取殘された母親とお浪は殆んど爲す處を知らぬのである。冬はます／＼寒く、母娘は恐怖と悲痛の中に忽ち困難なる年の暮を越さねば成らぬ場合となつた。然し、父の裁判は何時判決さるゝとも豫想し得られぬ。其の時々の物費りで、今は聊かの金も家には無くなつたのみならず、新に負債を增した此の年の暮、而も來年になつた處が、一向に生計上の見込の立つべくも思はれぬ。母親と娘は毎夜燈火の下に、只だ如何したら可いだらうか、と溜息を吐くばかりである。お浪は東京の妾宅から持つて來た美しい衣服と、指に穿めた二個の指環、金の懷中時計等、凡ての所持品を賣拂つて、辛くも正月を迎へさしたが、扨二月の初めになつて、父親と他の一人だけが、無罪放免になつ

て、初めて家へ歸つて來たものゝ、無一物無財産の外に山の如く借金を擔うた一家は、いよ〳〵其の日の生活をする事さへ出來ない樣な窮境に陷つて了つたのである。母のお慶は父の無罪を祝するより先に、生計の方針を相談せねば成らない。お浪は身を進ませて、

「阿母樣。私の身で適ふ事なら、私は以前の樣に何樣處へお妾に行かうと……少しも悲しい事は有りません。」

「お浪。お前は本心から、さう云つて呉れるのかい……濟まない事だねえ。」と、お慶は涙ながらに娘の手を取つた。

お浪は妾の如何なるものかは、能く經驗し能く知つて居る。けれども此の一時の汚行は長い自分の一生に對して何程の影響を來すべきものか。婦人の運命は常に斯る事から暗黑なる悲慘の方向に進み易い、と云ふ事抔は全く考へて居なかつた。其の時の悲みと恥とは、只だに其の時だけのものゝ樣に思はれるのであつたらうか。現在の過激なる感動の爲めに、未來の怖しい運命と云ふ事抔には全く盲目になつて了ふ無謀なる大膽なる女心！　夫は實に年老つた母のお慶も同じ事であつた。お慶は父親に相談すると、父は最う兎角の返事をする氣力さへ無いので母親は其の儘竊にお浪が妾の口を人手に賴んで遣る事にした。然し、廣い東京とは違つて、中々好い口は見當らない。好し有つたと爲た處が、其の給金と云ふのも月々の仕拂である處から、今差迫つて居る一家の窮境を救ふに適する纏つた金などは、到底得らるべきものでは有るまい。周旋人は其れから其れと話を聞いた後、一時に大金を手にする爲めには藝妓か娼妓に身賣をさせるより外に手段が無い事を說き、更に斯う云ふ事を物語つた。東京から其れ等の取引を爲に來て居るものが今丁度街の旅館に宿つて居るから寧そ其の者に話をして見たら何うであらうと云ふのである。

お慶は絕望して家へ歸つて來た儘夫にも娘にも其れ等の事は少しも知らさず其の夜は何氣なく寢床に這入つたが、扨てなか〳〵眼を閉づる事は出來なくなつた。娘の身を賣れよ、と云はれた其の時には、思はず身顫ひした程、譯もなき恐怖に襲はれ彼の男が云つた五百圓は愚かな事たとへ千圓の身代金を取る事が出來やうとも親の身として如何して其樣酷い無慈悲な事が出來やうか。寧そ腹立し氣に席を蹴立てゝ歸つて來たが、又考へて見ると、何樣にしても無くてはならぬ金の必要……そして、今は他に施すべき手段は一ッも無い。六ヶ年だけ、娘の身を賣るならば、五百圓の金を手にする事が出來る。此の五百圓さへあれば、差迫つた借財の一部を返却し、且つ生活の方針も稍定める事が出來やう。お慶

は次第に此の様な事を思返して見て、又もや自ら怖るゝ如く夜具を深く引冠つた。然し暫くすると、お慶は又思ふともなく、娘は自分達の爲めに身賣を承知して呉れるものだらうか、若し承知した事なら、如何しやう。あゝ！何卒承知して呉れゝば可いが……とまで母親の心は段々恥辱と體面と分別とを失ふべく傾いて來る。世に貧苦と飢渇ほど能く良心の判斷を麻痺せしめるものは有るまい。

お慶は嚴格なる武家の娘で、貞婦は兩夫に見えずと云ふ樣な偏狹なる封建時代の女子教育も受けた身分である。現在の夫山口義之進の家に嫁いだが、長男を產んだ時分、世間の狀態が一變した爲めに、最早や祿を以つて座食して行く譯には行かなかつた。で、お慶は夫の義之進が縣廳の小役人になつた其の家庭を整理しながら、續いて產んだ三人の兒——一人は男他の二人は女——を育てゝ行くと云ふ、隨分困難なる妻の務めをも決して怠る事は無かつた。お慶は生付き勤勉であつた。俗に云ふ働き者であつただけに、虛榮の念も隨分强かつたらしい。屢〻昔の家柄を回想し、現在の非運を嘆つて、夫を勵したけれど、此れには全く絶望して了つたので、今度は男兒に大い未來の望みを掛ける樣になつた。野心多き妻は、諸有る物を節儉して、其の兒に高等なる教育を受けさせ、立派な人物に爲立て

て、幾分でも自分の野心を滿足させやうと勤めたのである。處が、卒業間際になつて、夥しい費用を掛けたまゝ病死して了つたので、お慶は最うがつかりして自分も一緒に死んで了ひ度いとまで云つたが、夫の義之進も其の頃から○○縣の廢止と共に免官となり、一家は段々に零落して行く樣になつた。流石のお慶も、最う榮華の夢からは、全く斷念せねば成らぬ境遇に沈みながら、然し猶、二人の娘の追々に生長して行くのを見ると、時には如何なる運が回つて來て、此の娘が何處か資產のある家へ嫁入りでもするならば……と宛然小說か物語にでもありさうな空想に驅られる事も無いでは無かつた。で此の前お浪が圍者にされたと云ふ談判を持込まれた時にも、最初は激しく正等なる憤怒の情を感じながら、次第に卑劣な利念に屈從する樣になつたのである。

今、お慶は現在の窮乏を救ふ方法と、此に美しい一人の娘を持つて居ると云ふ、此の二ツの事を、全く何等の關係もなく隔離して考へる事は出來なくなつた。混亂し麻痺した母親の心は最早や云ふまでもなく正しい判斷力を失つて居るのである。

人の親たるものは、其の兒を死地に陷れて迄も、其の兒を利用すべき特權を持つて居るだらうか。此の場合に於て娘は一家の滅亡を救ふべき、正等なる將た相當なる力量材能資

格を持つて居るであらうか。如何して其の樣な事を考ふべき餘裕があらう！　お慶の胸には、彼の周旋人が云つた五百圓と云ふ聲丈が絕間なく早鐘の樣に響いて居て、諸有る良心の聲を聞えなくして了ふ。恁うなると、先づ此の五百圓で一家の生計を定めたならば、其の後は身賣した娘の身を引取つて遣るなり、何れ何とか方法も付くであらう、と云ふ樣な、至極簡單な想像を、暗黑不可知なる未來に對して斷定する事が出來る樣になる。

昔は若し少しでも寒い日であつたら風邪を引きはせぬかと無意味な心配を抱いたのに比べたなら、殆ど戰慄すべき矛盾をも今は平氣で、母親は遂に身賣の事をば娘に相談しやうと決心して了つた。

然し其れは猶二日の後であつた。漸く昔の娘に立返る事の出來たお浪は何と答へたであらうか。お浪は悲しさに堪へぬが如く涙を流して泣いたけれど、此の母親の相談を其れ程無法な殘酷なものとは思はぬらしい。否、寧ろ至當である。餘儀ない事である、と許して居るらしい樣子で、

「阿母樣。私の身で適ふ事なら、私は阿母樣の云ふ通りになります。」と云つた。

噫此の思慮なき娘は、抑「親の爲め」に身を賣ると云ふ此の特別なる觀念を何時の時、

何處から敎へられたのであらうか。

母親は更に進んで、「お浪や。お前は阿母樣を怨みはしないかい。」と云ふと、お浪はまた不思議にも、

「いゝえ。阿母樣。そんな事が……。」と何處までも母親が滿足するやうな返事をするのである。

母のお慶は次の日、夫の義之進に向つて、お浪と相談した事柄を話した。義之進は裁判所から放免されたものゝ、其後は全く身體の力を失つた如く、何時も北向きの薄暗い室を自分の牢屋の樣にぢッと閉籠つて居るのであつたが、お慶の話を聞くと飛び上る樣に驚いて、

「えッ。お浪が承知したつて……？　然し、まア其樣事が出來た者ぢや無い。」と稍顏色までを變へた。

然しお慶が此に及んだ餘儀ない事情を話して、さらば其の他に何か手段があるかを質問すると義之進は例の如く首を垂れて了ふのである。お慶が屢々罵る如く義之進ほど決斷力の無い女女しい男は無かつたかも知れぬ。で、何時も生計上の萬端はお慶が心一で始末を

附けて行く處から、今度お浪の事に付いても、お慶は夫に相談したところが、決して義之進は兎角の要領を得た返事を爲し得ぬ事は最初から豫期して居るのであつた。殊に、怖しい法廷に引出され危く罪人にならうとした以來は一層老衰して、妻に對しては全く何の申譯も出來ぬ程、面目を失して居る場合なので、お慶は只だ事情の止むを得ざる事を說いて云はゞ厭應なしに其の翌日到頭夫をも頷付せて了つた。

第五

お浪はかくして深川の遊廓へ送られた。此の廓内では一番大い靑樓に身を沈めたのである。淺間しい賤業婦の生活は殆ど堪へ得べきものでは無かつたらしいが、然し不思議な事には、凡て習慣と云ふものは、殆ど理論を以ては說明し得られぬ狀態にまで人を導く事が出來るものと見える。お浪は優しい女の身ながら、到底男も忍ばれぬと思ふ程な、幾多の悲痛と絕望と迫害と屈辱とにも結局は決して斃れ死する事なく安全に幾年かを過した。今は夜と晝との差別より外には時間と云ふ事には全く無頓着に、何時か最う二十一歲の聲を聞く身となつたが、其の年さへ早や殘り少い十月の初旬、或る晴れた午前の事である、慌

忙しく人力車で新橋の停車場へ馳付けて來て、直樣改札口の柵の傍に進んで行つて、

「鳥渡、濟みませんですがね、あの岡崎から汽車はまだ着かないんですか。」と息急しく質問たのである。

「神戸發の列車ですか？」と驛夫は衣囊から時計を引出した。

「あの、八時五十分とかに着く筈なんですが……。」

「まだですとも、三十分あります。」

「さうですか。どうもお世話樣。」とお浪は輕く禮をしたが、其の儘立去りもせずに何となく心配さうにプラットホームの方を眺め始めた。

そして暫くすると再び驛夫の傍へ進み寄つて、

「田舍から來る人を迎ひに來たんですが、此れから先へは這入れ無いんでせうか。」

「プラットホームですか。それは彼處で入場切符と云ふのをお買ひなさい。二錢です。」

敎へられた通り、お浪は足早に行き掛けると、丁度摺違ひになつた一人の男がふとお浪の顏を見て、

「おや楓……。」と云ひ掛けながら慌忙て四邊を見廻し、「つい呼附けてるもんだから……お

浪さんだつけね、まア珍しいぢや無いか。今時分一人で何處へ行くんだ。穴守様かね。」
「いゝえ。烏渡迎ひに來たんですよ。」
「誰を……？」と男は不審さうにお浪の顏を見詰めた。品格の無い頰骨の出た痩せた顏の、年頃は最う四十五六でもあらう。身體も同じ樣に痩せこけて居る處から、何となく貧相に見えるが、服裝は絲織づくめの立派な商人である。お浪は不審がる男の顏を見返して、
「お客樣のことぢや無いんですよ。」とすこし笑ひながら、「鄕里からね。阿母樣が出て來るんです。」
「さうか……八時五十分だつて。それぢや最う直きだね。どれ、序だから私が買つて來て上げやう。入場切符だね。」
「濟みません。」とお浪も後から、出札口の柵の外へ歩いて行つて、「どうも有難う。小田邊さん、貴下は何方へ被行るの。」
「烏渡橫濱まで行くんだよ。」
「お歸りは晩いの？」
「用さへ濟みやア直ぐ歸る。」

「其れぢや今晩被入つて頂戴な、可いでせう。」と四邊を見廻しながら、小聲になつて、「お願ひだから、ね、小田邊さん。お座敷を仕舞つて置きますよ。」
「さう獨り合點を爲れちやア、どうも驚いたな。」と云つたが、小田邊は如何にも美しいお浪の樣子と其の愛らしい語調に、最う情無くは斷り兼ねたらしい。
「ほゝゝほ。」とお浪は笑つて、再び聲を低め、「今夜阿母樣が來て居る處へね、初會でも掛ると眞實に氣づまりで可厭ですからね、小田邊さん、眞實に私のお願ひなんですよ。」
小田邊は遂に否應なく承知せねば成らなくなつた。橫濱行の列車は、最う出發間際になつて、忙しい鐘の音が響き出したのである。
びつくりして男は折革包を持直すと、お浪は重ねて、
「小田邊さん。其れぢや屹度ですよ。」
「承知だよ。」と小田邊は頷付きながら急いで改札口の方へ歩いて行つた。
後に殘つたお浪は佇んだ儘出發する橫濱行の列車を見送つて居たが、然し心付いて構內の時計を振仰ぐと、時間には僅か五分程である。俄に慌忙て改札口からプラットホームへ進入つたが、目指す列車の止るのは何邊であらうかと、行きつ戻りつ首を伸して遠い線路

の彼方を望んだ。丁度銀の絲を引いた樣に、幾條の線路は、透明なる朝日に輝きつゝ限りも無く延長して居たが、まだ烟も何も見る事は出來なかつた。只だ晴れ渡つた明い十月の空の下には幾棟の倉庫や製作所の汚れた屋根が、彼方此方に散亂して居る幾輛の機關車客車貨物車などと錯雜して、何時も無味荒寥たる停車場構内の光景を示して居るばかり。喧しい勞働の槌の音、恐しい機關車の吠る響は、お浪がせめて此方へ近付く列車の轟きを聞き取らうとする事をも妨げた。詮方なげにお浪はプラットホームの柱に輕く其の背を倚せかけ、茫然四邊を見廻したが、其時ふいと思出した事がある――嘗ては坊やに別れた其れと同じ處に、今懷しい母親を迎へる心持……嗚呼　同じ場所にも人は種々な事に出遇ふものだ。此れが定めない浮世と云ふものか知らと思ふと、一種妙な悲しい心持になるのであつた。そして胸の中には何か分らぬ底深い感慨が湧起つて來て、暫くは喧しい槌の音も最う耳へは聞えず、時間は意外に早く過去つた。突然、高い空に、長く反響を引く汽笛の聲は、お浪の身一人ではない、四邊に小休みして居る赤帽や驛夫や、凡てプラットホームに向つて新しい活氣を添しめる。雲の如き煤烟、雷の如き轟きと共に、母親を運んで來る列車は、最う構内に進入したのである。

お浪は歡喜の情に早くも其の眼を潤した。故郷を出てから以來、お浪は一日とても兩親の事を忘れた日は無かつたが、然し初めの中は怖しい悲しい絶望の底に沈んで了つて其れから次第に其の生活にも馴れて來ると今度は眠たい夢の樣な月日のみを送つて居たので、一度として明かに自分の身さへも振返つて見る暇は無かつたのである。けれども、何時か最う廿一歳の聲を聞く身になつた。考へると身を沈めてから最早や三年になるでは無いか。此の追想は計らずも此の春邊から、屢〻何かの前提であるかの如く其の心を襲ふのであつた。お浪は間斷なき國元からの音信で、其の後兩親はます〳〵貧困の生活に陷りつゝある事を知つて居る。自分は最初其の難義を救ふ爲めに、其の場合には殆ど明かな意識は持つて居ないながら、兎に角に無謀なる犧牲となつて此の身を賣る事が出來た。再び此の遊廓を出やうとも世間からは最う滿足な人間として取扱つてはくれない。一時の犧牲は遂に一生涯のもので在つたのだ。お浪は自ら賤業婦たる其の身を省みて、或時は際限なき痛苦を感じたが、又飜つて見ると自分は彼の場合にはまだ若い娘の身で能くも斯る偉大な決心をなし得たものだ。人の兒として此の勇しき行は、我ながら深く感動せねば成らぬ。嗚呼、其の身が人間として極端な賤しい地位になつたのも、乃ち此の讃美すべき道德的の行ひに

原因したのである。お浪は若し正當な社會の上に在つたなら決して見る事の出來ない無限の光明を、此暗黑の底に沈んだばかりに却て其れを發見し得たのである。一度墮落して了つたからには、自分は如何なる墮落を重ねやうとも、兩親に向つて幾分なりと或る幸福を與へる事が出來るならば、其の墮落は最早墮落ではあるまい。自分の營むものは賤業では無いのだと思つた。

お浪が生れた時には、家庭は猶幾多の幸福に包まれて居たので、其の後の不幸は決して此の娘の心を自暴自棄にはさせなかつた。殊に其の身體は兩親から完全な健康を貰受けたので、自然と其の性質も眞直な鷹揚な、そして單純な判斷を持つ樣になつて居た。不攝生なる遊廓の生活も今は何等の障害さへ彼女が身には引起さぬものと見える。お浪が自分からして一時其の身の健康を氣遣つた事は全く笑ふべき杞憂であつた。最早や睡眠の不足を覺える事もない。忌べき疾病も久く其の身を襲はない。初めから身長の高い身體は、圓圓と肥つて來て、其の滑かな皮膚は丁度絹のやうに何時でも若々しい桃色の血色を輝かした。顏の血色も同じ事。そして二十歲前のやうな無邪氣な愛嬌は今でも其の圓い眼元や小い口元に認める事が出來、其の上に何處か品格のある分別らしい點をも添へる樣になつた。夕化粧をして立つた姿が、丁度明い電燈の光を浴びる時なぞには全く眼も覺める程華麗に美しく見られるので、大方其れ等の爲めでもあらう。このごろでは全樓お浪に匹敵すべき全盛の女は一人もない。楓と名付られたその源氏名はいつもお職の札から下つた事は無い樣になつた。最初は如何した譯かと寧そ安からぬ思ひを爲たが、然し自然と鏡に向ふ時なぞは我ながら其の容貌を誇る事が度々となつた。お浪は三年來顏を見ぬ國元の兩親を思起すに當つて、一方には丁度此の得意なる勝利の時代に這入つたのである。二三度頻繁な手紙の往復の有つた後、お浪は今日こそ、いよ〳〵母親を迎へる嬉しい瞬間に接したのである。

第六

列車はしづかに停つた。驛夫がまだ戸を開けぬ中に氣早の旅客は既に列車から飛び下りるので、プラットホームは忽ち混雜を極める。お浪は最う狼狽へながら人込を押分けたが漸く唯ある三等車の戸口へ馳付けて、

「阿母樣！阿母樣！私ですよ。」と呼んだ。

「お浪！」と云つたなり、母のお慶は人違ひでは無いかと云ふ樣に、ヂッと其の顏を目戍

るばかりである。

「阿母様、荷物は此れ丈けなの？」とお浪は母親が抱へた風呂敷包を見て、「私が持つて上げませうよ。」

「見つともないよ。其の姿で此様包なんぞ持つちや……。」とお慶はキョロキョロ一邊を見廻したが、自分と同車した旅客は皆下りて了つて、車は最う空明きになつて居た。

「其んなら阿母様。赤帽にお持たせなさいよ。重いでせう。」

「何にさ。ほんの私の着換へだけなんだから……。」

「阿母様。さぞ淋しかつたでせうねえ。一人なのに其上夜汽車なんですもの。眞實にお父様も一緒に出て來て下されば可いのにねえ。」

「幾度私が然う云つたか知れないんだよ。お前も定めし殘念にお思ひだらうと思つてね、無理にも勸めたんだけれど、何の彼のッて、矢張昔氣質の人だし、其れに最う年を取つて居るもんだからね……。」

「何處かお惡いんぢや無いでせうねえ。」

「あゝ、身體はね、別に此れと云つて病ふ様な事も無いんだから……。」と母親は絶えずキョロキョロ四邊を見廻しながら改札口へ來た。

「阿母様、隨分廣いでせう。迷子になつちや不可ませんよ。」とお浪は手を取つて、

「此方ですよ。」

出口の方へ進んで、お浪は二臺の車を命じた。そして一先自分の座敷へ母親を連れて來た後人を賴んで何處か近くへ宿を見付けて貰ふ手筈である事を話した。母親は初て見た都會の繁華に氣を奪はれて、最う何が何やら分らぬらしい。車は早くも梶棒を連ねて洲崎の遊廓に這入つたのである。店口へ着くと、若い者がお浪の上草履を出して、

「楓さん。お歸りですよ。」此の聲に連れて梯子段からは新造のお松が下りて來てお浪が手に持つた洋傘を受取り、母親の顏を見て恭しく禮をした。

此の有様は先づ第一に母親の身に意外なる感動と又安心を與へたのであつた。實際、母親は此れ程までお浪が優遇されて居るとは思はなかつた。昔から辛いものとして確定された此の遊廓に這入つたなら、母親は定めし悲しい娘の様子を見ずには居られまいと、心裡では非常な恐怖を抱いて居たのであつた。父親の出京し得なかつた事、母親が遂には勸め兼た事もつまりは此れ等の爲めであつた。所が、先新橋の停車場では、見違へる程美しく

血色の可い娘の様子に驚かされ、續いて今又この有様を目擊したので、淺果敢なる此の一時の喜びの爲めに母親は只だ娘が生活の表面より外には、最う決して其の深い裏面の如何なるかを見知らうとは爲なかつた。否、全く觀察すべき力を失して了つたのである。

實に單純なる判斷を以つて母親は三年以來娘に對して思惱んだ心痛を一時に取り除いて了つたのである。

「阿母様。此處ですよ。」とお浪は座敷の障子を明けて、手づから友禪染の座蒲團を勸めたが此の一室は又もや母親の眼を驚かした。去年の暮に廢業した或る朋輩の座敷が、廣い海と庭を眺望する處から、お浪は其の後をば直ぐ此處に引移つたので、十疊の上の間には床や違ひ棚に其れ〳〵置物や植木鉢や手風琴などを飾つて、縮緬の積夜具、土佐繪の六枚屏風、蒔繪の衣架には錦繡燦爛たる襠裲を掛けた。次の間は六疊と三疊で、長火鉢から茶棚鏡附の化粧臺抔、日常の生活道具が据ゑられてある。お浪は座敷で衣服を着換へて居ると、母親は次の間に小くなつて坐りながら、新造に向つて、

「長年娘が種々とお世話になります我儘者の事で御在ますから。……」とお松が殆ど其の答に當惑する程、くだ〳〵しく挨拶を爲て居るので、座敷着を被つたお浪までも當惑した

様に、

「阿母さん。最う其様何時までもお辭義なんか爲ないでも可いんですよ。お松どんは外の人ぢや無いんだから……。」と長火鉢の向へ座を占めて、「阿母様もつと此方へ被居いよ。御飯はまだでせう。私も未だなんだから。まあ、一緒に御飯でも食べてから、悠々お話を爲ませう。お松どん。何か買つといで呉れたかい。」

「昨晩のね、華魁、甘煮がそつくり爲てましたから、今朝は何にも取りませんでしたよ。」と鼠不入から鍋を取出して、火鉢に掛けながら小聲で、「今日は華魁、生憎お汁が、又お嫌ひの若布なんですよ。」

「爲様が無いねえ。」とお浪は鳥渡笑ひながら母親の顏を見て、「阿母様、眞實に不味い物ばかりですよ。此ん中ぢやね欲しいつても食られる様なものは出來無いんだから、明日にでも見物に行つた時に、改めて御馳走しますわ。」

「まア、お浪や。決して構つてお呉れで無いよ。」と母親は辭退するばかりである。新造のお松が取出す食卓の上の茶碗と殊更銀の箸を見ると此れも母親が喫驚の材料であつた。

「お松どん。」と食事を爲ながら、お浪は思出した様に。「停車場でね。あの小田邊さんに逢

つたんだよ。そして、無理遣りに仕舞つて貰つたんだから、後で鳥渡表へ通しといてお呉れな。」

「さうでしたか。今夜被入るんですか。」

「他分來るだらうよ。彼人の事だから、來ないでお仕舞なんか爲る氣遣ひは無いからね。」

「ほゝゝほ。先づ然うですね。」とお松は土瓶へ茶を入れながら「何しろ、華魁、彼の年になるまで、此れッぱかしも今迄遊びをした事が無いんだつて云ふ話ですからね。無理も有りませんやね。」

「眞實だねえ。然し惡く摺れてるよりかまだ何方かッて云へば始末が可いわね。」と思はず話を岐路へそらしたが、

「お松どん、今に誰か來ると面倒だから、今の中に阿母樣の泊る處をね聞合しといてお呉れな。ほんの夜だけ靜に寢られる家なら可いんだから、ねえ、阿母樣。」

「あゝ、そうとも。眞實にお世話樣ですね。」と鳥渡お松の方を顧みた。食事を濟したお浪は、直樣煙管を取上げる。

「座敷へお泊んなすつても私の方は構はないんですけどもね、夜が晝なんだから。」

新造のお松は此邊には綺麗な宿屋も無いと云ふので、寧その事、自分の娘の家が入舟町で廓にも近いし、そして鳥渡小綺麗な二階が明いて居るから、其れを選んだらばと云つた。

「さうだね、お松どんの所なら、他の家よりは氣が置けないしね。」とお浪が賛成したので、母親は無論何とも云はなかつた。

「それぢや、鳥渡さう云つて來ませうよ、何とも云ふ筈は無いんですけれども先ア鳥渡斷わつといて遣る方が能御座んすから。」とお松は食卓を引下げたが、「華魁。今日は不動樣でしたね。序にお神籤を取つて來ませうか。」

「又氣に掛るのが出ると可厭だから、お神籤は眞平だよ。其れよりか。何か上味しいお菓子でも買つといでな。」

「ほゝゝ、お神籤よりお菓子の方が確かですね。」とお松は半纏を羽織に着換へて廊下へ出て行つた。

第七

朝も十時過ぎであらう。晩秋の日光は室中を蒸暑くするかと思はれる程なので、お浪は

ネルの寢衣に重ねた袷羽織を脱ぎ捨てるばかりか、障子を明けて欄干の外に捲上げた簾を下した。海は眠れる如く横はつて居たが、樓内も又疲れた晝の寂寞に沈み初めた處なので、お浪はいざと云ふ樣に母親の方へ膝を進めたのである。

然し母親は今何から話して可いか、全く途惑ひする樣に只だ其の眼を大きく睜つた。見れば見る程、立流に成人びて了つたのは娘の樣子で、母親は自分の姿の見すぼらしいのに面目なささうに見えたが、又同時に、老いたる親の身を支配する懶惰なる依賴心は、胸の底の何處にか湧き起つて來るらしい。お慶は自から企まざる哀れの調子で物語つた。

其の後一家は町端れの小いながら、門と垣ある其の家にも住み兼ねて或寺院の構内なる小屋同然の小家に引移つた。

尤も此の寺院の住職はお浪も見知つて居る。父が零落した後にも長年親しく往來を絶さなかつた最う七十近い老僧で、寺にある米までを仕送らうかと云つたが、其れでは餘り面目ないと云ふので母と妹は街の人の針仕事に其の生活を支へて居るとの事である。お浪は其の時々の音信で已に其の大略は知つて居ながらも、母親自身の口から此の話を聞くと、今更に新しい悲しみを促されて、自然と眼を潤さずには居られない。

「阿母樣。私もね、今迄如何かして幾分でも……月々五圓でも十圓でもね、何かの足しにお送り爲たいと、手紙が來る度々に然う思ふんですけれども、なか〳〵其樣餘裕が出來る處か、月々お松どんなんかにも借金が出來る位でね、眞實に思ふ樣には行かないもんだから。」と少し伏目になつたが、又顔を上げて、「だけれどもね、最う暫くしたら屹度如何かしますよ。」

思ひ出した樣に座を立つて、用簞笥の抽斗から半紙を四折にした帳面を取出して、「阿母樣。御内所の方の借金はね、其れでも最う半分上は稼いであるんですから來年一ぱいも稼いで、自前になりさへすれば、どうかかうか阿母樣の方へも送金れる樣になりますよ。」

「眞實に嘸ぞ意氣地のない親達だとお思ひだらうけれど、何しろ阿父樣はあの裁判からは滅切老衰つて了ふし、お絹はまだ子供の事だし、眞實に皆々が賴りに思ふのはお前一人なんだからね、何時でも阿父樣と二人でね、お前の事を最う自分の兒だと思ふよりは、命の親だつて能く然う云つて話をするんだよ。」

「まア、阿母樣！」とお浪は胸迫つて涙をハラ〳〵と流した。最早や自分の身も何も顧みる暇はなくなつた。

あゝ如何かして一日も早く、兩親の身の上を安樂にして上げたい。お浪は殆ど解すべからざる感動に心を覆へらしたのである。

翌日お浪は新造のお松を案内にして、東京見物にと母親を先づ淺草の公園に連れて行つた。淺草から上野を見た後、日本橋方面へ來て水天宮へ參詣すると、西の空は最う燃る如き秋の夕陽に彩られて居る。

次の日には又もや銀座通りと芝の公園、歸途に深川八幡の公園を見物させ、殆ど歩けぬ程に草臥れて歸つて來たのである。

五日程して母親は再び歸國する事になつた。お浪は汽車の時間都合で、新橋までは見送りに行く事が出來なかつたので、せめてはお松を賴んで二等の切符を買はせ、發車する時まで何くれと氣を付けさした。無論其の以前に、お浪は諸有る算段をして、父親とお絹とお寺の人達にも、其れ〳〵送るべき相當の土產物を母に托したのであるが、此等の夥しい物費のあつたにも關はらず、扨て來年からは如何樣にしても月々十圓位づゝ送金せねば成らぬといよ〳〵其の決心を堅くした。と云ふものゝ、お浪は今の境遇では到底爲すべき手段が無いのである。毎月此の座敷の諸入費は何の彼のと全體で二十圓程を要するので、其の月々、稼いだ玉數が先づ非常の出來高を得たとしても三分の二は樓主の方へ取られて了ふので、如何しても今の場合、其れ丈けの餘裕を得るには、是非とも遊客の懷中を惱ますか、さうでなくば、寧そ誰か金目のある一人を目附けて自前にして貰ふより爲樣が無い。

思案に暮れてお浪は先づお松に此の事を打明けた。

すると、お松は直樣事も無げなる調子で、其れは無論、金目の有る一人の客を捕へねば成らぬ。此れは慥かだと目星を付けたならば、何でも其の人に相談を持込む樣にと、種々經驗ある忠言を與へた末に、差詰め彼の小田邊が適當であらうと云つた。

小田邊と云ふのは長年小傳馬町で大い藥屋の番頭を勤めて居たが、今年の春とかに暖簾を分けて貰つて、人形町通に相應の店を出した極く手堅い舊式の商人である。で、此の夏頃同業の寄合か何かの崩れが、大一座で廓へ乘込んで來た時までは、全く今迄斯る土地へは足を踏み入れた事が無かつた。

小僧の時から、軈ては活氣ある青春の時代をも、彼は何時も薄暗い帳場格子の中に垂頭きながら算盤を彈いて居た。然し三十を越した時に、彼は同じ主人の家に使はれた仲働きと、飛でもない間違ひを演じ出して其の時には殆ど解雇されさうになつたが、漸く通ひ番

頭と云ふ事になつて、その醜い一時の女を永久の妻にしたのである。

斯る特別の經歷ある者に取つては、遊廓は往々破滅と死の宣告場である。小田邊は其の後一月に一度或ひは二度と、今では三度と缺かさぬ馴染の客となつたばかりか、お浪の歡心を得る爲めに、賴みもせぬ贈物を持て來る事もある。そして、今度母親が出京して居る事を知つて十圓の金を、無理强ひにお浪の手に受取らしめた抔隨分笑ふ可き遊びをする男であつた。

お浪は此の痴漢に對して、自分の要求を申出すのは、わけのない事とは思つたけれど、然し如何云ふ事か其の年は其の儘に暮して了ふと、賑かなる春も已に二月近くとなつた。

「華魁！」と或る朝お松は物思はし氣に火鉢に凭れて居るお浪を呼んだのである。「華魁。あの御相談は如何なすつたのです。最うお話しなすつたんですか。」

「まだ云はないのさ。賴みさへすればね、借金だつて最う幾何もないんだから何とか話は付くだらうけれども、然し其れだけの恩を着るとね、又何の彼のと野暮な人の事だから、後來まで面倒な譯になりや爲ないかと思つてさ。」

とお浪は弱々しい調子で答へた。

「何ですねえ、華魁。」

お松は卑しむやうな微笑を浮べて、「華魁もまア何時まで素人らしい事を仰有るんでせうねえ。此の商賣をして居れば、さう何處までも好い事づくめには行きませんよ。背に腹は替へられ無いつて、昔からも云ふぢやありませんか。其アね、恩を着るとは云ふものゝ、其樣事を云つた日にやア、千人が千人でもお客樣には、皆それ〳〵恩になつてるんですからね、然う末の事まで氣を廻したら、一日だつて商賣は出來ませんよ。」

此れは道理であるかも知れぬ。お松はお浪が自前になつて呉れたならば、何かに附けて自分にも餘德が多くなるので、是非にも事の道理を云はねば成るまい。二月の或る寒い夜、お浪は何等の恥をも思ふ事なく、その習慣となつた艶かしい態度で蘭燈暗き屏風のかげに彼の痴漢を說いた。

小田邊は夢現の如くお浪の手を把つて、寧そ身受を爲樣かと云つたのである。然しお浪に取つては此の醜い商人一人の弄物になつて、限り知れぬ長い月日を送る事は實に堪へ難い事なので、語巧みに、身受をすると云ふには身賣の金ばかりでは無く其の他に非常な費用が掛かる、其れよりか自前にして貰つて、一二年稼いだ後、靜に廢業して此の身を任

せ様と云ふ事を答へたが、此の時、お浪の手は流石輕く顫へて居た。

二百圓に近い大金は程無く、小田邊の手から樓主に渡され、お浪は自前と云つて、所謂自由營業の身となつた。

稼ぎ次第に其の玉高の半分は自分の所得とする事が出來るので、國元の兩親へは月々十五圓づゝ仕送りする事と定めた。お浪は此處に一際全盛の花を咲かせねば成るまい。

彼女は、今飽くまで自分の容貌と並びに其の健康とを誇つてゐる。物馴れた曉には遊廓の生活程、自由氣儘で愉快なものは無いかも知れぬ。夜毎遊びに來る客への待遇方も實に易々たるものだ。

飢ゑたる慾情の爲めに常識を失つて犬の如く寄集つて來る彼等は、絃歌と酒とに腦髓を攪亂された後、各々疲れて暗い燈下の一室に倒れて居る。

五人あらうが六人あらうが、其等を一身に引受けた女は恰も牢屋の中で飢えて居る囚人に、一椀の食物を附與して歩くと云ふ樣に只だ譯もなく賤業の義務を濟すのである。けれども、已に物馴れた女の身には此の戰慄すべき背倫の所業も決して其の健康を冒さぬものらしい。最初お浪が遊廓へ這入つた當座、何時も涙に暮れて居るのを見ると、お松は冷か

な聲で、「今に馴れてお了ひなされば何でも有りや爲ませんよ。今ぢや御覽なさい。彼樣元氣の好い信夫さんでも三扇さんでも、華魁がたは皆初の中は辛い〳〵つてお泣きなさるんですが此の商賣をした爲めに、身體を破して死んだ華魁なんぞは、今だに一人だつて有りや爲ませんよ。」と云つたが、全く其の通り、女性は實に男性とは全く異つた組織の身體を持つて居る。

天は此れ等の女性に向つて、現在の社會が罪惡汚行だと稱して居る所業に斯の如く適當なる不思議の體力を、何故に附與したものであらうか。吾等は社會に在つて各自の力限り各自の幸福を得べく競ひつゝある。其れと全く同じ樣に助なきお浪は天より得たる美しい容貌と其の不思議なる體力とを以て今や飢と寒さより其の兩親の身を安全ならしめた。

其れのみならず、自身にも女の慰藉たる衣服や種々の裝飾品を買ひ求めて屢朋輩の女を羨望せしめた。

此の全盛の中にその年も凉しい初秋を迎へる樣になつた。

小田邊は其の後も引續いて次第に足繁く通つて來る中いよ〳〵お浪を身受して其の熱烈の情を滿足させ樣と云ふのである。

「小田邊さん。その思召は、眞實何ともお禮の申樣が有りませんけれども、其樣無暗な事を爲すつては私の身になりますと、お宅のおかみさんに申譯が無くつて、……」と例の如くお浪は言葉を改めて辭退するより爲樣が無い。

「いや其樣事はお前が兎や角云つて吳れないでも、乃公さへ承知して居れば可い事だ。楓さん、此れ程までに眞實を見せても未だ承知して吳れないのか。」と小田邊は絕えず物云ふ唇を顫すのである。彼は最早や二三年に渡る放蕩の爲めに、半生の事業であつた其の店も殆ど維持する事の出來ぬ境遇に陷つた。次第に迫つて來る暗き破滅の影に裹まれて、彼は全く狂氣の有樣になつたので、誠實なる其妻を離別し、其の商店を賣拂つて、何處か狹小なる住居の中に半月一月たりとお浪と一緒に暮し度いと思つたのである。

此れは實に彼が一期の思出であつた。富貴も信用も將た其の生命さへも最早や彼の顧みるところでは有るまい。その屈んだ小さい身體は一際屈んだやうになり、其の凹んだ眼は何時も怖しい物に魅入られた如くキョロ〳〵光つて居る。そして折々物に襲はるゝやうに突然手足を顫すことがあるので、お浪は最う怖しく、到底も薄暗い一室などでは長く話を爲て居ることは出來ない位になつた。

烱眼なるお松は既に委しい事情を想像して居るのであらう。大切な華魁の身に萬一の事でもあつてはと、時には深く心痛の種としたが、其の樣な事には至らずとも、小田邊は最うお松の身には堪へ難い煩ひであつた。と云ふのは、お浪が如何しても其の無謀なる要求を承知せぬ處から、何か外に色男でもある爲めでは無からうかと、少時でも自分の傍を離れると、狂氣の樣に座敷の外に飛出してしまふ事である。

今此の哀れむべき痴情の奴隸は、お浪の手を引捕へて、

「楓さん。私に見込まれたのが、お前さんの不幸なんだ。私は死んでも楓さんと同棲にならなきや承知しない。如何あつても後生だ！　私が今迄盡した事ア楓さん忘れは爲まい。何ぼ薄情な商賣だと云ひながら、此の期になつて、楓さん、お前さんは私を袖にする心算なのか。」

「まあ。其樣譯ぢや決して有りませんけれども、此處を出ると云ふ事になれば……私だつて一應は國元へ相談して見なければ成らないんです。此末だつて家の世話をして行かなければ成ら無い身體なんですから、全く私の心任せには成りませんわ。」とお浪は漸く逃道を見出したが、小田邊は此れからと云ふものは殆ど猶豫なく國元への相談の成行を問ひ質す

ので、お浪は再び返答に窮する場合となつた。

然し、お浪はお松と熟議した末、結句好い事を思付いたのである。國元からは父親が氣遣ふ程では無いけれど、少し風邪に冒されたと云ふ報知があつたので、其れ等の事を利用して樓主へは二週間程の休業を請求し、一方には小田邊の難題を逃れる爲め、一方には久しく見ぬ國元へ保養に行かうと決心した。

第八

最う幾年か以前の事である。捨棄ねた幼子を見捨てゝ、遠い故郷へ立歸つた其れと同じ一番の列車で、お浪は同じ時間に故郷の街の停車場に着いたのである。けれども、未だ日の長い九月半ばの事なので、太陽は眩い空から依然として夏らしい強い光と暑さとを投げて居る。然し折々何處からとも無く流れて來る風には云はれぬ涼しさが含れて居て、長い旅行の列車からプラットホームの土を踏むと、お浪は自然と胸廓が開く樣な爽快を覺えた。誰か出迎に來て居はせぬかと構内を見廻したが、別に其らしい姿も見えないので、直樣人力車を天願寺と云ふ寺院へ向けて急がせたのである。

お浪は車の途すがら、早くも思浮べた。此の天願寺と云ふ寺院の門内は自分がまだ幼少い時に乳母の手に引かれながら此の上もない樂しい遊び場所とした處である。其處は今でも廣々した茶畠になつて居るだらうか。奥深い本堂の前には大な木蘭と木犀が有つた筈だ。怖い蝙蝠の居る鐘撞堂は如何したらう。黑い門は其の時分から暴風でもあつたら倒れは爲ぬかと思はれる程であつたが、今も其の儘に殘つて居るのか知ら。其の傍には二棟の小い茅葺の小家があつて、自分が名古屋へ奉公に出る前までは、昔の儘に一軒は年老つた寺男、一軒は花賣の母娘が住つて居たが、今兩親の住居にして居ると云ふのは必ず此の中の何方かであるに相違ない。去年母親の出京した時には、唯だ悲しい思ひに遮られて委しい話を聞く暇が無かつた。能く木蘭の花やお茶の實などを取つて呉れた翁の面の樣な顏をした彼の寺男は、最う死んで了つたかも知れない。其れとも彼の人形の樣な美しい花賣の娘——能く自分に薄の穗で造つた姉樣を呉れた事があつたが其の娘と何時も大い眼鏡を外した事の無い彼の母親とは、何處へか越して行つたのか知ら。車は何時か街端れへ出て、緩やかな坂を下りながら、程なく寺院の高い屋根を眺め得たが、猶も近付くに連れて、あゝ其の大い門は依然として風にも雨にも倒れず、昔の儘なる古びた形をして、危氣に立つて居た。

宛然夢の樣な心持がする。今朝がた身輕く東京を出て來たとは如何しても思へない。何處か遠い〳〵處へ、長い十年の旅からでも歸つて來た樣な、謂はれぬ一種の感情に打たれたが、門内を望むと猶更、お浪は最う立止つた儘車夫に賃錢を渡す事さへ忘れて了つた。時勢と云ふものは此の蕭條たる寺院の中へは進入る事が出來なかつたのである。滿目の光景一つとして昔に變つた事なき門内には、今しも秋の日光がパッと目覺る樣に差込んで居たので、其の向うの本堂は、丁度明い瓦斯燈の光で眺める夜芝居の書割の如く妙に黄ばんで見えた。苔の花咲く茅葺の二軒家の、先か手前か、何方の戸口へ訪れやうかとお浪は浮立つ樣な嬉しい當惑の首を差伸しながら、内の樣子を聞定め樣とすると突然ゴーンと打出す鐘の音に驚かされた。然し唸るやうに長く尾を曳く其の餘響を聞くと、此れさへも、お浪が耳の底には何處か忘られぬ懷しい昔の音色を思出させるのである。

「阿母樣。最う五時のお鐘が鳴り出してよ。何時もの處へ行て來ませうか。」とまだ二撞目の鐘が打ち出されぬ前に今度は可愛らしい冴えゞ〳〵した妹お絹の聲。それでは彼の寺男は猶丈夫で居たと見える。一家が雨露を凌いで居るのは、彼の花賣る母娘が住居した方の藁家であつたのだ。

「絹ちやん姉さんだよ。」

同時に又鐘が響き出した。思ひ掛け無いお浪の聲は一時に内なる親子三人を飛上らせた。驚喜の叫聲、狼狽の物音と共に煤けた障子は破れる程慌忙て引開けられると、轉る樣に馳出た妹のお絹は、最う夢中で、お浪の手に縋付いて、

「阿父樣！阿母樣！姉さんが……。」と餘りに息を切らしたので滿足には云ひ得なかつた。

兩親も遲れず上口へ出で、

「お浪や、はつきり時間を知らして置いて呉れゝば、停車場まで迎ひに行つたのに……。」

「あら、さうですか。其ぢやつい急いで手紙を書いたもんだから……。」とお浪は足元の柔い苔の上に置いたズックの旅革包を取上げながら、靜に上口に這入つて下駄を脱いだ。

内の樣子は矢張見覺えのある昔しの通りで、勝手の外には住居と云ふのも僅か二間しか無い。彼の大い眼鏡を外した事のない花賣の母親が、能く冬の日和に背を曝しながら草鞋を打つて居た八疊の間の縁近くに、お浪は疲れた旅の身體を坐らせて、見るとも無く、其の低い煤けた天井、蔦の纏る竹の窓、手習草紙で貼つた壁、向の目隱にと緣先へ植附けてある大な無花果樹など、ズッと四邊を見廻すと、遠い過去つた幼い時の生活は、忽然とし

て再び此處に呼返される。何たる奇遇ぞ。恐くは自分の生涯に於て、最も幸福で最も美しかつた歴史の舊跡には今や其の兩親の最も不幸なる生活が其の場所を占めつゝあるのだ！お浪は自然と眼を潤せ何の言葉も無く俯向いて了ふと、其周圍を取卷いた親子三人も、暫くはお浪の樣子を打眺めた儘、何から云出さうと各々途迷ひするらしい。

意外なる一室の沈默に、お浪は直樣心附いて、不圖我に返つた如く、先づお絹の方を見返りながら、

「絹ちやん。何時でも急ぐもんだからね、好いお土産を買つて來る暇が無いんだけれど、此ん中に這入つてるから出して御覽。」と旅革包を引寄せ、鳥渡立膝になつて其の口を開けた。

「姉さん。何れ？　早く見せて頂戴よ。」とお絹は俄に元氣附いて、姉の方へ摺寄つた。お浪は着換の衣服を引出して、其の間に包んだ小箱を渡すと、

「何に？　あら、阿母樣！　御覽なさいよ。綺麗な簪だこと！　阿父樣。まるで眞實の花の樣だわね。」と兩親の目の前に差付けた。

「おゝ可いものを貰つたのう。」と父親は同じく子供の樣に大事に手の上へ受取つて、光線

の來る方へ差出しながら老眼を細くさせたが。母親は先刻からつく〴〵見飽きがせぬと云ふ樣に、猶ほお浪の樣子を目戍つた儘で、

「お浪や、まア衣服でも着換へて……鳥渡其の不斷着の單物に着換へて御覽よ。眞實に品が好く結へたねえ。」

お浪は全く意外なる扮裝をして居たのである。身の定まつて居らぬ女の一人旅は危險であると云ふお松の注意と、又一つにはお寺の人達を初め、其他國元の知己には、深く其の身元を包んで、只だ東京の或る處へ緣付いて居ると云ふ事にしてあるので、お浪は縞の細い京お召の單衣に、紹の晝夜帶も態と目立ぬ黑ッぽい方を表にしたばかりか、紋羽二重の帶揚さへ赤いものは締めず、髮は品の好い丸髷に澁い小豆色の手柄を掛けて居た。

「阿母樣、丸髷を結ふのは始めてなんだから、昨夜は眞實に大騷ぎだつたのよ。だけれども、此んなら最う何處から見たつて眞實の內儀さんでせう。今朝もね御內所の……。」と何の氣も無く云掛けたが、母親が慌忙てた目配でお絹の手前を憚つたので、お浪も俄に狼狽へながら漸くに、「阿母樣。大變老けて見えるでせう。ほゝゝほ。」

「さうだね。」と母親は猶も四邊へ目を配りながら、「如何しても最う二十五……六位にも見

えるよ。」

「え。お浪は最う二十六に成つたのかね。」と突然父親は何を聞違へてか突飛な聲を出した。

すると母親は腹立し氣に、

「然うぢや無いんですよ。お浪がね大變に老けて見えると云ふ話を爲て居たんですよ。」と

又お浪の方を見返しながら、「眞實にあなたも如何したと云ふんでせう。お浪の歳を忘れて

お居でなさるんですか。」

「何に、忘れるものか。」と云つたが、不圖胴忘れを爲たと云ふ樣に、其の鈍い眼で茫然お

浪の顏を見た。

「二十二ぢや有りませんか。ねえ、お浪。」と母親は叱る樣な調子で云ふと、父親は又驚い

た樣に齒の脫落ちた口を開いて、

「あ――」と不思議な聲を發した。

「自分の娘の年まで忘れて了ふなんて……。」と母親は最う心から腹立しさうになつて、「此

れだもの眞實に困つて了ふ。ねえ、お浪や。」

「はゝゝは。」と父親は俯向きながら餘儀なさゝうに笑つた。

母親は緣先へ差込んで來た夕陽を見て急に忙なく座を立つて、「お絹や、姉さんに御馳走

を爲樣から、お前はあの三郎兵衞の處へ行つて何があるか大急ぎで見て來てお呉れな。」

「えゝ。」とお絹は機嫌よく最う勝手の方へ行き掛けた。

お浪は父義之進と二人ぎりで、何か話を爲やうと膝を進めたけれど、父の樣子を見ると

全く何にも云へ無くなる。其れは今も母親が云つた通り老耄した父親は幼い子供の樣にた

わいなく彼の花簪を眺めた儘であつた。今年は丁度本卦返りをしたのだと云ふものゝ、お

浪はつくづく悲しい氣がした。

繫る連鎖の樣に其れから其れと襲ひ來つた不幸の爲めに、老人の弱り果てた心は、其の

身體よりも先に死んで了つて最早や悲しい事にも嬉しい事にも全く無感覺になつて了つた

に相違ない。彼には飽まで情無かつた諸有る浮世の出來事も、今は凡て忘却の烟の中に搔

消されて了つたので、老人は却つて安閑と終日此の緣先――其處には彼の花賣の母が絕え

ず草鞋を打つて居た同じ場所に、此れは何も爲す事なく、無果花の樹へ美しく射込む日の

光と、雀の群を眺め、折々はお絹が遊ぶ手鞠や姉樣抔の仲間入をしたり、或はうろ〳〵通

過るお寺の三毛猫を呼んで他愛もなく膝の上に抱へて見たりして居るばかりである。此夜

母親は父と妹が先に眠つて了つた後、こま〳〵と次のやうな消息を物語つた――去年自分が出京した時分までは其程の事もなかつたが、今年になつてからは全く何と云ふ有様であらう。自然の成行で爲方が無いとは云ふものゝ、然し時々には最う一度老人の心を呼覺す事もあらうかと、嚴しい忠告やら泣言やら、若しくは意氣地なく云罵しる事もある處から、老人は恰も嚴酷なる先生に對する子供の如く其の妻を恐れる樣になると同時に、愛らしい少女のお絹とお寺の三毛猫とは一日も無くてはならぬ離れ難い友達になつて了つた。

お浪は翌日から親しく父が生活の有樣を目擊すると、此の敗殘老衰したものに對しては、若い力ある者は縱へ其の子では無いにしても出來得る限り助け勞つて遣らねば成らぬと思つたが、此れ等の感激は、增々お浪をして己れの身分と己れの力の果して何んであるかを顧みる暇無からしめる許り。運命と云ふ事には全く盲目なる大膽な娘は殆ど何等の秩序もない其の感情の儘に、一日も早く溫い安樂な美しい住居の中に父の餘命を安全に送らせたいものだ、と矢の如き慾望を感じたのである。

死んだ兄達の墓參や、お寺の和尙樣へも義理を濟して了つて、最早十日も過ぎた或日の夕暮であつた。再び東京へ歸る時期も迫つて來たと云ふので、お浪は樓主や店の者抔に送るべき其れぞれ多少の土產物を買ふために、母親と二人手を引きながら街の方へ出て行つた歸途、松の繁つた古城の濠端を歩いて來ると、蒼茫たる秋の暮色は灰色した石垣の彼方から、道の片側に竝んだ幾軒かの邸宅を物靜かに包んで居る。何となく肅然たる此の城下の光景は、其の濃い暮靄の底から今にも大名の行列でも進んで來は爲ぬかと思はれる程なので、母親は何時か知ら、物思ひに沈む樣子に成つて、不圖黑い門構への屋敷の前に差掛ると忽ち其の鈍つた歩みを止め、

「お浪や、お前は最う見覺えては居まいねえ……。」と云ひながら娘の袖を引いた。

「何をです？」

「このお邸宅だよ。昔は阿父樣も此處でお生れなすつたんだし私が初て阿父樣の處へ嫁たのも此處だし……。お浪や、お前が生れたのも矢張此處なんだけれどお前が生れるとね、其れから半月と經ない中に、到頭人の手に渡つて了つたんだからね、見覺えてお居での筈は無いだらうけれど、そら、あの二階から、此方の方に出て居る大な松の樹まで、全然其の時分の通りだよ。人の身程測られないものは無いねえ。」と母親は最う聲を潤したが、お浪は殆ど呆れたと云ふ樣に、

「阿母様。此のお邸宅が阿父様の……。」と口を開いたなり何とも云へなかつた。

「あゝ、考へると眞實に死んで了つたらと思ふんだよ。何程人の身が測られないつたつてね……。」と眼を瞬いたが、「お浪や最う急いで歸らうよ。何の氣なしに歩いて來たんだけれど、此樣事なら向ふの通りを曲つて行けば可かつた。幾何泣いたつて定つた運なんだから……。」

「阿母様、誰のお屋敷になつてるんです？　あら、鳥渡……二階から琴の音が……。」とお浪は惆悵として去るに忍びざる如く今は却つて母親の袖を引止めた。

「何と云ふ方が被居るんだか、此の邊は何かに付けて昔が思出されるからね、阿母様は最う幾年と通つた事が無いんだから……。」と母親も愁然として再び二階の方を望んだ。すると得も云はれぬ優しい聲で、

「富貴と云ふも花の名――」と歌ひ出す一曲の組歌。

「阿母様。屹度お嬢さんでせうねえ。あゝ好い聲だ。眞實に奥床しいもんですねえ。」

「昔ならば、お前だつて……。」と母親は俄に堪へ切れぬ涙をはら〳〵と溢した。

お浪も此れが自分の生れた處で、そして此の美しい琴の音を聞いては、何となく自分の

美しかるべき運命を彼の知れざる令嬢に奪去られたと云ふ樣な、云はれぬ深い感慨に打れるのであつたが、忽ち母親の樣子に喫驚して、

「阿母様。燈火の點か無い中に急いで歸りませう。何に人は時世時節ですもの、些とも氣を落す事は有りや爲ませんやね。」と母の手を取つて最う早足に歩きながら、

「其れアね、阿母様。私だつて今見た樣に琴の音にでも聞惚れるとね、浮世の風は知らないつて云ふ樣な、お姫樣の身分を何とか思ひは爲ますけれど、考へて見るとお嬢さんだの奥樣だのつて、堅苦しく爲てるよりか、寧そ不自由でも、好きな事を云つて暮してる方が餘程可いと思ひますよ。」

母親は何とも云はずに俯向いて歩いたが、然し暫くすると漸く顔を上げて、「阿母様だつて、其は最う逃れられない不幸だと思へば、今になつてから、彼の舊の邸宅が何であらうと、其樣事を決して兎や角思ふのぢや無いけれども、今の樣な小屋も同然な其さへ自分のものではなし、他人の惠みになつて居るのでは、何ぼ何んでも餘り情ない……せめては此の前まで住つて居た家位には這入り度いと、今まで幾度阿父樣に元氣を付けて見たか知れないんだよ。けれど意氣地の無い事つたら、私は最う考へると此れから先の事まで今に如

何なるんだらうと寧そ死んで了ひ度い樣な氣がするんだよ。」

「阿母樣。其樣に氣を落さないでも、私が居ます……浪が今に屹度どうか爲ますから……。」

「お浪や私が賴りにするのは、全くお前一人だから……。」と母親は歩みながらも、窃と涙を啜つたが、俄に其處此處と、灯の見え初めたのに氣が附いて見ると最う四辻である。母親は慌忙て左の方へ曲らうと爲て、思はずも突と後を振返り、遙かなる舊宅の方を望んだのである。其れと同じ思ひに誘はれてか、娘も又見るとは無く、振り返つて見ると、夜色は早くも廣い濠端の往來を包み、唯だ其れかと思ふ燈火が丁度二階らしい高さに、ぼんやりと認めらるゝばかり。床しい琴の音も最う聞ゆべき筈はなく、遠く高い空の外れから、冷たい風の響が悲し氣に燈のついた街の方へと走つて行つた。

第九

お浪はいよ〳〵歸京すべき場合となつた。寺の門外には既に命じた車が待つて居るのである。午前の空は灰色に曇つて居たけれど、秋の常として猶雨にはならぬであらう。いざ立上らうとするお浪の身の周圍には、兩親と妹と、お寺の和尙樣と、かの寺男までが、各

膝を突き合さぬばかりに取卷いて居た。

「お浪さんや、其れでは最う行かつしやるか。又近い中にのう、私も其の時を待つて居ますぞ。」と老僧はお浪に續いて座を立つた。

「此の革包は私が門まで持つて行きますべい。」と翁の面の樣な寺男は傍の旅革包を持ち掛けた。

親子三人は最う何の語もなく其の中でも母親は一心に涙を堪へて居る處から、俯向いた顏を上げる事が出來ないのである。

勝手の入口からでは無く、緣先へ揃へた下駄を穿き、洋傘と四季袋を手にして、お浪は二歩ほど先へ歩いたが老僧は何かと注意を怠らず後から、

「最うお忘れものは無からうな。」と聲を掛けた。

「はい。」と鮮明にお浪は答へたものゝ斯う云はれると猶何やら物忘れした樣な妙な心持になつて、立止るとも無く四邊を見廻したのである。

兩親とお絹は此の間に再びお浪の後を取圍んで同じく無言で佇んだが、寺男は已に旅革包を車夫に渡して此方へ立返つて來るので、お浪は再び歩みを運んで彼の大きな無花果の

樹蔭の處へ來た。

すると、何時も喧しい雀の群がパッと驚いて飛立つ羽音と共に、ポタリと熟つた無花果が二つばかり落ちた。

「お嬢さア。覺えて居さつしやるかね。乳母やの背に眠んねして居なさる時分だ、私が能く此の無花果を取つて上げましたゞ。」

と寺男は翁の面の樣な顏に一際皺を寄せて、「お嬢さア、汽車ン中で食らつしやるなら、爺やが取つて上げますべい。持つて行かしつて下さるか。」

「時間は大丈夫かな。」と老僧は又注意したが、お浪が帶の間から時計を引出して領附いた處から寺男は嬉し氣に其の太い幹を搖ると、老僧を始め親子三人は落ち轉るのを拾集めて大く熟したのばかりを選み、紙へ包んでお浪が四季袋の中へ入れた。

別れの心も此の最後の贈物に聊か慰められたらしい。お浪に續いて一同も稍足早に門の外まで進出ると、お浪は車に乘りながら一同の名を呼んで、「又遊びに來ます其れでは……左樣なら。」と華美な聲で、殊更簡單な語を殘したのである。殆ど半月を暮したので、意外にも深い別れの悲しみをば幾分なりと淺からしむる爲めに、お浪は前夜から强て停車場までもと云ふ兩親の語を退けたばかりか、今や引出される車の上からも決して未練らしく後を振返り抔は爲なかつた。然し軈て彼の緩かなる坂を上つて街の方へ曲らうと云ふ時になると、最う如何しても堪へられなくなつた。然し古く危氣な寺の門は早や眼界を遮られ、只だ樹立の上に高い本堂の屋根ばかりが聳えて居る。其れさへ直樣隱れて了ふと、此處にお浪は堪へ難い離愁の以外に、突然名狀すべからざる或る悲しみを覺えた。

お浪は何と云ふ譯もなく最早や重ねて此の寺の庭と此の寺の門を見る折は無いだらうと云ふ樣な心持がしたのである。列車の中に這入つて一聲の汽笛に脅された時には、その胸の痛さは一層深かつたが、其の身體は轟然たる車輪の響と共に、昔の夢から一刻一刻、彼の絃歌の休みなき遊廓に向つて近附き行くのであつた。

お浪は膝の上に四季袋を開いて、此れも懷かしい昔の通りの色光澤に熟した無果花を眺め、戀人に接吻する如く暫し唇を押付けながら、又頻りに物思ひに沈んだ。先第一には、如何かして母親をば小綺麗な家に住はせたいと云ふ事である。此の春からは月々十圓餘りと云ふ、田舍の生活には或は十分過ぎる送金をして居たものゝ、さて其れ丈けでは、到底一度潰れた家一軒を新に興す事の出來やう筈が無い。寧そ年季を增して又借金を爲ようか

と思つて見たが、一日も早く廢業する樣にと、一方では其の零落の痛みながら、一方では又此の樣な無理な注文をする母親の語を思ひ出す。

お浪も遂には心が亂れて來て、只だ譯もなく兩親を安樂にさせ度いとの激しい感情に驅られるばかり、濱松から靜岡の停車場へと着く頃から、乘客も二人三人と次第に殖えて來て、客車の中は最早や物思ふべき靜さを保たぬ樣になつた。

空は依然として灰色に曇つて居る。けれども箱根の山を過ぎた時には、繪よりも美しい溪間の夕陽が、旅客の眼を驚かしながら、夜も全く暮果てゝ了ふと、何時の程か又一點の星さへ見え無くなつた。お浪は知らず〳〵疲れた睡眠の中に、幾度か朦朧たる夢を見ようとしては、過ぎ行く驛の名を呼ぶ驛夫の聲に妨げられ、遂に横濱停車場の明い灯に全く眼を覺して了つた。氣が付いて見ると、車窓の硝子はスッカリ濡れて居て、プラットホームを行く人々は皆雨具を持て居る。車の中でも夜寒の氣候の肌を襲ふ處から、お浪は風邪を引くまいと堅く襟を合せて最う如何に眠くも眼を閉ぐまいと決心した。いよ〳〵新橋と呼ぶ聲を聞いて、自然と急しさうにプラットホームへ下り、赤帽を呼ばうと群集の中に佇んだが、すると後から押されでも爲た樣に、ふと肩先へ突當つた者がある。

「どうも、御免なさいまし。」と小包を抱へた老婆が輕く小腰を屈めて其の儘行過ぎ樣とする。お浪は何の氣も無く見返ると、電燈の光で確かに見間違ではない——

「あッ老婢ぢや無いか知ら。」と思はず高い聲を出すと、已に二歩ばかりも行過ぎた女は、此の聲を聞き得たのか、不審さうに立止つて後を振向いた。

「老婢だ……お澤さん。」とお浪は最う旅革包を打捨てたなり馳寄つて、

「老婢、眞實に久振り……。」

「まア！誰樣かと思つたら……御新造樣。」

其の儘互に顏を見合して、此の意外なる邂逅に呆れるばかりであつたが、赤帽が革包を持つて立つて居るのに氣が附いて、お浪は先づ改札口の外まで出た。

「老婢。迷惑かも知れないけれども、丁度私もまだ御飯前だし、後生だから其の邊まで一緒に來てお呉れな。」

「はい、お伴致します。好鹽梅に、御新造樣、雨も止んだ樣で御在ますよ。」

「さうだね。だけれども道が惡いから。」とお浪は車を命じて近くの料理屋へ老婢を伴つたが、靜な二階の一室に座を占めると最う身體を顫はす樣に膝を進めて、

「老婢。私や此れで漸と安心したよ。郷里で手紙を貰つたなり、今日が今日まで、其の時のお禮を云ふ事も出來ないんだもの。眞實に老婢、何にから聞いて可いか最う解りや爲ない・・・・。坊やはあれから如何して居るか委しく話してお呉れよ。」

「御新造樣。老婢も是非一度お目に掛り度いと思つて居たんで御在ます。御新造さん・・・・。」と此方も身體を前へ差出たが、何か云淀んでお浪の顔を見た。

「あの手紙に書てあつた。姉松さんとか云ふ家に、今まで丈夫で居るのだらうね。」

「はい。御丈夫で・・・・。」と答へたが、老婢は如何にも切なさゝうに垂頭いて、再び語を途切らした。

「老婢。委しく話してお呉れよ。此頃逢つた事があるかい。」

「いえ、最う久しくお尋ね致しませんですよ。彼方樣へお行でになつた時分はね、時々お尋ね爲ましたけれど、御兩親とも好い方でね、大變大事に爲すつてお居でゞすから、老婢も安心しましたし、其れに餘り繁々お尋ねするのも却て可くないかと思ひましてね、其後は又自分の事にも種々と迫はれるもんで、最う然うですね一二年もお尋ねしませんでしたが、つい此の夏の事で御在ますよ・・・・。」

「逢つたのかい。嘸ぞ大くなつたらうねえ。」

「其れは、最う、今年で五歳にお成んなさるんですから・・・・？。」

「可愛いだらうねえ。老婢。」とお浪は覺えず聲を喘して、「一遍で可いから、鳥渡でも逢つて見たいけれど、其樣事を爲ちやア惡いだらうねえ。」

老婢は何とも答へず、チッとお浪の顔を目戍つたが、突然堪へ切れずに涕を啜つた。

「如何したんだよ。」とお浪は驚いて、同じく老婢を見詰めたが、忽ち顔色を變へて、「老婢。病氣か・・・・其れとも如何か爲たのかい。」

「御新造樣、最う老婢は、何と申して好いか・・・・眞實に濟まない事を爲たんで御在ます。」

「ど、どう爲たんだよ。」

とお浪も聲を亂して詰め寄つたが、此時女中が漸く誂へた料理を運んで來たので、兩人とも慌忙てゝ何氣無い體を粧つた。

然し女中を遠けて了ふと、お浪は苦しい程に空腹なるにも關らず、最う食事を爲る所では無い。老婢も今は心を決めたと云ふ樣に、箸を取つた手を膝の上に載せたまゝ低く首を垂れ、

「御新造様、お嬢様はね、別に御病氣と云ふのぢや御在ませぬ。お身體だけはまだ御無事なんですけれど……今になつて此様な事をお話しするのは、眞實に御新造さん。老婢の身には何程辛い事か知れませんですよ。先様では、去年の春とかに、今迄は最う出來ないものと諦めてお居でなすつた奥様にふいと男のお兒さんがお出來なすつたんでね、其れから云ふものは、那程までに可愛がつて被居つたお種様を、段々邪慳になすつて時折にはね隨分非道い事を爲さるんだつてね。近所では種々評判を爲て居るんで御在ますよ。」

お浪は眼を睜つた儘、最う何にも云へないのである。老婢は依然として身體を小く屈めたなりで、「然う云う譯になつたもんですから、旦那様がね、久振で老婢がお尋ねした時にわざわざ此方へとお呼びなさいましてね、何しろ家内の氣に入らないので爲様が爲いから、寧そ、幾何か養育料を付けて元々へ送り戻し度いと恁う仰有るんですよ。老婢も實に途法に暮れましてね、小石川の足袋屋へ相談に行つたり、色々氣を揉みましたけれど、みんな自分の暮しにさへ追はれてる身分だものですから、今だに何とも話しが纏らないんで御在ます。」

俯向いて聞入つたお浪は最う涙さへ出ず、造つた様に身體を堅くして居ると、老婢は窃と顔を上げて、

「何しろ斯うなつたからには、一應御新造さんにお知らせ爲たいと思ひましたけれど、扨て手紙を差上げ度いにもお處が分らないんで御在ます。あの後二度程お國の方へ手紙を差出しましたら、皆な張紙が附いて返つて來ましたのでね、まア如何なすつたのかと、一時は老婢も眞實に心配して居りましたんですが……見違へる様な奥様にお成り遊ばしたんで先程は全く喫驚したんで御在ますよ。御新造さん只今は何方に被居るんです。」

「私……。」と云つたが、忽ち行詰つて了つた。お浪は先年始めて深川へ身を沈めた時幾度となく老婢の許へ居所を知らしてやらうと思つたけれど、流石に恥べき身の成行を思返して、われにもあらずこの年月を打過して居たのである。處が思掛ない今日の邂逅に、一時は全く自分の身を忘れて居たが、扨て何と老婢に答へやうか。老婢は進んで、

「矢張、東京に被居るんですか。」

「あゝ。深川の方なんだけれども、今の處は少しゴタ〳〵して居て……。」と苦しさうに眼を他の方へ外したが、先づ其場逃れの様に、

「老婢。お前は今何處に居るんだい。」

「芝の愛宕下で御在ます。一昨年忰が兵隊から歸つて參りましたんでね、其に只今では嫁と孫までが出來ましたんで、隨分苦しいながら、然しまア、仕合な事には老婆を親切にして呉れますので、何うか彼うか身體だけは、樂になりまして御座います。」

「老婢それア何よりだよ。働きのある息子さんを持つてる親達はね……。」と云つたが、お浪は自分ながら分らぬ淋しい心持がして、ふと語を切らすと、何處かで時計がチーンと鳴つた。

「おや、何時だらう。」と驚ろいた樣に懷中時計を見たが、

「老婢、最う十時半だよ。大變晩くなつて……何か用があつたのぢや無いかい。」

「いゝえ。其樣御心配を……今日は朝から神奈川在の嫁の里へ參りましたんですから、最う何にも用は御在ませんのです。」と老婢は別に急ぐ樣子も見せなかつたが少し調子を改めて、「御新造さん。お嬢樣の方は然う云ふ譯なんで御在ますから如何したもんで御在ませうね。幾何か養育料は附ける云ふお話なんですけれど……。」

「最う其樣家へは……先から然う云はなくたッて、遣つて置き度くも置けないから、一日だつて早く引取つて了ふより爲樣が無いぢや無いか。ねえ、老婢。」

「然うで御在ます。御新造さんが然う仰有れば老婢はすぐ此れからでも話しに參ります。」と力を得たと云ふ樣に、お浪の顏を眺めたが、「御新造さん。然し、お嬢さんの事は今のお宅へ知れでも爲ましたら、お惡くは御在ませんか。」

「其れは……。」と又答へに窮したが、然し母親の愛情は最早や何等の障害をも顧みる暇なからしめた。

「可いよ、老婢。縱へ私の手元へ置く事は出來なくつてもね、私が居るからは、眞身の親だもの。如何樣事を爲たつて其れ丈けの世話は爲る心算だから、老婢、其樣事は心配しないでお呉れよ。彼の時見た樣にね、途法に暮れ了ふなんて、廿歲以前なら知らない事、今では縱へ此樣賤しい……。」と思はず云掛けてハット顏を赧めた。

老婢は耳敏く聞咎めて、鋭くお浪の顏を見たけれど、輕々しく問返されぬのである。お浪は猶顏を赧めながら、然し落着いた調子を造つて、

「老婢。眞實に心配しないでお呉れよ。最う今までの樣に老婢にばかり迷惑は掛けないから……。」

「いゝえ。御新造さんの事なら、老婢は最う何樣事でも、其樣迷惑なんぞと云ふ事が御在

ますものか。何だか因縁とでも云ふのでせうか、お別れ申しましてからも御新造様の事はね、何となく氣になつてお忘れ申した事が無いんで御在ますよ。」と次第に語調を沈ませたが、自分ながら氣がついて力ある聲を作り、「其れでは御新造様。明日話しを爲て參りませうか。」

「あゝ。御苦勞だけれど。」

「お話しの模様は……直に老婢がお知らせに上りませうか。お宅様の方へお差障りでも御在ますなら、又手紙でも……。」と再びお浪の顔色を眺めた。

「さうだね……其れぢや、何しろ深川までは大變だから手紙で知らしてお呉れな。さうしたら、其の時の都合で、迎ひの人を賴むなり、何うとも私の方で思案を爲様から。」

「左様ですか。」と老婢は頷附いて、「其れでは御新造さん。深川は何方で御在ますか、お處を……。」

お浪は最う何としても隠されぬ場合となつた。寧ろ青白い顔色になつたが、思切つたと云ふ様に稍聲を顫し、

「深川、洲崎……。」

「へえ？　洲崎……？」

「老婢。恥しいものに成つ了つたんだよ。」とお浪は叫んだ儘、膝の上に置いた絹ハンケチで暫くは其の顔を蔽ひ隠した。

第十

お浪は再び遊廓に歸つた。一時の丸髷を解捨てゝ華麗な姿に立戻ると、身のまはりに湧起つたいろ〳〵な事情の爲に旅のつかれを休める暇もない。久振りで我が兒お種の手を取つて眼を泣腫す。新造のお松には事情を打明け、種々相談した上で、せめては時折顔を見る事の出來る様にと、嘗ては母親に宿を取らした入船町のお松が宿へ、一先お種を預け、月々七圓と云ふ手當をする事にした。

國元へは以前通りに毎月の生活費を仕送らねばならぬ上に、何れは何とかして、母が望みの様に一軒の家をも借りてやらねば成るまい。お浪は殆ど堪へ得ざる重荷を背負つた様な感じがしたものゝ、皆逃れる事の出來ない此の世の繫累である。

人の娘たると同時に、人の母たる此の身になつては、飽くまで、斃るゝ迄も働かねば成

らないのだ。

來月の席順には、必ず楓の名前を元々通りお職の地位に進ませねばと、お浪は新造のお松に豫言した程能く賤業を勵んだ。歸郷以前に遥つて居たお客は大抵變らずに立戻つて來たが、其の中で、かの藥種屋の小田邊はお浪が歸つて來る其の翌日の夜から、以前にも增して足繁く、殆ど毎夜登樓するのである。最早や外見を作る餘裕さへ無くなつたのか、如何にも零落した風俗になつて、他の女なぞにも顏を見られるのを厭ふ樣に、コソ〳〵と座敷へ這入るのであるが、お浪を傍へ引附けると、最う狂氣の樣に、一日も早く廢業して吳れと、かの無謀なる要求を云ひ續けるのである。然しお浪は今の場合、最う男の事情なぞを察して居る暇はない。殊にお松は、他のお客の障害にもなるから、寧そ今の中きつぱりその要求を退けるのみか、登樓をも斷る樣に愛想なく云切つて了ふ方が可いと忠告したので、お浪は餘義なく大膽な決心を爲し得た。或る雨の夜の事男が例の如く最う今夜こそは云ひ逃さじと責め詰るまゝ、最後の返事として、流石に少しく聲を顫して、

「小田邊さん、私は最う人間ぢや無いんですよ。私の身體は最う義理も人情も考へては居られないんです。薄情と云はれやうが、恩不知と云はれやうが私は何處までも鬼の樣な心

になつて居ます。小田邊さん、私やね、又借金をして年季を延ばさうかと思つてる位なんですもの。」

「何に、年季を延ばす……？」と男は忽ち顏色を土の樣にしたが、漸くに悲しい顫聲を絞つて、「其ぢや始ッから、此の俺を……楓、楓……始ッから欺してたんだな、自前にして吳れと賴んだ時、寧そ俺が身受をし樣と云つたら、楓、お、お前は何と云つた。切破つまッてから國へ相談に行くなんて、其の揚句に……今更其樣事を云出すなんて、これ、楓。此の俺はお前の爲に、今は何樣身分になつたと思つてるんだ。本店から暖簾を分けて貰つた內の店は、最う人手に渡つてる。女房は田舍へ遣つ了つた。俺が恥を曝して生きてるなア、楓、誰、誰の爲めだと思つてるんだ。」

「其れですから、私は犬です。畜生です。人樣の御恩も親切も忘れて了ふんですから……何樣報を受けやうと其りア最う未來は覺悟をして居るんです。」とお浪も今は次第に聲を亂さずには居られなかつた。

「楓……其、其れぢやア、此の期になつて、お前は此の俺を見捨てるんだな。」

「小田邊さん。全く私は申譯がありません。ですけれどもね、昨夜もあれ程、お話し爲た

様に、全く私の身體は私の儘には成らないんですから、悪い、ずるに引掛つたと思つて諦めて下さいよ。月々、阿父様や阿母様、其ればッかりぢや無い。種々と仕送りをしなければ成らない身體では……今更になつて、私が義理を思つて貴下に情を立てたら、私の身體は構ひません。阿父様や阿母様は其の日の暮しさへ出來なく成るぢや有りませんか。ねえ、小田邊さん。どうか此處の處を察して下さいよ。兩親さへ見送つて了へば、最う私の身體は、縱へ死なうが死きやうが屹度貴下のまゝに成ります。小田邊さん。全く濟みません。私は全く貴下を……心にない事も云ひました。勘忍して下さい。」

小田邊はきつと齒を喰縛つたまゝ最う何とも云へなくなつた。

「小田邊さん。お願ひです、どうか私を恩不知の畜生にして下さい。」とお浪は云放つた。次の間の襖越しには、お松が萬一を慮かつて窃と様子を窺つて居るのを知りながら思はず顫へる男の膝の上にワッと聲を上げて泣伏した。お松は喫驚して、

「華魁最うお眠みですか。鳥渡どうぞ……。」と何氣ない様に聲を掛けたので、お浪はハッと心付いて、静に顔を上げ、

「小田邊さん。御縁が無いのだと思つて諦めて下さい、私見た様なものは……縱へ御縁があつたにした處が、つまりは貴下のお爲めに成らないんですから。お願ひです、最う此様悪い土地の事は思切りなすつて、どうか、元の様に立派になつて下さい。私のお願ひです。今、直ぐに歸つて來ますから、鳥渡待つて居て下さいよ。」

お浪は静に立上つて、枕元に脱ぎ捨てた風通の袷羽織を浴衣の上に被つたが、小田邊は默然と、首を垂れた儘最う一言も云はなかつた。

「能御座んすか、お願ひですよ。」

と斜めに男の方を見返しながら、引廻した屏風の端を片寄せて出やうとしたが其の瞬間ヂロッと上目に見上た男の眼が、薄暗い中にも云ふに云はれぬ程物凄く輝いたので、覺えず聲を立てやうとした。其の時遲し、

「薄情女ッ！覺えて居ろッ！」と云ふ叫び聲と共に飛び付く男の腕に襟髪を取られて、お浪はアレッとばかり必死の聲を出した。

近所の部屋の新造も此の聲に驚いて、三四人慌忙て馳け付けた。然しお浪は結立の髪をしどろに嚴しい憤恨の拳を受けながら、幸ひ此れと云ふ怪我は爲無かつたのである。お松はお浪を次の間に避けしめて、小田邊を云ひ宥め様とすれども此れは丁度激しい蹴合に疲

れ果てた鷄のやうにグタリと暗い夜具の上に倒れた儘、只だ大きく息を吐いて居た。

「あなた。直ぐ參りますんですからね。華魁はまだ何と云つてもお若いものですから、つい氣が附かずに失禮な事をね……お煙草の火は御在ましたか知ら。」とお松は窃と枕元を覗いた後次の間へ退いたが、出入口の障子の傍に立つて居たお浪が眼で知らしたので、窃と足音を忍んで二人ともコツソリ廊下へ出た。そして裏梯子の上口までは無言で歩いて來たが、四邊を見廻してお浪は始て口を利いた。

「お松どん、私や殺されるかと思つたよ。」

と呼吸を引いてまだ眞青な顏をして居る。

「華魁何ですねえ。」とお松は態と輕い笑みを浮べたが、「あれ丈けお云ひなさりやア最う大丈夫ですよ。眞實にあんな未練らしい人も無いもんですねえ。」

お浪は只だお松の顏を眺めたが、俄に屋根を打つ强い雨の音を聞いて驚いた樣に天井を仰ぎながら、何と云ふ事もなく再び大な息を吐いた。

「今度、手出しを爲されアね、最う公然にお茶屋へ斷つて了ふから能御座んす。」とお松は何か思ひ出した樣に梯子を下り樣としたが其の時、店口でお客樣と云ふ男の聲がしたと思

ふと、女の聲で今度は楓さんのお松どウんと二聲ばかり續け樣に呼び始めた。

「おや、最う引け前なのに、何處だらう、松本のお客か知ら。」

「瀧杵ぢや無いか、お澄ちやんの聲がする樣だよ。」とお浪は鳥渡耳を澄ましたが、お松は最う廊下を表の方へと馳けて行つた。

三人一座のお客で、賑かに藝者を上げて居るのである。お浪は此の廣間へ顏を出して彼れ此れ一時間近くも坐つて居た後、軈て下座敷の名代を廻つて、再び裏梯子を上つて來ると猶も人聲のする廣間の方では幽かに、しんみりした本調子を彈き始めたのが、いよ〳〵降增る秋雨の音にとぎれ〳〵て、思はず身につまされる樣な氣になる。少し前に廓は引て了つたので、全樓は最う寂として居る。お浪は梯子を上ると同時に、何と云ふ譯もなく、あゝ濟まない罪な事を爲たと、ふいに小田邊の事を思出したが、靜に自分の部屋の前まで歩いて來たので、其儘障子の外から內の樣子を窺つて見ると、最う寢て居るのか、何の物音も聞えず、海に近い座敷だけに此處からは雨と共に、波の音も交つて聞える。

安心して、お浪は靜に次の間に這入ると、お松はまだ廣間の方へ行つて居ると見え、長火鉢には鐵瓶が下したなりで、境の襖は不思議に閉切られて居た。廊下よりも又一際能く

聞える潮の音に、お浪は肌寒いまゝ、火鉢の傍に坐らうとしたが、

「小田邊さん。お眠みなすつたの？」と呼んで見て、何の氣もなくガラリと襖を開けたのである。

長火鉢の上に鈎した電燈の光は、突と暗い座敷の方へ流れた。其の儘一歩踏入れると座敷と緣側との境なる敷居の上に身長の高い男が立つてゐるので、お浪は不審さうに危く最う一歩進まうとしたが、突然、キャッと云ひ樣氣を失つて了つた。

立つて居たのでは無い。身長の低い小田邊は境の欄間に扱帶を鈎して、何時の間にやら最う縊れて居たのである。

第十一

其れから一週間程、お浪は何と云ふ事もなく鬱々として枕に就いたが、漸くお松の勸めで先づ此の忌はしい部屋を引拂つて、明間になつて居る階下の座敷へ移る事にした。そして、何でも氣を紛らす樣にせねばならぬと云ふので二三日過ぎてからは、再び客を迎へる粧ひをしたものゝ、誰が云囃すともなく、楓と云ふのは怖しい女だ、毒婦である。と云ふ

樣な惡い噂が立始めてお客は以前の半分程も無い樣になつて了つた。

秋は暮れやうとして、殊更に雨多く、肌寒い室の中は毎日々々何時も黃昏の樣に薄暗いのである。二階とは違つて硝子戸を引いた緣の外には、高い堤防の芝生が鼻の先に立つて居るので、其の下の濁つた泉水から、盛りを過ぎた汚い秋草の繁みへ、横樣に降灑ぐ雨を見るばかり。一際寂しい晝下りに、絕えざる蟲の鳴く音に聞き入る時なぞ、お浪は殆ど堪へがたい心持になる。ふと思ひ付いた樣に客が呑殘しの酒を取つて無理遣りに飲干して見る事もあつたが、すると以前には決して覺えた事の無い、客の一人も來ぬ晩の寂しさに出逢ひでもすると、一層深い心の怖れと氣の鬱ぎを紛らす爲めに、お浪は早や如何しても熱い酒なしには居られなくなつた。お浪は幾年間、毎夜客の酒席に坐るものゝ、今迄は三杯以上を飲干す事は出來なかつたのであるが、其の後は引續く不景氣に見る〳〵中驚くほど酒量を增す樣になつた。

新造のお松は遂に見兼ねて口を出したが、するとお浪は忽ち火の樣に憤つて、此樣な始末になつたのも畢竟はお松の入智慧から起つた事だと云つた。今まで何一ッ云ひ爭ひなぞ爲た事のないお浪が此の激變した有樣に、お松は非常に驚いたものゝ、默つても居られぬ

ので、お浪が自前になり度いと自分へ相談をした以前の事から、小田邊の事なぞを細々と云ひ始める。無論何れが惡いと云ふ事は出來ないので、遂に議論は枝から枝へと岐路へ這入つて了ふ。お浪は只だ口汚くお松を云罵つて、わざと自暴酒を煽る、お松は其れだからお客が落ちたのだと新造の持前を云ふより爲樣が無い。此樣事から、お松との間は日々に面白くなくなつたが、其れのみならず、樓内の朋輩を始め、他の新造抔にも、小田邊の事件から以來は、何となく顏を見られるのが厭になつて、夕暮の風呂場にも屢行く事を躊躇つた程である。殊に久しくお職の全盛を羨まれた曉に、今では漸と中通りの地位を保つて居るのを思返すと、自分からして些細な事にも僻んだ心を起すので、全樓の諸有る物事は皆居辛く厭はしい事ばかりになる。寧そ他の樓へ鞍替でも爲樣かと思始めた。惡い事には惡い事が續いて來るものと見える。其の週間の健康診斷の際にお浪は如何した事か思掛けなく、突然入院を命ぜられた。お松は餘り無暗に酒を呑んだからだと云つたので、口惜しいやら腹立しいやら、お浪は寧そ泣きたいにも涙さへ出ぬのであつたが、然し幸ひにも、醫士の診察違ひでもあつたものか、三日程して直樣退院する事が出來たものゝ、それからはいよ〳〵自暴自棄となつた。兩親と子供に送るべき必要の金額さへ、最う其れ程に稼が

ずとも如何かならう。萬一の時には指環なり衣服なり賣拂つても、一月や二月分は大丈夫だと云ふので、お浪は少しく身體の加減の優れぬ事でもあると、直ぐ座敷を引いて了つて、聊か快しとして喜ぶ樣になつた。

此の年も已に全く冬である。枯れ殘つた秋草も何時か取除かれて了つた寂しい庭へと、お浪は或る暖い日の事、何心もなく緣先から一人庭下駄を引摺つて、池の緣を歩いたが、知らず知らず芝山を上つて、電燈の柱と石燈籠の立つて居る庭の端へ來たのである。築上げたセメントの堤防の上に佇んで見ると、宛然春の樣に長閑く晴渡つた青空の下に、廣々した東京灣は近い部分だけ干潟になつて、不規則な麁朶の集り、亂雜な棒杭などを現した黑い泥の上に、無數の白い鷗が、日の光に光澤のある翼を翻へしながら、恰も花の散るごとく餌をあさつて居る。左の方には遠く房總の山脈が、棚曳く霞の樣に藍色に横はり、右の方には近く埋地の上に建てられた小い人家の屋根を越して、深川の沿岸から芝浦あたりまで數へ盡されぬ製造所の烟突が各眞黑な煤烟を空に漂はして居る。大い屋根小い屋根が、遂には雲か烟の樣に見え無く成つて居る邊は、最う品川の宿であらう。穩な光線はギラ〳〵と輝いて、其れから先へは最う眼が達かず、青空が唯だ茫々と蔽冠さつて居るばか

りであつた。然し猶判別する事の出來る遠い水平線の上には、豆程に小い碇泊中の軍艦や、御臺場や、能く眼を定めて居ると、小形の蒸汽船が烟を立てながら蟲の這ふ樣に動いて行くのも見えぬでは無い。

お浪は何時か憮然した目容になつて芝生の上に腰を下したが、忽ち思出したのは、此の青樓に身を沈めた當時、まだ里馴れぬ頃の事である。晴朗な此海と空とを麗しい日光の中に眺めて居ると、何とは無く遠い故郷の山川までが見透れる樣な氣がする處から、何時も窃と部屋を拔出しては、此庭の端へ來て、廣漠たる眺望に對して獨り涙を流した。其の頃には若い自分の姿に迷つて未來の約束を迫つた若い美しいお客も幾人あつたらうか。然し自分は如何しても、能く廓の噂になる樣な華美な戀の味を知る事が出來なかつたのだ。女の樣な美しい優男に堅く手を取られた時などには、折々娘のやうに胸を波立せる事もあつたけれど、自分は一度、已に母親とも呼ばれた事のある悲しい過去の出來事、或は一家に對する重い責任なぞを思返すと、若い血を溫める一時の情愛は忽ち氷の如く冷されて了ふのであつた。あゝ若い美しい人達の云つた事、其れは大方賴りには出來ぬ、戀の繰言であつたらうけれど、然し其の云ふまゝに成つて居たら、今頃自分は如何なる月日を送つて居る事であらう。目の前に廣がつて居る海の景色は、其の頃とは少しも變らず、いよ／＼限りなき平和を示して居るでは無いか。お浪は長く首を差伸して、今や遠くへと飛び行く鷗の群を望んだが、突然後の樓の方から自分の名を呼ぶお松の聲に、ハツト夢から覺めた樣に立上つたのである。

「お客樣ですよ。」

「分つてるよ。」とお浪は譯もなく腹立しくなつて、再び海の方へ顏を向けたが、然し漸く思諦めた樣に、しほ／＼と芝生を下りた。

第十二

座敷へ歸つて見ると、一昨夜始めて初會馴染を付けた上郷と云ふ米屋町のお客である。最う五十を越して居るのか、綺麗に分けた頭髮は、殆ど眞白になつて居たが、然し、その肥えた頑丈な身體には、青年も及ばぬらしい元氣を隱して居るのであらう、眼の鋭しい唇の厚い、四角な大い顏の色は宛然染めた樣に赧んで居た。銚子を載せた食卓を前に、豪然と大胡坐を搔き、二ツの指環を輝かした手に酒杯を上げて藝者に盈々と酌を爲せて居たが

お浪が輕く挨拶をしながら坐るのを見遣つて、
「どうだな。一杯飲めるかな。どうも華魁と云ふ奴は、何處へ行つても餘り酒の相手には成らねえもんだが……はゝは、ゝゝ。」
「いゝえ、戴きます。お相手なら。」と、お浪は他の方を見た儘、極めて冷かに答へた。
「眞實に華魁は、ちッとの間にお强くなりましたねえ。最う私なんざ到底敵ひませんよ。」
と茶屋の女中は新しい銚子を取上げた。
「さうか、そいつア豪氣だ。お常が驚く位なら、お手並は大したものらしいな。」
差出す酒杯をお浪は默つて受取り、苦味さうに顏を顰めたけれど、一息に飲干して返した。
「や見事々々。さう綺麗に受けて呉れると、何より心持が可い。此の華魁は何だな、此う見えても中々話せさうだ、最うざつくばらんに遣て貰はうぢや無いか。」
「ほゝほ。猫を冠つてると仰有るんですか。」とお浪は鳥渡男の顏を見ながら淋し氣に微笑んだ。
「旦那、最う一杯お重ねなさいよ。」と今度は藝者が銚子を取上げたので、お常は思出した

樣に、
「お誂ひは如何し了つたんだらう。お松どんが見に行つて呉れたのか知ら。」と座を立つた。
「さ、最一杯受けて貰はうぢや無いか。些たア微醉になつて情人のお痴言でも聞きてえもんだな。睨合ひでがぶ〳〵飲つてたンぢや可笑しく無えから。」
「旦那、何か伺ひませうか、陽氣に……。」
「陽氣に騷ぐんかね。然しそいつも餘り下らないな。晝日中、頓馬な音聲を出した處で、些と太陽樣にも氣まりが惡いや。」
「其れぢやア、矢張華魁と仲好く召上れよ。罪が無くッて綺麗で、一番能御座んすよ。」
「はゝゝゝ。何が綺麗なんだ。然し眞猫の差向ひとは、乃公にしちやア先づ大出來だ。其れぢや、華魁かね……。」と又酒杯を出したが、「華魁ぢや水臭いな。何と云つたッけ、最うお馴染になつてながら、つい胴忘れを爲やがる。」
「義理にだつて思出さなけれア不可せんよ。ねえ、華魁。」
「あゝ然う〳〵……。」
「思出したんですか。」

「さうとも……忘れたんぢや無かつた。な、華魁。此前は其様事アまだ聞かずに歸つたんだッけな。」

「何ですよ。落語ぢや有るまいし。おほゝゝほ。」と藝者は鳥渡お浪の方を見返しながら、

「楓さんと仰有るんですよ。能御座んすか。方々餘り浮氣なさるもんだから。今度お忘れなさると、華魁の代りに私が承知しませんから。」

「はゝゝは、頭禿げても浮氣は止まぬか。然し乃公の身にやア其處が生命なんだぜ。此の商賣をしてえて、老込んだ日にや最うお了ひだ。」と男は下に置いた酒杯を勢よくグッと干したが、

「あ、今度忘れると大變なんだッけ。能く覺えて置かう。楓さんだな、楓さん……。」

繰返して見たが、ふと何か思出した様に、お浪の顔を眺めて、「楓さん……此の華魁か、何時だつたか評判を聞いたのは……。」

「え、何です。」とお浪は思はず男の顔を見詰めた。

「何さ、新聞の事だ。其れぢや何うして、話せる譯だ。」

流石の藝者も口を出し兼ねて、お浪の顔を見るとお浪は無言で稍其の顔色までを變へて

居た。

「はゝゝゝ。悄氣ちまつちや困るな。惡い事を云つた。然し乃公にや然う云ふ手合でなくッちや感心しねえ。商賣となれア、乃公達だつて同じ事だ。其處まで遣り通さなくッちや、ね。泥水を呑んだ甲斐が無え。人形に赤い衣服を着せた様な綺麗なばかりぢやア、此れアお話しに成らねえから……はゝゝゝ。然う分ッちまへば、最う可いやな、改めて悠々と飲んで見やうぢや無いか。」

「お誂ひ。」と廊下の方で男の聲がした。

お浪は窃と溜息を吐いたが、斯う云はれて見ると最う客の酒杯を辭退する事は出來なくなる。赧んだ客の顔は已に燃るが如く、お常や藝者も共々に、ぽつと頰を赤くする様になつた。後からお松が窃と袖を引いて折々注意して居たにも關らず、今はお浪も最う苦しい程に酔過して了つたが、幸ひに食卓の上の肴も殘少く、何時か知ら迫つて來る夕暮と共に、一座が笑談の種も盡きて了つた處から、座敷は漸く引ける事になつた。

「旦那、お目が覺める時分に、又參りますよ。」

「華魁どうも、お喧しう御在ました。」とお常も藝者と一緒に、引廻した屏風の外から挨拶

して廊下へと出て行つた。

「馬鹿に暗くなつたぢや無えか。何時だらう。」と男は夜具から半身を起して卷莨へ火を點ける。

「まだ電氣が來ないから五時頃でせうよ。」とお浪は男の身體へ凭れる樣に膝を崩して、夜具の上に坐つて居たが、枕元にある水差の水を一思ひにコップへあけて、

「貴下飲んで了ひますよ。あゝ頭が痛い。」

「先づ半日飲んだからな。然し昨日今日のお客に此れだけ相手になつて呉れるたァ思はなかつた。其の手で到頭死ぬ程惚れさしたんだな。はゝゝは。」

「貴下までが眞實に然う思つてるんですか。」と少しく變つた聲音で、お浪はコップを下に置くと共に、ヂッと男の顏を見詰めたが、激しい醉の所爲でもあるか、其の瞳子は氣味惡く動かず、其の顏色も今は稍青味を帶びて居た。

「怖しい顏を爲るぢや無えか。眞實に然う思つてるなら如何しやうと云ふんだね。」

「其れぢや、貴下も矢張私を毒婦だとお云ひなさるんですね。」

「何、毒婦だ。はゝゝは、まだ何とも云は無え先に自分から名乘を上げて居りやあァ、先づ其れが一番確かと云ふのかな。」

「さうですね。」とお浪は突と顏を外向けた。

「今度は妙にすますんだな。」と男は乘出して覗き込んだが、「泣いてるのか。何う爲たんだ。何か口惜しいのか。」

「分つてるぢや有りませんか。」と最う堪へ切れずに高く涙を啜つた。

「乃公にや薩張分ら無え。何か氣に障つた事があるなら、聞かうぢや無えか。」

「いゝえ、其れにや及ばないんですよ。別に貴下の仰有る事が氣に障るなんて、其樣事ぢや無いんです。」

「さうか。然し斯うして居りやァ滿更他人でも無からう。何なら聞手にならうから口惜しい事ァ悉皆云つて了ふが可いぜ、ラムネぢや無えが、後が爽然する。」

お浪は再び男の顏を見て居たが、「貴下、此後とも來て下さるお積りなんですか。」

「どうも種々な事になるんだな。餘り話が飛んで了ふんで、返事をするのも中々氣が揉める事ッた。」と靜に卷莨を灰吹へ捨てゝ、「先づ何と云はうかね。來ると云ふお客にやァ來た例が無えと云ふから……。」

「貴下も、屹度お逃げなさる方でせうね。どうせ私見た様な……。」
「又惡く感ぐるんだな。はゝゝゝ。どうも、お前の酒は好く無え様だ。」
「あら、醉つて然う云ふのぢや有りませんよ。全く彼様緣起の惡い事があつてからね、大抵のお客様は皆な私の事を何の彼のと好くは思はないもんで、今ぢや、何にも知らないお初會は別の事にして、眞實に來て下さる方は一人も無い位なんですからね。」
「何だと思つたら、彼の新聞の一件か。膽玉の小い世間の奴等は大に然うかも知れ無え。はゝはゝゝゝ。」
「ですからさ。私は考へると實に口惜しう御座んすよ。」
「始めて話が分つた。其んなら早く然う云へば可いぢや無えか。然し、白髮頭になつちやア、華魁、屹度來るよ、と二本棒もきめられ無えし、何しろ然う〳〵は見ッとも無くつて、土手は寒かろも難義だからな。乃公の流義は氣前さへ合やア、最う此様處へ置きやア爲無え。」
「え。」とお浪は覺えず眼を輝した。
「今が今でも引上げ了ふんだ。」

お浪は最う何とも云はず、客の顏を眺めた儘、軈て窃と溜息を漏した。

第十三

正月の七草も早や昨日になつた。門松の取除かれた所爲でもあるか、何時もよりは稍、廣氣に思はれた靜な横町には、既に遲走せなる年賀の人通も絶えて居たけれど、猶晴着した女子供は車の通らぬ靜さを喜んで彼方此方と頻に追羽子の音を響して居る。此れは築地一丁目の河岸から斜めに這入る、云はゞ路地の様な道なので、遙かに望まるゝ突當りの河岸を隔てゝ、向ふの高い煉瓦造りの屋根の上には、最う正月の寒い空の端れが、一帶に蒼白く黄昏れてゐると、河から吹込む濕氣ある風に連れて、居留地の寺院から打出す急しい鐘の響が、耳元近く聞える。愛らしい追羽子の遊手は一同怨めし氣に暮行く空を見上げたが、この羽子打つ音の止むと共に横町は今更らしく寂となつた。最う點燈夫が急し氣に馳けて來て、軒並にと嬾て、河岸へ出る小締りした待合の摺硝子へも燈を入れて行くと、「御待合もみぢ」とした文字が鮮明に讀まれる様になつた。其の時綺麗な千本格子がガラリと明いて、新しい法被を着た車夫が、外に置いた車の上の塵を急し氣に拂ふ間も無く、立出

たのは、丸髷に結つた美しい女と其の手に引かれた可愛らしい女の兒とであつた。

身長高く肉付の可い女は年頃二十三四、此家の女將であらう、不斷着らしい節絲の小袖にお召の前掛を締め、黑縮緬の五ッ紋を被つて居る。眼の大い口の小い圓顏は明かに其の二十歲以前の愛嬌を忍ばせながら、然し、免れられぬ世の憂事が、痛ましくも早や何處とは無しに其の顏立を鋭しくさせて居た。

「種ちやん。姉さんの云ふ事は、能く分つたんでせうねえ。」と念を押す樣に女の兒の顏を見下した。

女の兒は、其の妹であつたのか。全く驚かるゝほども好く似通つた顏立をして居る。頭髮を冠切にした儘なので、漸と六ッか七ッ位であらう。紫縮緬の變裏を付けた秋田八丈の綿入に、丸龍の織模樣ある緋博多の帶を貝の口に結び、紫色の絹天鵞絨の肩掛で、如何にも暖かさうに帶も隱れる程半身を包ませて居たが、何とは無く瘦せて淋しく見える後姿は、稍身長の高い上に肉付の薄い所爲でもあらうか。殊に其の顏色さへ黃昏の光に光澤なく靑く見えるのである。毛絲の手袋を穿めた手に、猶引かれた女の手を放さず、愛らしい眼で見上げながら、何か云出さうとして、自分から慌忙る如く、

「あの姉……姉さん。」とさも云憎くさうに云直した。

「姉さんですよ。」と女は稍鋭く云つたが、直ぐ調子を優しくして、「姉さんの都合さへ出來れば、直ぐにもお迎ひに行くんだからね、最う少時の間溫順しく爲て待つて居るんですよ。可いかい、能く分つたらうねえ。」

頷付いて、女の兒は漸く手を放したので、車夫は身を屈めながら、「さア、お嬢ちやん。」と優しく抱いて車へ載せた。

「姉さん明日ッから又學校が始るんだから、休まないで行くからね、眞實にお迎ひに來て頂戴よ。」

「眞實だとも。」と何處か潤み聲になつたが、河岸から吹いて來る風に、

「あゝ寒い。種ちやん。風邪を引いちや不可いよ。此れから永代橋を渡つて行くんだから……若衆さん眞實に氣を付けて遣つて下さいよ。」

「深川は生憎く河筋で……。」と車夫は梶棒を上げながら、「夜になりません中に、大急ぎで參ります。」

「種ちやん、皆なにも宜敷く云つてお呉れよ。お菓子を持つたかい。」

「此處に。」とお種は膝掛の下から手に持つた紙包を見せた。

「あゝ、寒いよ。途中で手なんぞ出すと風邪を引きますよ。若衆さん、其れぢやお賴まをしますよ。」

車は直ぐ河岸へ曲つて見えなく成つて了ふ。女は茫然見送つた儘、深い溜息を漏したが、又寒い河風が吹いて來るのに驚いて、漸く内へ這入つた。

家の中は戸外よりも早く、最う全く夜である。帳場の長火鉢の傍には何時か洋燈に火が點いて居て、寂とした奥の方では、女中の閉る雨戸の音がする。お種と一緒に早いながら夕飯を濟した其の膳は、まだ其の儘取片附けずにあつた。女は直樣火鉢へ凭れて火を掻立てた後見るともなく柱時計を仰いだが、又俯向いて、

「今夜にでも旦那が入來でなすつたら、是非にもお賴みしやう、お國の方も何れ何とか爲なくッちや成ら無いんだし……。」と獨言の樣に咳いて、懶氣に長煙管を取上げた。

去年十一月の半頃、お浪は已に自前であつた處から遂に廢業して、相場師の上鄕利兵衞と云ふ者に身を寄せたのである。無論一身上の事から國元の事情までを打明け、廢業後の生活に付いては、堅い契約をした上での事なので、男は何處か好みの處へ圍つて遣らうと云つたが、お浪は猶萬一の事を慮つて、何か片商賣をしたいと申出した處から、其なら是非にも待合が面白いと云ふ男の所望である。

お浪の心では煙草屋か荒物屋の樣な極く手堅い質素なものを望んで居たのであるが、其れは遂に男の賛成を得なかつた。

利兵衞は如何云ふ周旋からであつたか、借金の爲めに苦しみきつて居る此の小待合を見つけて早速其の後を引受ける事にしたので、お浪は到頭思掛けない女將になつたのである。殆ど勝手が分らぬながら、然し廓に居た身には、此れも同じ客商賣であると云ふので、先何うか此うか、其の決心を爲し得る樣になつたが、此に非常なる幸福は、以前の女將に使はれて居た老練な女中のお兼が居殘つて居て、何かと注意して呉れる事である。

楓と云つた昔を忍ぶ心からと、利兵衞が思付で家名をもみぢと改め、相應の弘めをしたが、丁度年末の月にも關らず、從前からの客のみでは無く、新しい名前だけに又其れだけの景氣好く、お浪は實に意外なる結果を目擊して、自然と斯る營業に對する案外な興味と熱心とを覺える事が出來た。

保護者なる利兵衞の手からは、月々の家賃營業税抔、必要なる費用を支出して呉れるの

で、營業の上り高は、皆お浪が所得である。お浪は此等の事から、我兒のお種を妹にして自分の傍へ呼寄せ、猶其の上にも故郷の兩親や妹お絹をも上京させて、早くも一家團欒の幸福を味ひ度いと云ふ望みを起した。

「おかみさん。」と襖を明けながら呼んだ女中の聲に、お浪は我を忘れた物思ひから喫驚して顔を起した。

「おかみさん。お座敷の活花は最う不可くなッ了ひましたよ。椿ッてものは割に保たないもんですねえ。」と火鉢の向うへ坐らうとしたが、其の儘になつて居た膳を見て、「あら、まだ片附け無かつたんだよ。」

「勝手へ出しとけば可いよ。」と傍の膳を押出した。

女中のお兼は再び火鉢の傍へ座を占め、炭取から炭をついで、「今夜は隨分寒む御座んすねえ其様に風も無いんだけれど。」

「最う寒だからね。」と急に首を縮めたが、「寒い所爲か、今夜は靜からしいね。」

「さうですね。けれどもお神さん。今年こそは眞實にお蔭様で春らしい心持が爲ましたよ。お神さんは御存じが無いけれど、私が此處へ來てから、最う丁度四年になりますがねえ、

先の御主人の時分には……尤も一體に不景氣だつたかも知れませんが、其れァ眞實に、可厭になつ了ふ位でしたよ。其れがお神さん。全くお神さんの御運が強いんですねえ。元日から七草まで、松の内はあの通り、毎晩お座敷が足りない位なんですもの。旦那だつて、最う面白半分の御商賣ぢや有りますまいよ。ねえ、おかみさん。ほゝほゝゝほ。」

「眞實にねえ、此の分で繁昌して呉ると、私も何れ程安心するか知れ無いんだよ。何しろ、旦那の好奇心から、不意と此様商賣を始めたんだから、萬が一失敗つた處で別に如何のかうのと云はれる事は無いお約束なんだけれど、然しね斯うして遣り掛けたものなら、何處までも精を出して、先ァ將來は私も旦那には餘り御厄介を掛けないでもね、如何かして自分だけの事は遣つて行ける様になり足いと、さう思つてるのさ。だからね、其れには、手馴れたお前が、何よりも私の頼りなんだから、まァ此先もね、精々氣を附けて働いて下さいよ。」

「あらお神さん。其様に仰有られると、私は最う困つて了ひますよ。以前のお神さんなぞとは違つて、眞實に御苦勞なすつた方だけに、何から何まで行屆いて被居るんだもの。同じ奉公する身になつても、何程氣心が違ふか知れや爲ません。其れですから、つい餘計な

事までも知らずに出しやばッてね、眞實にお神さん。賴りだの何のと仰有られると最う却つて冷汗が出ますよ。」

「全くお世辭ぢや無いよ。其ア私も長らく彼樣稼業を爲て居たんだから、滿更分らない事も無いけども、又此の商賣は、其の道々に呼吸があるからね。」

「其れア先ア然うで御座んすねえ。私なぞは、根が無調法者ですから、何年居ましても分りや爲ませんけども、然し隨分方々へ奉公しましたから、自然とづうづうしく成つちまつたんですねえ。此頃では、先ア何うか斯うか、お客樣の氣が呑込める樣になつたかと思ふんですよ。」

「何處かお茶屋にでも居たのかい。」

「へえ、暫く公園の一直に居りましたんですよ。幼少時から、母が違つてるもんで家が可厭さに、隨分つまらない所へも奉公に出たんですが、其の後は烏渡田舍へも參りましたしね、一直さんを止しましてからは、世話をするものが有りましてね、矢張公園で銘酒屋稼業を始めて見たんですが、色々不仕合が續いたもんで、其れからは最う矢張奉公する方が氣樂だと思つて了つたんですよ。」

「其れぢや、お前こそ眞實の苦勞人だねえ。」

「何が苦勞人ですか……浮浪人の方ですよ。ほゝほゝほ。」と高聲に笑つた。

第十四

翌日の朝、お浪は何時もの樣に、お兼よりも先に起きて、寢衣に、かひがひしく襷を掛け、手拭を姉樣冠りにして、先づ座敷の掃除に取掛る。

お兼は小い鐵製の竈へ火を入れた後、緣側から其の邊へ雜巾掛けを爲るのであるが、お浪は此れさへも若し其の細い手の汚れるのを厭はぬならば、自分自身働くだらうと云つた。然し、餘り其の美しい姿を損ふまでにして、遂には且那からの寵愛をそぐ樣ではと、止む無く水仕業だけはお兼にまかした。

お兼が軈て表の千本格子を拭き始める頃には、帳場の長火鉢を鏡の樣に磨き立てゝ了つて、狹い庭から格子外の往來まで、綺麗に草箒の目を附けるのである。横町を通り過ぎる人達は一人として お浪が姿の美しさと其のかひ〳〵しい働振りとに、驚嘆の眼を注いで行かぬものは無い。お浪は朝の寒い風に曝されながらも其の美しい生際を汗ばむ程にして、

漸と火鉢の傍で、煙草を一服しやうとすると、突然車の音が格子の外に停つたので、喫驚した樣に中腰になつたが、同時に格子を開けて這入つたのは、大きな二重廻の中から赧みきつた顏を出した利兵衞である。

「貴下お寒むかつたでせう。」とお浪は慌忙て襷を取りながら、馳けて出て、「昨夜も、お入でになるかと思つてたんですが、餘り御寒う御座んしたからね。」

「相變らず精出して働いてるんだな。大分慾が出て來たと見えるぜ。はゝゝは。」と利兵衞は二重廻を脫捨てゝ長火鉢の向うへ胡坐を搔いた。

「此樣風を爲て……まだ御飯も頂かないんですよ。」とお浪は笑顏を造りながら、二重廻を鴨居へ掛けて、「お兼、被入つたんだよ。何をして居るんだね。」

お兼は勝手へ出て朝飯の膳を拵えて居たのである。お浪は室の隅に置いた鏡臺を引寄せて、急いで髮を撫付け樣とするのを、利兵衞は橫から覗く樣にして、

「お浪、其の儘にしてるが可んだ。襷掛けで働いてる姿は又一層だ。鳥渡大和屋とでも云ひたかつたぜ。」

「いやですよ。又朝つぱらから冷笑して……。」

「全くだぜ。容色が好くつて、働きもので、親切もので……斯う三拍子揃つてゐるんだから。眞實に察しるが可いや。此の親爺だつて熱せずにや居られめへぢや無えか。はゝゝは。」

「最う、貴下は好きな事を云つて、戲ふんだよ、眞實に……。」とお浪は態とらしく顏を赧めながら、振向いて利兵衞を睨んだ。

「こいつは堪らねえ、今度こそ成田屋だ。はゝゝは。」と其の大い腹から搖り出す樣に笑つて、再び餘念なくお浪の橫顏を見入つたが、「お浪、丸髷も惡いッてんぢや無えが、矢張、銀杏返か何かの方が、改まらねえで可さゝうだな。餘りきまッ了つちや可笑しく無えよ。」

「さうですね。」とお浪は最う髮を了つて、水白粉の壜を取りながら再び向直つて、「ですけれどこの頃見た樣に丸髷ばかりに結附けてしまつたら最う外のだと、何だか人から馬鹿にされや爲まいかと妙な氣がするんですよ。其れに、貴下が被居らない時には、全然男氣が無いんですしね……。」

「うむ考へると然うかな。主の無え女だなんぞと思つて、大に橫戀慕でも爲やがる奴があると大變だからな。」

「何ですよ。眞面目で云つてれば、又其樣……。」

「冗談ぢや無えんだぜ。全く氣になつて來たからよ。お客の中にだつて、隨分大箆棒が無えとも限らねえ。然し丸髷にせへ結つてりやア、口説かれたつてな……。」

「最う爲樣が無いねえ。貴下は……。」と叱る樣に云つたが、直ぐ眞面目になつて、「其樣馬鹿な事は有りや爲ませんけどもね、全く男氣がないと夜なんぞは何だか氣味が惡くつてね……。」

「强姦だの、顏切だのが流行るッてえからな。」

「まア、お聞きなさいよ……。」

「留守番に劍術の先生でも賴まうか。」

「最う後生ですからさ、些とは眞面目にお成んなさいなねえ。」

「はい。」

「又其樣……最う能御座んす。覺醒の癖に其樣事ばッかり云つてらッしやるなら最うお酒なんか、到底上げられませんからね。能う御座んすか。」

「はゝゝは。そいつは大へこみだ。」

「其んなら、些とは私の云ふ事も聞いて下すつたら可いぢや有りませんか。」

「うむ。何だい。」と漸く冗談も云疲れたと云ふ樣に氣の拔けた聲で、利兵衞は肱を突いて身體を横にしながら、片手に卷煙草を出した。

「點けませう。」とお浪は鏡臺を離れて、男の傍に膝を摺寄せ、莨へ火を點けて一服した後男に渡した。

勝手ではお兼が最う仕度を爲了つたと見え、障子を明けて、丁度膳を持ち出した處である。お浪は立つて銚子を準へ火鉢の銅壺へ燗を付けた。何時も變らず、横町は晝ながら浮世を思はせる車の音もない。近所の稽古三味線が、單調なる響を以て、暫しは時間の進みを妨げて居る樣な心持をも爲せる。そして折々は近くの家に飼はれて居るらしい鶯が得も云はれぬ啼音を聞かせる。

お浪は今日の機會を失つてはと思つたのか、最う薄化粧の眼の緣をぽつと爲せながら、何處か注意深い眼色で男の樣子を怠りなく眺めて居た。

兩親と我兒とを自分の傍に引取つて、一家團欒の幸福を造りたいと云ふ望み――お浪は遂に心を決して其の旨を申出したのである。

豪放なる利兵衞の返事は如何であつたらうか……。

「其様事は何うともお前の可い様に爲るが可い。」

利兵衞は最う酔ひ倒れる様に肱枕をした。

此様に容易く承諾されるものなら、何故最と早く云出さなかつたのだらう。お浪は思はず涙を流さぬばかり、聲を亂して、

「あなた。眞實に、眞實に可いんですか。」

「可いも惡いも……お前の家の事に、乃公が何も妨げを爲る譯ア無えんだから、可い様にお前の心まかせに爲るが可いんさ。お前の身になつたら、年寄の事だ一日も早く引取つて世話をするが可いや。」

「あなた眞實に御恩は忘れません。」と遂に聲を顫して眼の中には溢れぬばかりに涙を浮べた。

「はゝは、如何したもんだ。つまら無え世話場を演つちや、乃公の方は何と云つて可いか、臺詞に困つ了ふぢや無えか。」と利兵衞はお浪の様子に、起上つて、呆れる如く其の顏を眺めたが、「お前は馬鹿氣て親思ひだなア。」

お浪は氣まりが惡るさうに俯向いて、窃と襦袢の袖で眼を拭いた。

「乃公なんかは、生附きの親不孝だ。餓鬼の時から未來は地獄へ行くと決つてた様なもんだ。人間は如何して斯うも違ふもんかなア。お浪お前なんぞは一體何處から其様に親孝行してえと云ふ考へが出て來るんだ。」

奇異なる質問に對して、お浪は容易く適當なる答を見出し得なかつた。

「矢張、子供の時から親孝行だつたのか。」

「さうですね。子供の時分には、家がまだチャンとして居ましたから、別に何の考へもありませんでした。名古屋の方へ御奉公に出る様になつてからだつて、矢張まだ其れ程の深い考へも起りや爲なかつたんですが、勤めをする様に成つてから……。」

「おッと、待つて呉れ。乃公にや先づ其れからして呑込め無えんだ。昔ならば無理づくと云ふ事もあるが今ぢや兎も角、當人が立派に承知したと云ふ印形が無くちや成らねえ。乃公見た様な身になると、親孝行にも事によると。身を賣つてまでと云ふ覺悟にやなか〳〵成れるもんぢや無えと思ふんだが……先づ其れから聞かして貰ひてえものだ。」

此はお浪自身の心にも到底解すべからざる疑問であつたらう。只だ其の後になつて、能くも斯る事を爲し得たと、屢自分ながらも呆れるばかりなので、殊更提出せられた質問に

對しては、愈々當惑を重ねるより爲樣が無い。

「覺悟の何のつて、其樣事を云つてる暇なんか有りやア爲ませんよ。只だ母樣が泣いて相談なさるから、最う私は只だ悲しくつて、何が何だか、只だ私の身體で濟む事ならつて：：最う全く夢中なんでしたからね。」

「夢中か：：：成程。」と云つたが、又首を傾げて、「然し其の時、お前は親の云ふ賴みを、無法だ無慈悲だとは思はなかつたのか。」

「矢張夢中ですもの。悲しくつて其樣事を：：：。」

「さうかな。其の後になつては如何だつた。」

「さうですね。病院へ始めて這入つた時なんぞには、つく〳〵親の爲めだとは云ひながら、辛いもんだと眞實に悲しいと思つた事もありましたけれど、今更怨んだ處で爲やうが無いんですからね。只だ悲しいとばッかりで、其の中には勤にも馴れて了ひましたからね：：：。」

「ふーむ。不思議なもんだな。然しまア、賣られる方の心は其れとして、賣る親の心持と云ふ奴が、又不思議なんだテ。乃公の事たから、隨分惡事は好きな方だ。何んでも情知らずで押通す方なんだが、其れ丈け、手前の娘や餓鬼の世話なぞに成らうと云ふ考へは何うしても起らねえ。乃公の仲間なんかにや能くある奴だ。娘をばらした金で山を爲樣と企てやがるが、意氣地のねえ話だ。手前の事ア手前一人でするが可いんだ。いよ〳〵喰へなくなれア死ん了ふまでの事だからな。はゝゝは。」と利兵衞は自ら愉快さうに酒杯を片手に大く笑ひながらお浪の顏を眺めた。

「貴下見た樣な、物の分つた元氣の方なら可いんですけれどもね：：：。」とお浪は最う餘儀なさゝうに云ふのである。

「分るも分らねえも：：：其樣理窟の入つた話ぢや無え、全體餓鬼なんてえものは拵へたくねえと思つても、ひよこ〳〵出來やがるもんだ。出來りやア爲方が無え。見殺しにもされ無えから一人前に養育てゝやるのが、此ア天然の人情なんだ：：：犬だつて猫だつて矢張さうだ。然し、畜生の方が餘程意氣地があるぜ。大くなつ了へば最う親だの子だのと、七面倒臭え事ア云つてや爲ねえ。何時までも親だの何のと、育てた恩を忘れずに覺えてるのは、意氣地の無え人間ばかりだ。」

お浪は幾分か呆れた樣に、利兵衞の顏を眺めた儘であつたが、然し何とも云返す事が出來ないのである。利兵衞は一層愉快さうに、

「はッはゝゝは。」と又もや身體を搖つて笑つた。

第十五

翌日の朝、利兵衞が歸ると、お浪は此日ばかりは掃除もそこ〳〵にして、直樣手紙でいよいよ兩親を迎へる手筈の附いた事を知らせ、旅費其の他の費用を爲替に組んで、一日も早くと其の出京を促した。萬事を母親に任して居る老耄した父親は手紙をさへ書き得ぬ樣になつたのであらうか、其の返事は母親から、幾日の何時に出發する旨を通知して來たが、其の通りに冬の夜汽車はお浪の一家を無事に新橋へと運んで來た。其の翌日には娘のお種が去年から預けられて居る深川のお松が家から迎ひの車に乘せられ嬉しさに雀躍しながら歸つて來た。寒い一月の日を、お浪は今迄此樣に暖く感じた事は恐く有るまい。始めて孫の顏を見た父親の驚きと、母親の嬉し泣と、軈ては一同の喜び笑ふ聲に滿されて、長火鉢の一室は暖室の樣に蒸されてしまつたのである。無論近所から取寄せた聊かなる料理の膳も出て居る。お浪は辭退する兩親に各三四杯の酒杯を强ひると、父親はかの詐欺事件の保險會社が前祝の時に飲んだ以來最ら何年と酒の匂さへ嗅ぐ事が出來なかつたと云つて、

又も嬉し涙を溢した。あゝ全く其の夜の僞りなる寸時の幸福は、怖るべき非運の前提であつたので乃ちお浪が身を賣つて以來今日と云ふ今日まで、一家は決して心から笑ふ樣な團欒をする事は出來なかつたのだ。

然し其れも漸く終りに近付いて來た。いよ〳〵明日からは此の一ッの屋根の下に、一家の生活は幸福なる其の出發を始むべき場合になつたのである。

兩親とお種は勝手に續いた四疊半の一間――今迄はお兼の室であつた後へ寢起をする。お浪とお絹とお兼の三人は帳場の六疊に寢床を竝べたので、利兵衞が宿泊する時には客座敷の一間を使ふ事にした。お種は近所の小學校へ通ふので、其の世話は凡て母親のお慶が引受ける。妹のお絹はお兼の手助にと客の席へ酒を運んだり、掃除を爲たり、萬事自ら進んで、眞目々々しく働き出した。

營業は勉强の結果いよ〳〵盛運に向ふばかり。お浪が最初に氣遣つた程ではなく、多人數の生活費は月々樂に稼出す事が出來るので、其年のお盆にお浪は一家の人數を連れて近くの新富座を見物した。又寒い冬の始めに成つた時はめい〳〵に相應の衣服をさへ新調してやつた。一年の月日は此の如く幸福に過去つた。否、新しく進んで來る翌年の正月。お

浪は今年こそ始めて圓滿なる人生の幸福に接し得たと思ふ事が出來た。老いたる兩親は暖な綿厚き衣服を着け幼い娘は其の愛らしい面を白粉と口紅で美しく飾立てゝ居る。お絹は姉お浪の衣服を仕立直した小袖の春着を粧ひ、格子の外へ出てお種の相手に追羽子を突いたが、此例しなき一家の喜びと共に、商賣は又去年の春の景氣どころでは無い。短き日も稍傾き初める頃には、人の出入の絶えない爲めに、お浪は午前の掃除を了つて僅か正午過ぎしか、おちおち坐つて煙草を呑む事も出來ない位。此種の營業が何程不安心なものとしても、最う其の前途を氣遣ふ事は愚であらう。此の分ならば、例へ今が今、利兵衞の手を離れた處で、立派に獨立して行けぬ事は無いと、お浪は遂に心から安心の吐息を吐く事が出來る樣になつたのである。よく働く若い美しい女將として、お浪の評判はます〳〵よい。

斯うなると、以前勤めを爲た女だと云ふ事も、多情なる遊蕩者には却つて一種の興味を感ぜしめるので有つたが、嫌てはお浪ばかりで無く此の人達には妹のお絹も何時となしに或る注意を呼ばせる樣になつて居た。

お絹は最う十六になつたのである。圓い豐艶しした愛嬌ある顏立は昔の姉其の儘であつたけれど、身長は人並よりも先づ低い方で、一二年前からは目に見る如く、肥つて來た處か

ら衣服の上からでも、容易くその肉付を思ひやられた。春も早や過ぎて昨日邊からは、瓦斯双子の初袷を着たので、乳から腰の邊り、殊に黑繻子の襟を押開る樣に、其の半襟の間から現れた胸元の美しさは、一層引立つて見えた。髮を潰髷に結つて赤い鹿子絞の結綿を掛け、紫繻子と匹田染の唐縮緬の腹合帶をお太鼓にして、派手な前掛を締めた姿は、僅か今より一ヶ年前に田舍の街から出て來た娘とは、誰とて思ひ付く事は出來まい。其の風俗ばかりでは無く其の言葉遣ひも最早や少しの國訛りをさへ殘さぬ樣に能く花柳社會の輕佻なる調子を學び得て居た。去年まで、娘は遠い列車の響を除いては、殆ど車の音さへも聞く事の出來ない寂しい町端れの佗住居、または幽邃なる寺院の藥屋に、老たる兩親と老いたる和尙、老いたる寺男の外には、全く浮世の人に接した事は無かつたのである。頑是なき幼心には一家が零落の悲しみからも殆ど無頓着に成長したので、世の中は只だ、靑々した樹木、靜な河の流れ、廣い大空と明い太陽の光ばかりのやうに思つて居た。其れが忽然、何と云ふ變化であらう。自分から女中の手助をと云出したものゝ、最初の中は殆ど呆然として居るばかりであつた。殊に此邊の小待合は藝者の寢宿りを專門とし、次いで高等淫賣婦の出入する事も盛んなので、お絹は屢見るに堪へぬ醜態を目擊する場合なぞには、最う

自分から恥しさと怖しさとに襲はれて、客が手を鳴らしても、其の暗い祕密の座敷へ這入る事が出來なかつた。姉さんは如何して、此樣厭らしい不思議な宿屋の女主人になつて居るのだらうかと、疑惑の念に驅られると共に、此の「待合」なる營業の意義はお兼からの說明を待つても、到底了解し得べきものでは無かつたのである。

然し三月、半年と經つ中に、お絹は漸く罪惡の有樣にも馴されて來て、「旦那あちらへどうぞ。」と賣春の夜具をも平氣で敷延べる事が出來る樣になると程なく賣淫の意義、待合の必要――暗黑なる此の社會の事情をも、自然と解釋する事が出來て來た。續いては誰から聞いたとも無く、今迄深く自分には祕密にされて居た姉の身の上から、白髮の利兵衞と其れに對する姉の樣子なども、最う盡く明白になつた。すると、お絹は其の當座、今迄は決して覺えた事のない悲しい樣な怖しい樣な何とも云へぬ暗い心持に沈められて了つたが、軈て一月二月三月程も經つと此れも自然と消え去る樣になつて、お絹は始めて、此に極く朧ろながらも、何か知ら、世間を見たと云ふ樣な氣になつた。客の座敷へ出る折々、藝者や淫賣婦などから、種々な浮世の話を聞く事が、最も深い興味を感ずる一ッになつたが、斯うなると最早や客から何の彼のと戲はれる事も、其れ程に恥しく辛い事でも無い樣にな

つて、如何かすると此方からも何か一言位は云返して見る事も出來るやうになる。

するとお客は皆お兼を差置いて、お絹々々と最う此の家には無くて成らぬ愛嬌者になつて了つた。

お絹は何處か云はれぬ得意と嬉しさとを抑制する事が出來ない。出入の女達が、其の容色を賞めそやし抔する時は、只だ其の圓い頰を林檎の樣に赤くした儘、俯向いて了ふけれど、然し心の中では何となく嬉しくてならないので毎朝忘れる事なく必ず鏡を手にする程になつた。お客からの祝儀を姉が貯蓄して、新に調へて呉れた初袷を着た其の時の心持。お絹は自分の姿を飾る事に對しては忘れる事の出來ない愉快を覺えた。わざ〳〵夕方風呂へ行つて歸つて來ると、爽かなる初夏の夜は燈火の色さへ何時もより明い樣に思はれた。白粉の壜や石鹼の箱を押入の手箱へ仕舞つて居ると、入口の格子戸がガラリと開いて、「被入いまし。」とお兼が馳けて出た。

第十六

「佐藤さん、昨晩はお樂しみ、何方へ被入つたの？」